

ISSN 2434-513X

東アジア日本学研究

第5号

Japanese Studies in East Asia

No.5

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

2021年3月20日発行

巻 頭 言

2020年初頭から懸念され始めた新型コロナウイルスの感染流行が一年経った今でも続いている。続いているどころか、第1波で終息すると思いきや、世界各地で第2波、第3波が発生し、そのたびに感染規模がさらに拡大し猛威を振るっている。ワクチン接種が始まったとはいえ、未だに先が見えない、近年まれに見る悩ましい事態である。

この世界的規模での辛苦を伴う経験によって、国際化・グローバル化をもはや手放して肯定し謳歌する時代は終わったと考えざるをえない。グローバル化が事態を悪化させ、パンデミックを招いた側面を否定できないからである。その意味で、この一年は、近年急速に浸透し定着しつつあるグローバル化の負の側面があぶり出され、グローバル化に警鐘を鳴らすことになったといえることができる。

とはいえ、いったん動き始めた国際化・グローバル化の流れをもはや止めることはできない。グローバル化の流れはますます進展し、やがて世界の隅々にまで行きわたるにちがいない。では、そのような社会動向の中にあって、今後何度も生じる可能性がある世界的規模での災厄、とりわけ社会の多方面に影響をおよぼす災厄にいかに対処すべきか。また、私たちの東アジア日本学研究学会として何をすべきなのか、何ができるのか。学会として真剣に考えてみる必要がある。

さて、この学会誌5号には、論文10本および研究ノート1本が掲載されている。今も続く新型コロナウイルス禍のなかにあって、それへの対応策や授業関連準備の作業が増大するなか、これだけの論文投稿を得ることができたことに対し、まずは執筆者諸氏に感謝申しあげたい。内容的には、語学関連の論文のほかに、大学改革に関するもの、近代詩に関するもの、合気道のグローバル化に関するもの、寅さん映画に関するもの、農村問題に関するものなど、多彩な興味深い論文によって構成されている。本誌も、言語学分野を中心に、社会・文化・歴史分野の研究者を擁する本学会の特徴があらわれている内容となった。

ところで、東アジア日本学研究学会は、東アジア地域の日本学研究者を中心とした国際学会であり、いわば、国際化・グローバル化の世界的な流れを背景に誕生した学会である。しかし、国際化・グローバル化が必ずしも歓迎すべき側面のみを持つ社会動向ではないことを経験したいま、東アジア日本学研究学会は、日本学に焦点をあてつつ、グローバル化の負の側面にも具体的に焦点をあて、その特徴と対処法を明らかにする作業を始めなければならないのではないか、というのが今の私の私見である。

引き続き、東アジア日本学研究学会のさらなる発展に向けた会員諸氏の奮闘努力に期待するところである。

東アジア日本学研究学会会長 安達義弘

目次

巻頭言	安達義弘(東アジア日本学研究学会会長)	1
-----	---------------------	---

【論文】

南明世	「V1-忘れる」「V1-のを忘れる」「V1-ことを忘れる」の使い分けについて	3
張曉蘭	TEAに基づく日本語学習者の他者支援から自律学習への変化 —中国人結婚移住女性のケーススタディーを通して—	13
董欣	日本語独習におけるソーシャル的な特徴について	21
力丸美和	日本の大学におけるイノベーション戦略 —教育のオープン・イノベーションに関する考察—	31
李成愛	卒業論文における中国人日本語学習者の接続詞の使用実態について —「順接」関係の接続詞に注目して—	41
楊明	疑似疑問表現文末型“是不是”構文に関する一考察 —「認識喚起」における共起表現の形式と語用論的機能を巡って—	51
池孝民	近代詩形成期における『学之光』の意義について —『学之光』誌の詩を中心に—	61
村下慣一	グローバル化と競技化に直面する合気道の課題とは何か —日本、グローバル化するスポーツ、N・エリアス「文明化過程論」—	69
仲矢信介	寅さん映画のイデオロギー —起こること、起こらないこと—	79
金珽実	鉄嶺安全農村と教育	89

【研究ノート】

杉村泰	中国語話者における複合動詞「V1-疲れる」の母語干渉の可能性について	99
-----	------------------------------------	----

学会役員		109
学会動向	李東哲(東アジア日本学研究学会副会長)	110
会員消息	李東哲(東アジア日本学研究学会副会長)	111
東アジア日本学研究学会会則		112
『東アジア日本学研究』投稿要領		115
『東アジア日本学研究』執筆要領		117
『東アジア日本学研究』査読要領		118
編集後記		120

「V1-忘れる」「V1-のを忘れる」「V1-ことを忘れる」 の使い分けについて

南 明世（名古屋大学大学院生）

要旨

本論文はコーパスを利用して行為の過程における記憶の段階の観点から「V1-忘れる」「V1-のを忘れる」「V1-ことを忘れる」の3つを比較した。行為の過程における記憶の段階とは、第1段階として「～しよう」と意図することから始まり、第2段階として実際の行動が行われるとし、①～④の4つの段階に分けたものである。まず何も意図していない時を①とし、行為をしようとする意図が頭に銘記され（①）保持される（②）のが第1段階、その後しようと思ったことを実際に行動に移し、その行動が頭に銘記され（③）行動が終了した時点でその事実が保持される（④）のが第2段階である。このうち、「V1-忘れる」は第1・2段階の保持（②④）で銘記した記憶を失念する際使用される。失念するのは記憶としてのモノであり、「を」格に実際に失念する対象がくる他動詞で限界動詞がV1になる。特に②の意味（言い忘れるなど）が多く、④の場合は「入れる」などの設置動詞がV1になる。「置き忘れる」の②の場合は「V1-のを忘れる」「V1-ことを忘れる」を使用するなど使い分けがみられた。「V1-のを忘れる」「V1-ことを忘れる」は②、④以外に、①段階での意図していない事柄の失念（悲しむことを忘れる）、③段階でのコトの失念として、V1 することの失念（時間が経つのを忘れる）を表すものがあり、コトを表すことができるという点で「V1-忘れる」と異なる。

キーワード： 複合動詞、V1-忘れる、V1-のを忘れる、V1-ことを忘れる、コーパス

はじめに

影山（1993）は日本語の複合動詞を統語的かどうかという基準から、「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の2つに分類している。このうち「統語的複合動詞」は「「手紙を書き終える＝手紙を書くことを終える」のように、補文関係として分析できる」（p. 78）と述べている。つまり「V1-忘れる」を例に考えると（1a）と（1b）は言い換えができるということである。

- （1） a. 大切なことを彼に言い忘れた。
 b. 大切なことを彼に言うことを忘れた。

しかし日本語母語話者に聞くと (1b) は少し不自然で (1c) が自然であると判断された。

(1) c. 大切なことを彼に言うのを忘れた。

(1a) ～ (1c) は何らかの要因で使い分けられていると考えられる。本論文では「V1-忘れる」「V1-のを忘れる」「V1-ことを忘れる」を例に、コーパスから抽出した例文をもとに使い分けの特徴を考察することを目的とする。

I. 先行研究

杉村 (2005, 2006) では「V1-忘れる」の意味を次の 1～3 の 3 つに分類している。

1. ～することを失念する 例：答案用紙に受験番号を書き忘れた。
2. ～したことを失念し、うっかり放置したままにする 例：電車に傘を置き忘れた。
3. ～したのを覚えていない 例：おいおい、俺の顔を見忘れたのか。

このうち「置き忘れる」は 2 の意味だけでなく 1 の意味としても使われると述べている。しかし、実際の例をみると「置き忘れる」はすべて 2 の意味しかみられず、1 の「置いてくることを失念する」の場合は「置くことを忘れる」と表現され使い分けがみられた。このことから「V1-忘れる」「V1-のを忘れる」「V1-ことを忘れる」の違いを見る必要があると思われる。

II. 検索方法

本論文では「V1-忘れる」「V1-のを忘れる」「V1-ことを忘れる」を現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ) から中納言を使用して検索した。検索条件は次の通りである。

「V1-忘れる」キー：品詞-大分類-動詞 後方共起条件 1：語彙素読み「ワスレル」	「V-こと/の+格助詞+忘れる」：キー：品詞-大分類-動詞 後方共起条件 1：語彙素読み「コト/ノ」 後方共起条件 2：語彙素読み「ヲ/モ/ハ/φ」 後方共起条件 3：語彙素読み「ワスレル」
--	--

以上のようにして検索した結果をまとめると表 1 のようになる。

表 1. 「忘れる」の出現数

V1-忘れる	出現数	の	出現数	こと	出現数
V1-忘れる	607	V1-のを忘れる	393	V1-ことを忘れる	570
		V1-のも忘れる	117	V1-ことも忘れる	190
		V1-のは忘れる	9	V1-ことは忘れる	26
		V1-の忘れる	133	V1-こと忘れる	2
合計	607	合計	652	合計	788

Ⅲ. V1 の特徴

3 章では BCCWJ で検索した例をもとに、V1 の特徴から 3 つの表現の違いを考察する。表 2～4 は「V1-忘れる」「V1-のを忘れる」「V1-ことを忘れる」の V1 の出現数上位 20 位までの例を示したものである。「V1-忘れる」の述べ語数は 607 語、異なり語数は 79 語、「V1-のを忘れる」述べ語数は 652 語、異なり語数は 180 語、「V1-ことを忘れる」の述べ語数は 788 語、異なり語数は 196 語であった。各表の割合は述べ語数における出現率を表す。表 2 の「④」は後で述べる「V1 したことの失念」の意味で使用されたものであることを表す。

表 2. 「V1-忘れる」

	V1	数	%
1	置き	107	17.6
2	言い	50	8.2
3	し	47	7.7
4	撮り	43	7.1
5	書き	42	6.9
6	買い	36	5.9
7	入れ	29	4.8
8	飲み	20	3.3
9	聞き	19	3.1
10	取り	18	3.0
#	消し	18	3.0
12	閉め	15	2.5
13	掛け(施錠)	13	2.1
#	仕舞い	13	2.1
15	見	12	2.0
16	出し	8	1.3
17	見④	7	1.2
18	貼り	5	0.8
19	歌い	4	0.7
#	掛け	4	0.7
#	打ち	4	0.7
#	納め	4	0.7
#	付け	4	0.7

表 3. 「V1-のを忘れる」

	V1	数	%
1	する	95	14.6
2	経つ	60	9.2
3	撮る	23	3.5
#	てくる	23	3.5
5	ている	22	3.4
6	入れる	20	3.1
#	聞く	20	3.1
#	言う	20	3.1
9	行く	13	2.0
10	取る	10	1.5
#	という	10	1.5
12	出す	9	1.4
#	買う	9	1.4
#	書く	9	1.4
15	いる	8	1.2
#	ておく	8	1.2
#	持っていく	8	1.2
18	ていく	7	1.1
#	更ける	7	1.1
#	見る	7	1.1

表 4. 「V1-ことを忘れる」

	V1	数	%
1	という	144	18.3
2	である	132	16.8
3	ている	80	10.2
4	する	67	8.5
5	ある	56	7.1
6	いる	24	3.0
7	ておく	13	1.6
8	なる	10	1.3
9	付け加える	7	0.9
10	そういう	6	0.8
11	にする	5	0.6
12	褒める	4	0.5
#	見る	4	0.5
14	悲しむ	3	0.4
#	書く	3	0.4
#	できる	3	0.4
#	飲む	3	0.4
#	入れる	3	0.4
#	居る	3	0.4
#	てくる	3	0.4
#	とる	3	0.4
#	言う	3	0.4
#	立てる	3	0.4

1. 「忘れる」の意味

芋阪 (2014) では「忘れる」は「記憶する」がもつ「銘記 (符号化)・保持 (貯蔵)・想起 (検索)」の 3 つの段階のうちどこかの段階でうまくいかなければ忘れることになる」と説明している。これを受け、本論文では行為が行われる過程のどの部分が「銘記・保持・想起」を指すのかを図 1 に示した。

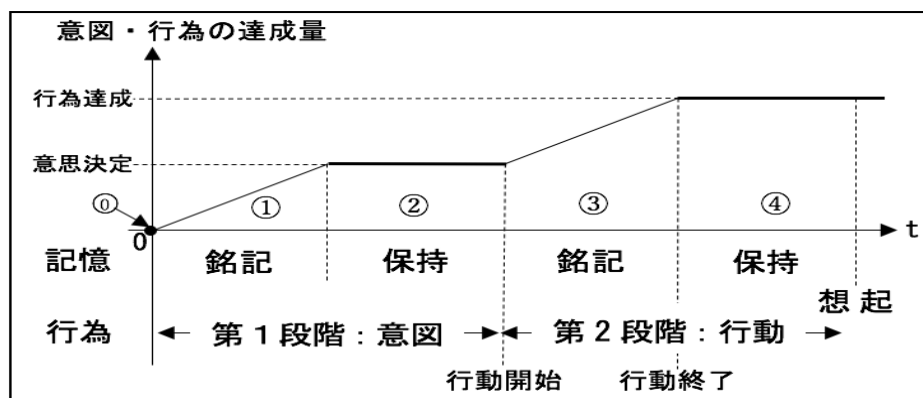


図 1. 意志動詞の行為の過程における記憶の段階

縦軸が意図・行為の達成量で横軸が時間である。行為は第1段階として「～しよう」と意図することから始まり、第2段階として実際の行動が行われる。「言う」を例に考えると、まず何も意図していない時が①である。次に「言おう」と思い始めてから決心するまでが①の段階で、その意思を頭に保ち続けるのが②の段階である。その後「言おう」と思ったことを実際に行動に移し、その行動が頭に記憶されるのが③の段階で、行動が終了した後にその記憶が保持されるのが④の段階である。「忘れる」は銘記した記憶を保持できない場合に起こるものであり、主に②または④の保持の部分で生じる。複合動詞の「V1-忘れる」の場合、V1 することの失念は②の段階、V1 したことの失念は④の段階での失念を表す。

2. 「V1-忘れる」の特徴

「V1-忘れる」には「V1 することを忘れる」という意図の記憶の保持段階（図1の②）での失念を表す場合と、「V1 したことの失念」という行動の記憶の保持段階（図1の④）での失念を表す場合とがある。

まず、②の「V1 することを忘れる」の場合について述べる。この場合、表2に示されるようにV1には他動詞が来やすい。特に(2)の「大切なことを言い忘れる」のように「を」格に作用の向けられる対象がくる動作動詞が大半を占める。

(2) あっ、そうそう、大事なことを言い忘れるところでした。

(堀内伸浩『「書く」マーケティング』)

そのため「言い忘れる」で忘れられているのは「言う行為」(コト)ではなく、「言おうと思っていた記憶」(モノ)であると考えられる。このような動詞を衛(1991)ではモノのクノテーション¹⁾を持つ具体性動詞と呼んでいる。

また②の「V1 することの失念」の意味を持つものは基本的に限界動詞で、非限界動詞と共起する場合は(3)のように不自然になる。これは国立国語研究所の「多言語母語の日本語学習者横断コーパス」から出現した中国人日本語学習者の誤用である。

(3) *今朝バスを追うため、急いで、鍵を持ち忘れてしまいました。

この場合、日本語母語話者は「持ってくるのを忘れた」「持ってきて忘れた」あるいは「置き忘れた」を使用すると思われる。「持つ」は非限界性をもつため、他動詞でも「V1-忘れる」と共起しにくい。しかし(4)のように頻度の言い方であれば使用できる。

(4) 新しいPCを買ってからデジカメのSDカードを持ち忘れてることが多くなりました。
(Yahoo!ブログ)

次に図1の④の「忘れる」は行動の記憶の保持段階の失念で、「V1 したことの失念」を表す。この場合、(5)の「入れる」や「置く」「仕舞う」のような設置動詞が使われる。

(5) 一貫目のロースビーフをオープンのなかへ入れ忘れたまま、真黒にするようなへまばかりを仕出かした。
(椎名麟三『作家の自伝』)

このうち、BCCWJで「入れ忘れる」は30件中1件、「仕舞い忘れる」は14件中1件が④の意味で使用されていた。しかし「置き忘れる」はすべて④の意味で使用されており、②の意味の場合は「置くことを忘れた」や「置くのを忘れた」の形で使用されていた。

表5は国立国語研究所の「日本歴史コーパス(CIJ)」から中納言を使用して、「キー：品詞-動詞、後方共起条件1：語彙素読み-ワスレル」で検索したV1を時代別にまとめたものである。全体の出現数は少ないものの、近世までは「思う・取る・打つ」などの接頭語がついたものや「見る・置く・待つ」について④V1したことの失念を表すもののしかみられなかった。しかし、近代から②V1することの失念の用法がみられるようになる。つまり、現在「V1-忘れる」は②の意味が多いが、古語では④の意味で使われていた。これは

表5. 「V1-忘れる」の歴史的変移(出現数)

	奈良	平安	鎌倉	室町	江戸	明治	大正	昭和
見④	1	1	1	3	7	3		1
思ひ	1	16	14	1	2			
賜ひ	1							
思し		17	1					
思し召し		2		1				
取り		2	1	1				
すて		2						
思ほし		1						
ご覧じ			1	1				
置き④					1	5	5	3
待ち④					1			
寝					1			
打ち						18	2	
言い①						1	2	
返さ①						1		
閉ざし①							1	
就き①							1	
紛れ①							1	
合計	3	41	18	7	12	29	13	4

「V1-かける」²⁾にも同様の結果が得られている。

次に「見忘れる」は第2段階の行動の保持での失念であるため、④V1したことの失念であるが、(6)のようにV1の出来事自体が記憶からなくなり「V1したのを覚えていない」という意味をもつ。

(6) 病気がかなり悪化してから親父は人の顔をほとんど見忘れるほどだったが、…

(長門裕之『洋子へ』)

表2のうち、②の「見ることを忘れる」は12件あるのに対し、④の「見たのを覚えていない」は7件であったが、この7件は1960年以前に使用されていた。

3. 「V1-のを忘れる」の特徴

「V1-のを忘れる」はV1がル形の場合には図1の②「V1することの失念」の意味を表し、タ形の場合には④「V1したことの失念」の意味を表す。②は「V1-忘れる」と言い換えられ、V1が動作動詞の限界動詞である場合が多い。それは、「の」が持つ「モノタイプ」（辛いの/ ものが食べたい）と「コトタイプ」（満点がとれたの/ ことが嬉しい）のうち、前者の意味として、モノに作用する「V1-忘れる」と同じ意味を持つからである。「V1-のを忘れる」には②④の意味以外に（7）のようにV1に時間を表す「経つ」「更ける」をとるものがある。「経つ」は先の表3で2番目に多く出現している。

（7）大人たちは時間の経つのも忘れて楽しめます。

（佐藤よし子『英国スタイルの家事整理術』）

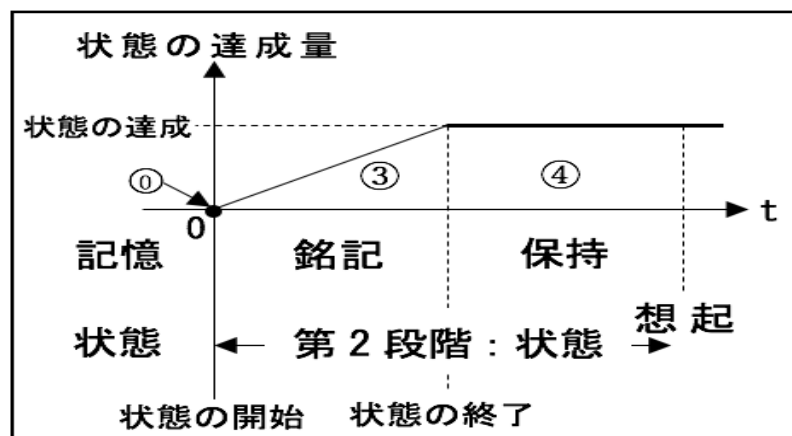


図2. 無意思動詞の状態の過程における記憶の段階

図2は状態の過程における記憶の段階を表した図である。これは図1と違い、意図の段階（①②）がないものである。（7）の場合、楽しみが始まった時点が①で、その時間経過を表すのが③、楽しみが終わった後に、その記憶が頭に保持されている時間が④の段階である。ここで「時間が経つのも忘れる」は、時間が経過している途中でそのことが頭から離れることを表すため、③の段階での失念を表していると考えられる。また、「時間が経つことを忘れる」はBCCWJからは出現しなかったものの、インターネットでは（8）のような例がみられた。このようにこの「の」は「こと」と置き換えられるため、コトタイプだと考えられる。そのため、モノタイプの「V1-忘れる」（*経ち忘れる）には言い換えられないのである。

（8）懐かしい話に花が咲き時間が経つことも忘れてしまいました。

(<https://www.komei.or.jp/km/nagano-matsui-hideo/2015/08/27/30年ぶりの再会/>)

2020年11月5日閲覧

4. 「V1-ことを忘れる」の特徴

「V1-ことを忘れる」は他動詞でル形の場合には②「V1 することの失念」を表し、タ形の場合には④「V1 したことの失念」の意味を表し、②は「V1-忘れる」「V1-のを忘れる」と、④は「V1-のを忘れる」と言い換えができる。しかし「言い忘れる・言うのを忘れる」は②「V1 することの失念」にとりやすいが、「言うことを忘れる」は「言う内容を忘れる」という実質名詞としてとりやすい。他にもV1が「書く」「話す」などの場合に実質名詞として使用されやすい。また(9)の「であること」や「ということ」の「こと」も実質名詞として使われている。これらは「の」と言い換えができるが「V1-忘れる」では言えない。

(9) ここが島であることを忘れるほど海に出会わない。(中尾隆之『旅の手帖』)

また、「V1-ことを忘れる」には図2の⑩で示した意図していない事柄の失念の意味をもつものがある。この場合、V1には(10)の「悲しむ」のような無意志自動詞が来て、「悲しむべき時に悲しむことをしなかった」というチャンスを逃したという意味を表す。他にもV1には「泣く」「生きる」「死ぬ」などが来る。「V1-のを忘れる」はBCCWJからは出現しなかったが、インターネットからは(11)のような例がみられた。

(10) ひょっとすると今の若者たちは悲しむことを忘れてしまったのではないか、
 えることがあるのです。(五木寛之『生きるヒント』)

(11) ドラマや映画にどっぷり浸ることで悲しむのを忘れてしまうという効果があるの
 です。(https://www.statusparty.jp/lightup/heartbreak-recovery-method/)

2020年11月5日閲覧

このような言い方はコトを表すため「V1-忘れる」では使用されないが、インターネットでは(12)の「死に忘れる」のような例がみられた。

(12) 80代ばあちゃんは「生きるの嫌になった」と言い、90代ばあちゃんは「確かに飽
 きてくる」と言うけど、かつて私が接した中でも最高齢の104歳のばあちゃんは「
死に忘れた」と言って朝起こしに行くと「どうも、今日も生き残りました」と敬礼
 す る 人 だ っ た 。

(https://twitter.com/0rororeo/status/1300956309550821376)

2020年11月5日閲覧

このような例は「V1になるべきであったのに、チャンスを逃してできなかった」という意図していない事柄の失念の意味を表す。このような用法は現時点では特殊な言い方であるが、いずれは人口に膾炙する表現になる可能性もあると思われる。

5. まとめ

本論文ではコーパスを利用して行為の過程における記憶の段階の観点から「V1-忘れる」

「V1-のを忘れる」「V1-ことを忘れる」の3つを比較した。「V1-忘れる」は記憶の保持の場面で意図や行為の記憶というモノを失念する表現であり、「V1-のを忘れる」「V1-ことを忘れる」はモノ以外にコトの失念にも使用できる。特に「V1-のを忘れる」は行為中の失念、「V1-ことを忘れる」は意図していない事柄の失念によく使われる。結果を表6に示す。

表6. 「V1-忘れる」「V1-のを忘れる」「V1-ことを忘れる」が表す意味とその使い分け

	V1-忘れる	V1-のを忘れる	V1-ことを忘れる
① 意図していない事柄の失念 (V1 が示すコトの失念)	無意志自動詞 ：?死に忘れる	無意志自動詞 ：悲しむのを忘れる	無意志自動詞 ：悲しむことを忘れる
② V1 することを失念する (V1 の作用が及ぶモノの失念)	動作動詞・限界動詞 ：言い忘れる	動作動詞・限界動詞 ル形 ：言うのを忘れる	動作動詞・限界動詞 ル形 ：言うことを忘れる ※実質名詞もある
③ V1 していることを失念する (V1 が示すコトの失念)	なし	自動詞（主に時間） ：経つのを忘れる	自動詞（主に時間） ：経つことを忘れる
④ V1 したことを失念する (V1 の作用が及ぶモノの失念)	非限界動詞 ：置き忘れる	動作動詞・限界動詞 タ形 ：置いたのを忘れる	動作動詞・限界動詞 タ形 ：置いたことを忘れる
	：見忘れる	なし	なし

おわりに

複合動詞は上級日本語学習者でも使用が難しく、使用の回避が行われていると言われていた。本研究で対象とした「V1-忘れる」は補文構造をもつ「V1-のを忘れる」および「V1-ことを忘れる」と言い換えられる場合があるが、実際には言い換えられない場合もある。今後は学習者の使い分け意識や回避についてもみていきたい。

注

- 1) 衛 (1991) は「聞こえる」を具体性動詞とし、実際に聞こえているのは声や音といったモノであるため、モノのコノテーションをもつと述べている。一方「太郎は花子にプロポーズするのに成功した」のようにある抽象的な事柄に働きかける動詞はコトのコノテーションをもつとしている。また、影山 (1993:155) では寝るのを忘れるほど仕事に熱中しても「*寝忘れる」が言えないため補文の中に目的語が必要であり、「手紙を出し忘れる」は結局「手紙を忘れる」ことだと述べている。
- 2) 菊田 (2008:132) では「V1-かける」について「複合動詞も上代から観察されるが、上代の複合動詞は一般にまだ未発達だったとされ、全体の一体化は進んでいなかった。そのため、形態的には複合動詞であっても、意味は並列的(「V1 して、V2 する」)のようなものと考えられる」と述べている。

参考文献

- 芋阪満里子 (2014)、『もの忘れの脳科学—最新の認知心理学が解き明かす記憶の不思議』講談社。
- 衛東 (1991)、「日本語形式名詞「の」の意味的用法」『上智大学国文学論集』 (24)、143-154 頁。
- 菊田千春 (2008)、「複合動詞「V かかる」「V かける」の文法化:構文の成立とその拡張」『同志社大学英語英文学研究』81-82 号、115-165 頁。
- 影山太郎 (1993)、『文法と語形成』ひつじ書房。
- 杉村泰 (2005)、「コーパスを利用した複合動詞「一忘れる」、「一落とす」、「一漏らす」の意味分析」『日本語教育』第 34 輯、63-79 頁。
- 杉村泰 (2006)、「複合動詞「一忘れる」、「一落とす」、「一漏らす」の用法」『日语学习与研究』2006 年第 4 期 (総第 127 期)、1-6 頁。

The Differences between “V1 *wasureru*”, “V1 *no o wasureru*” and “V1 *koto o wasureru*”

MINAMI, Akiyo

Abstract

The aim of this paper is to make clear the differences between “V1 *wasureru*”, “V1 *no o wasureru*” and “V1 *koto o wasureru*” using a corpus. The memory stage in the process of action starts with the intention of “try to do” as the first stage, and the actual action is performed as the second stage, and it is divided into four stages from ① to ④. First, when you do not intend to do anything, mark it as ①, and the intention to act is encoding in your head (①) and storage it (②) in the first stage, and then, the second stage is to transfer the action. You are encoding in the head (③), and the memory that you acts is stored when the action is completed (④). Therefore, “V1 *wasureru*” is used when forgetting the memory inscribed in the first and second stages of storage stage (②④). Generally, V1 is limit verb in the transitive verb because what is forgotten is a thing as a memory. In particular, there are many meanings of ② in “V1 *wasureru*” (“*ii wasureru*”forgetting to say, etc.), and in the case of ④, the set verb such as “*oku* (put)” is V1. In the case of ② of “*oki wasureru*” are difference between “V1 *no o wasureru*” and “V1 *koto o wasureru*”. In addition to ② and ④, “V1 *no o wasureru*” and “V1 *koto o wasureru*” have two meanings. One is forgetting unintended things (*kanashimu koto o wasureru*) at the stage ① and the other is forgetting things (*jikan ga tatu no o wasureru*) at the stage ③. And it differs from “V1 *wasureru*” in that it can express things.

Keywords : compound verb, *V1-wasureru*, *V1-no-wo-wasureru*, *V1-koto-wo-wasureru*, corpus

TEAに基づく日本語学習者の他者支援から自律学習への変化 —中国人結婚移住女性のケーススタディーを通して—

張 曉蘭（上海海洋大学）

要旨

これまでの研究で、結婚移住女性が地域日本語教室で日本語を身に付け、就職や子育てという活動を通して、生活者として地域社会に参加していることが確認できた。結婚移住女性の地域社会への参加に向けて、必要な支援がどのように変化するのかについて探るべく、ケーススタディーを通して一人の結婚移住女性の地域社会への参加の径路を描いてみた。その過程において、初期には他者支援が必要であり、これで基礎力を養う。その後、自律学習を促す学習目標を持つための支援が必要となる。さらに、自律学習と並行して、より高度な専門知識の供与支援が求められるなど、必要な支援が変化することが明らかになった。

キーワード： 結婚移住女性、地域日本語教室、自律学習

はじめに

これまでの研究で、結婚移住女性が地域日本語教室で日本語を身に付け、就職や子育てという活動を通して、生活者として地域社会に参加していることが確認できた（張 2015a；張 2015b）。結婚移住女性の地域社会への参加に向けて、必要な支援がどのように変化するのかについては、まだ十分に調査されていない。本稿は結婚移住女性が地域社会に周辺の参加から十全的参加に向かう時期における他者支援から日本語自律学習への変化を検討するものである。具体的には、ケーススタディーを通して一人の結婚移住女性の地域社会への参加の径路¹⁾を描き、他者支援から自律学習への変化に伴い、必要となる日本語学習支援を明らかにしようとするものである。

1. 調査

1. 調査対象者

中国人結婚移住女性、金さん²⁾の協力を得て、2013年6月～2016年4月に半構造化インタビューを3回行った。金さんは現在30代後半で、2010年に結婚のため来日した。通訳

のアルバイトと英語教師をしており、子どもはいない。来日前の日本語学習経験はほぼな
いに等しく、来日後、地域日本語教室に通っていた。金さんの事例を取り上げて、彼女が
地域社会において周縁的に参加している状況から密接的に参加する役割を果たすプロセス、
すなわち地域社会への周縁的参加から十全的参加³⁾へのプロセスを描く。分析にあたって
は、主に、2013年6月から2015年2月に亘って行った2回の半構造化インタビューにつ
いての録音データを用いることとし、3回目のインタビューデータを補完的に用いる。

2016年4月に行った3回目のインタビューは、主に2回の半構造化インタビューに関し
て事後の確認を要する点及びその後の学習状況について確認するためのものであり、録音
データを取っていない。

2. 分析方法

調査対象者の金さんに対するケーススタディーのデータについては、TEA (Trajectory
Equifinality Approach: 複線径路等至性アプローチ) を用いて分析を試みる。

これまで、M-GTAを用いた分析を行ってきたが、M-GTAは現象の構造を捉えているため、
結婚移住女性がある時点でどのように日本語を学習しているのかを分析する際に有効であ
るが、日本語を身に付け、地域日本語教室から地域社会へ参加していくプロセスを捉える
のには不十分である。この点において、TEAの「時間が持続する中での対象や現象の変容
プロセス」(境 2015: 193) を捉える方法論が応用できるのではないかと考え、これを採
用した。TEAは時間を捨象せずに人生の理解を可能にしようとする文化心理学の新しいア
プローチで、人生の理解について、構造ではなく、過程を理解しようとする点に特徴があ
る(サトウ 2015)。まず、TEAに関わるいくつかの概念について確認しておく。等至性と
は、異なる径路を辿りながら類似の結果に辿りつくことを示す概念である。多様な経験の
径路がいったん収束する地点であり、研究者にとっては研究目的と関連して設定されるポ
イントでもある。複線径路とは、一つの等至点 (Equifinality Point: EFP) までの径路の
多様さを表す概念である。サトウ (2009) は、当事者がある選択の岐路に立ったとき、提
示された径路を自分自身の辿ってきた径路や経験と重ね合わせ、ズレや異なりや似通って
いる部分を確認しながら、今後の選択を考えるヒントを与えると提示している。本稿では、
「十全的参加」を等至点として設定することによって、時間とともに、十全的参加に至る
過程の出来事や要因を明確に捉えることができるのではないかと考えた。また、両極化し
た分岐点 (Polarized Equifinality Point: PEFP) とは研究者自身が設定した等至点に対
して反対の現象のことを指し、ここでは「周縁的参加」が両極化した分岐点にあたる。分
岐点 (Bifurcation Point: BFP) はある選択によって各々の行為が多様に分かれていく地
点であり、「地域日本語教室をやめる」などの分岐点が示される。非可逆的時間とは人間が
時間とともにあることを表す概念である。必須通過点 (Obligatory Passage Point: OPP)
とは論理的・制度的・習慣的にほとんどの人が経験せざるを得ない経験のことであり、こ

ここでは「地域日本語教室で日本語を身に付ける」がこれにあたる。

近年 TEA を用いて分析される研究が増加してきた。例えば、日本語教育実習に参加した学生の参加過程と意識変容について、三枝（2016）は実習生の変容がどのような社会的文脈のもとで起きたのかを時間的視点を含めた過程に注目し TEA で分析を行った。一人の調査対象者に大学入学からインタビュー時までの日本語教育や将来像について半構造化インタビューを3回行い、データ収集をした。等至点を「将来像を具体化する」という点に設定し、分岐点を「海外語学研修参加」、「海外実習に参加する」、「先輩から雇用環境を聞く」という3つの点に設定した。また、「日本語教育コースを登録する」、「海外教育実習に申し込む」、「海外実習に参加する」ことを必須通過点として設定し、実習生の選択を後押しする社会的要因の「社会的助勢」及び実習生選択を妨げる社会的要因の「社会的方向付け」を抽出して TEM 図を描いた。TEM 図からは、個人の将来像が具体化するまでのプロセスにおける重要な要因が示された。

個人の歴史とその背景にある社会的文脈、個人的文脈との関係性を『社会的助勢』、『社会的方向付け』として視覚的に提示した。『社会的助勢』、『社会的方向付け』の分析から、『制度』『重要な他者』『其の他の環境や経験』という要因が径路選択に影響していることが明らかになった。

（三枝 2016: 28）

三枝（前掲）の例ように、TEA は個人の内面の変容プロセスを描く研究に用いられることが多い。本稿では、Lave & Wenger（1991）に基づき、地域社会への周縁的参加から十全的参加への径路を描くために、金さんに対する3回の半構造化インタビューによって得られたデータの分析に関して TEA を用いることとする。

また、青木・中田（2011）は地域における「生活者としての外国人」の日本語学習支援について、学習者オートノミー（Learner autonomy）⁴⁾の発達を支援する方法を検討すべきであると指摘している。学習者オートノミーとは自分の学習に関する意思決定を自分で行う能力である。学習の目的、目標、内容、順序、リソースとその利用法、ペース、場所、評価方法を自分で選ぶことと捉えられる（青木・中田 2011）。本稿はこの観点から、調査対象者の金さんが、どのように自律的な学習へと移行していくのか、そのプロセスに着目するものである。

II. 調査結果及び分析

調査については、調査対象者の金さんの調査協力を得て、ケーススタディーを行う。ケーススタディーを通して、金さんの地域社会への周縁的参加から十全的参加へのプロセスを描く。

図1はTEAによる金さんの地域社会における十全的参加に至る径路である。金さんの来日前の日本語学習経験に始まり、来日後に他者支援を経て自律日本語学習ができるようになることに着目しながら、専門的な日本語を勉強して就職するという地域社会への十全的参加を果たしていることについて描くものである。

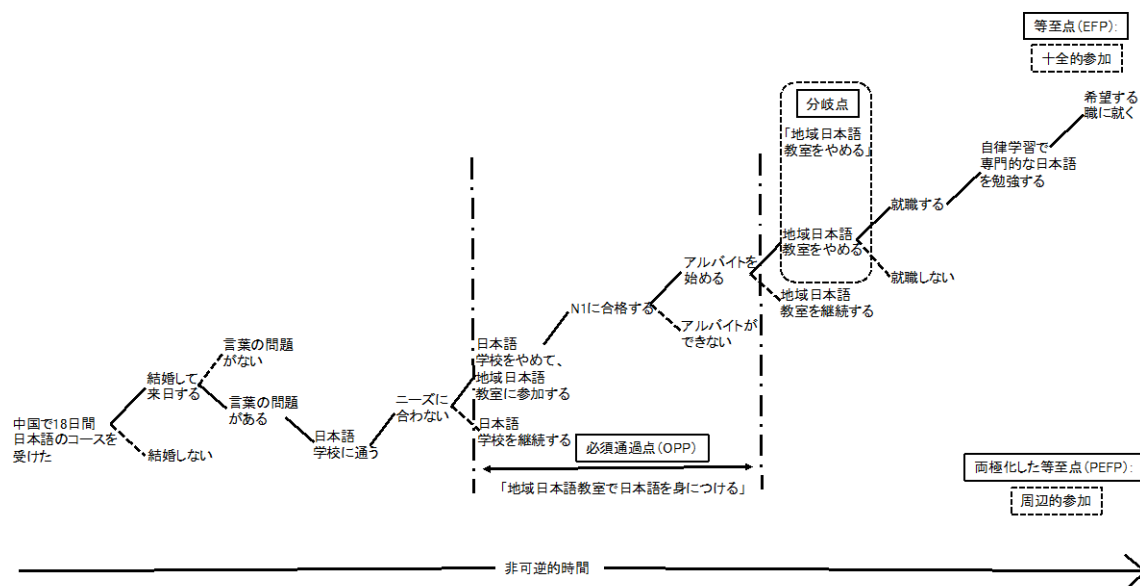


図1 金さんの地域社会における十全的参加に至る径路

金さんは来日する前に、中国で18日間日本語のコースを受けた。日本人の夫と結婚して来日したが、家庭では英語を話している。一方、家庭以外の場所では英語が通じないため、言葉の問題を痛感している。日本語を勉強したいとの希望で、日本語学校に通い始めた。しかし、日本語学校は大学や大学院に進学したい留学生のために日本語の授業が行われており、自分のニーズに合っていないと考え、日本語学校を退学し、友達の紹介で地域日本語教室に通い始めた。地域日本語教室に通って2年未満でN1を取得した。N1に合格してから社会に出て日本語を使ってみたいとの思いが強くなり、コンビニエンスストア(以下、コンビニとする)でアルバイトを始める。また、地域日本語教室では、生活をするのに困らない程度の日本語学習支援が中心に行われていることから、N1に合格した後の受講生への対応がなされていないため、アルバイトを始めたのとほぼ同時に、地域日本語教室に通わなくなった。金さんは来日する前に海外で修士号を取得しており、コンビニでアルバイトをするより、学位を生かせる職に就きたいと思い、独学で専門的な日本語を勉強し始めた。

以上の、結婚移住女性の一人である金さんの日本語学習経験を地域社会への「十全的参加」(等至点：EFP)、「地域日本語教室で日本語を身につける」(必須通過点：OPP)、「日本語教室をやめる」(分岐点：BFP)という経験を軸にして類型化した。このケーススタディ

一を通して、金さんが地域日本語教室に通わなくなることは自律学習に達したからであり、オートノミーを身に付けさせるという意味で地域日本語教室が機能していることがわかる。また、アルバイトではなく、正規の職に就きたいという意思が強くなり、自律学習を通して専門的な知識を勉強し始めたことから、地域日本語教室に通わなくなり、密接的に地域社会に参加し始めること自体は十全的参加の一側面と言える。このように、地域社会における周辺の参加から十全的参加への移行を明らかにした。この過程で、日本語学習が、他者支援による学習から自律学習へと変化することが確認できた。また、他者支援から自律学習への移行は径路選択に影響している要因としてあげることができる。

おわりに

結婚移住女性、金さんの地域社会への参加径路からは、日本語自律学習は地域社会への参加要件の一つであることがうかがえる。1 ケースのデータを一般化することはできないかもしれないが、国際結婚の増加とそれに伴う結婚移住女性の増加は、彼女のように地域社会への十全的参加を目指す日本語学習者も増加することを意味する。本稿で得られた知見はこのような結婚移住女性にも適用できると考えている。

金さんの場合、日本語学習自体を目標とする時期に、地域日本語教室で支援者による足場作りが得られて徐々に日本語学習ができるようになっていった。初期段階では、他者支援が必要であったことがわかる。その後、日本語が一定レベルに達した後、自律的に学習ができるようになる。その時期は同時に更に高い目標を立てた時期でもあり、就職したり、資格取得に合格したりするなどの目標を実現させていくためには、高度な日本語の知識を身につけていく必要があるが、地域日本語教室は、そのニーズに答える支援を提供できていない。地域日本語教室は来日初期の外国人に、生活に最低限必要な日本語学習の支援を提供するために設置されているところが多く、高度な日本語学習の支援を提供することは構造的にも難しい。そのため、金さんのように専門的な日本語を学ぼうとする外国人は、ニーズに合わない地域日本語教室をやめることになるが、それは結果として自律学習を誘引している側面もある。

しかし、この後も日本語学習は続き、その段階に応じて新たな支援を必要とする段階も想定される。筆者のこれまでの調査の対象者のうち、自律学習ができるようになった他の結婚移住女性からも、専門日本語の学習において、自律学習だけでは難しく、支援者を求めているが、そうした支援を与えてくれる人はなかなか見つからないという声が上がっている。日本語が一定レベルに達した調査対象者は更にステップアップしたいという希望があり、地域社会における十全的参加に向けて、高度な日本語指導を求める傾向がある。しかし、地域日本語教室で教えているのは非専門家のボランティアが多く、地域日本語教室での日本語学習支援に限界があることは否めない。自律学習でハイレベルな日本語を勉強し続ける調査対象者はいるものの、他者による支援、指導を必要としている調査対象者も

いる。結婚移住女性のニーズは多様化しており、特に日本語学習の熟練者に対する学習支援について再検討する必要があるだろう。

日本社会は多文化共生を進めていこうとしており、中国人結婚移住女性のような「生活者としての外国人」も、地域社会に自己の役割を果たすことが期待される。本調査を通して、地域日本語教室では、足場作り（scaffolding）のような支援活動が学習者の日本語学習を促すことがわかった。また、支援者による日本語学習支援を通して、徐々に自律学習ができるようになり、次第に地域日本語教室に参加しなくなるが、それと共に、地域社会に十全的に参加するようになることが確認された。ただし、前述のように、これら日本語学習の熟練者になった人の十全的参加を支援する意味で、さらに高度な指導についても再検討が必要であろう。

注

- 1) 通過する道筋、たどるべき手順、筋道という意味では一般には「経路」を用いるが、本稿では、後述の TEA の定義に沿って「径路」を用いる。
- 2) 金さんとは調査対象者の仮名である。
- 3) Lave & Wenger (1991) における正統的周辺参加理論に基づき、外国人は日本語ができないことにより、地域社会において自己の役割を果たせていないと言える。このように止むを得ず地域社会に周縁的に参加している状況を地域社会における「周縁的参加」と捉える。「周縁的参加」者が向かって行くところ、つまり、育児、就活、就職、資格取得、進学などを通して、それら地域社会に密接に関わることで、且つ中心的役割を果たすことを「十全的参加」とする。
- 4) 本稿では青木・中田 (2011) における学習者オートノミーを学習者の自律学習と捉える。

参考文献

- 青木直子・中田賀之 (2011)、『学習者オートノミー-日本語教育と外国語教育の未来のために-』ひつじ書房。
- 三枝優子 (2016)、「日本語教育実習に参加した学生の参加過程と意識変容」『大学日本語教員養成課程研究協議会論集』13号、21-30頁。
- 境愛一郎 (2015)、「GTA と TEM-2 つの方法論の立ち位置とコラボレーションの可能性-」『TEA 実践編-複線径路等至性アプローチを活用する-』安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ編、新曜社、192-199頁。
- サトウタツヤ (2009)、『TEM ではじめる質的研究-時間とプロセスを扱う研究をめざし-』誠信書房。
- (2015)、「TEA (複線径路等至性アプローチ)」『コミュニティ心理学研究』19号 (1)、52-61頁。
- 張曉蘭 (2015a)、「地域日本語教室における日本語チューターとの相互作用と日本語学習-中国人結婚移住女性を対象とした調査から-」『比較文化研究』116号、285-296頁。

—— (2015b)、「地域日本語教室における中国人結婚移住女性と支援者との関係」『比較文化研究』117号、91-102 頁。

Lave, J. & Wenger, E. (1991) *Situated Learning: Legitimate Peripheral Participation*. New York: Cambridge University Press.

付記

本研究は 2018 年度上海市教育科学研究一般项目「在沪外籍学龄儿童的中文学习与异文化适应研究」(立项编号: C18067) の援助を受けて作成したものである。

TEA based Activity Changes for Japanese Learners From Being Supported by Others to Autonomous Learning: Through a Case Study of Chinese Married Immigrant Women

ZHANG, Xiaolan

Abstract

In this study, I attempted to map the path of a married immigrant woman's participation in local society, and explored how the necessary support changes the way she participates in local society. During the participation in local society, firstly, the support of others is needed in the early stage to develop the basic ability. Secondly, the support to have the ability of promoting self-study is demanded in the middle stage. Lastly, a higher level of professional knowledge support and independent learning activity is required.

Keywords: Chinese married immigrant women, local Japanese classrooms, autonomous learning

日本語独習におけるソーシャル的な特徴について

董 欣（九州大学大学院生）

要旨

情報化の進展により、学校教育以外の学習機会が増加している。日本語教育領域では、教育機関で学習している学習者以外に、独学で日本語を学んでいる学習者が世界中に相当数存在するということは、近年注目されてきている事実である。スマートフォンやタブレットの台頭により、「ソーシャル」という概念が一般にも普及し、その流れを汲んで誕生したのが、ソーシャルラーニングの分野である。インターネットでは、様々な日本語学習サイトも作成されており、そうしたサイトを活用する独習者もいると考えられるが、学習サイトだけではなく、ソーシャルメディアを用いて自発的に学習する学習者もいる。ソーシャルメディアと外国語教育の関係について、ソーシャルメディアは「自己を表現し、他者と繋がるプラットフォーム」として主に若者に利用されており、この「自己表現」と「他者との繋がり」とは、外国語教育にとって欠かせない要素である。本研究では、新しい学習形態について、プラットフォームがもつべき機能とその影響を、自身が運営するプラットフォームを利用して、そこに集う学習者の行動様式、内面的な要因、もたらされた意見などから、日本語独習におけるソーシャル的な特徴を明らかにし、日本語独習のソーシャルラーニング方法ならびにオンライン上での支援の仕組みの構築への示唆を提供することが本研究の目指すところである。

キーワード： ソーシャルメディア、日本語独習、ソーシャル性、日本語独習の仕組み

はじめに

情報化の進展により、学校教育以外の学習機会が増加している。日本語教育領域では、教育機関で学習している学習者以外に、独学で日本語を学んでいる学習者が世界中に相当数存在するということは、近年注目されてきている事実である。また、スマートフォンやタブレットの台頭により、「ソーシャル」という概念が一般にも普及し、その流れを汲んで誕生したのが、ソーシャルラーニングの分野である。ソーシャルメディアと外国語教育の関係について、ソーシャルメディアは「自己を表現し、他者と繋がるプラットフォーム」として主に若者に利用されており、この「自己表現」と「他者との繋がり」とは、外国語教育にとって欠かせない要素である。しかしながら、外国語教育の分野では、学校教育機

関による日本語学習者を対象とした研究が多く、独習者に焦点を当てて、外国語独習の特徴、独習支援の仕組みの研究はまだ少ないのが現状である。

本研究では、新しい学習形態においてプラットフォームがもつべき機能とその影響を、自身が運営するプラットフォームを利用し考察を進めた。具体的には、そこに集う学習者の行動様式、内面的な要因、もたらされた意見などから、日本語独習におけるソーシャル的な特徴を明らかにし、さらには日本語独習のソーシャルラーニング方法ならびにオンライン上での支援の仕組み構築への示唆を提供することが本研究の目指すところである。

I. 先行研究の概観及び本研究の課題

本研究は主にソーシャルラーニング及び日本語独習の領域に位置づけられ、先行研究の概観ならびにまだ解明していない課題を分析していくものである。

1. 先行研究の概観

(1) ソーシャルラーニングの特徴と課題

ソーシャルラーニングの一般的な特徴としては、人々に自然にかつ自発的に起こるものであり、「教える側と学習する側」という役割が固定されず、参加者がソーシャルメディア上で教えあい、学びあうという相互性のある学習形態である。また、従来の授業と異なり、個人が知りたい内容、困っていることを随時学べる個別な学習形態となっており、知識の学習と情報の共有化を実現する新手法である。つまり、ソーシャルラーニングとは、人々がどのようにして共同で活動し、学ぶのかを示すことである。

これまでの語学研究の多くが教室内における教授法や教材、実践に関するものであったが、これからは語学学習におけるソーシャルラーニングの重要性も重視すべきだと考える。しかし、これまで教室や教師の存在の無い学習環境における日本語独習者の学びや経験といったものは充分明らかにされてこなかった。

(2) 日本語独習の特徴と課題

先行研究からソーシャル型の独習者の主な特徴は、他の日本語話者との交流を通じて日本語を身につけ、教科書を使わずに、「オンデマンド」で必要なときに必要な日本語を学ぶことであるということがわかった。つまり、体系的に勉強してから実際にその言語を使うのではなく、目標言語の話者とのコミュニケーションの開始が、その言語の学習の開始になるということである。

しかし、ソーシャル型の独習者の主な特徴であるオンデマンドは明らかになったが、ソーシャル型の独習もソーシャルラーニングの一つであるため、ソーシャルラーニングの特徴をソーシャル型の独習の中でどうやって反映するのか、先行研究ではまだ明らかにされてない。また、独習者に適切な学習コンテンツ、支援の仕組みや学習方法の提供について

も解明されていない。更に、日本語話者と繋がるコミュニティの提供については、先行研究では、Facebook, ameba, line, twitter を利用する、ブログ系 SNS 上のチャットなど文字を通した学習が中心である。

2. 本研究の課題

以上のことから、ソーシャルラーニング、日本語独習の一般的な特徴は先行研究からすでに明らかになっているが、依然としてソーシャルメディアを活用した日本語独習における独習者のソーシャル的な行動様式や内面の動機要因などに関する研究は進んでいないことがわかる。また、先行研究では、独学支援の仕組みで文字サイトやコミュニティなどの活用に関する実践研究はあるが、多様なメディア形態による適切な独習支援の仕組みはまだ明らかにされていない。

そこで、ソーシャルメディアを活用する日本語独習者に注目し、複数のソーシャルメディアツールを使用して独習するオンライン上の学習機会を実際に構築することで、上記の課題である日本語独習におけるソーシャル的な特徴は何なのかを明らかにすることが本研究の目的である。

II. 研究方法及び分析結果

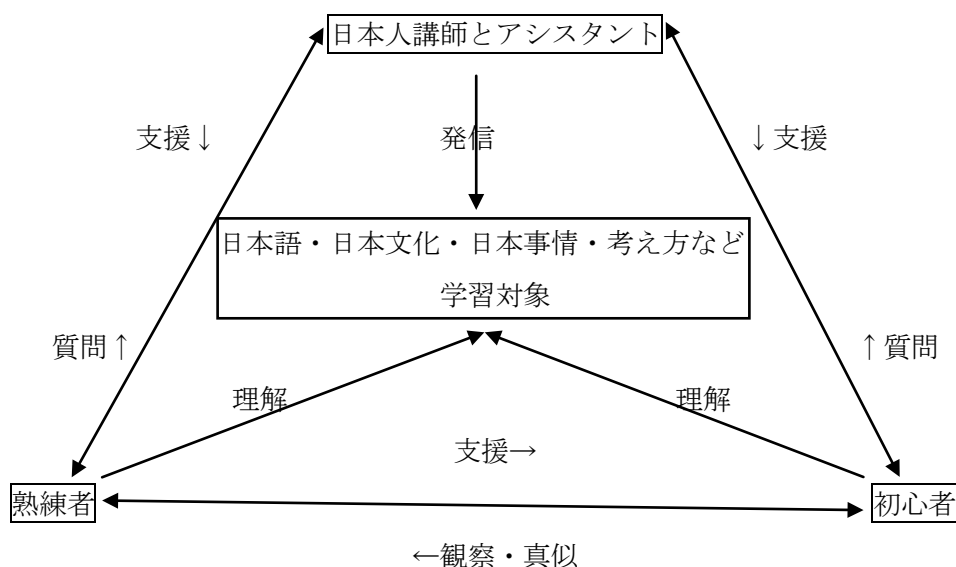
本研究は「コミュニティ」と現在最新のメディア形式である「ライブ」を組み合わせた仕組み上で日本語独習を実践した参加者（8 人）に対して半構造インタビューを行い、インタビューデータの分析には、質的研究のデータ分析方法としての「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ」（以下、M-GTA という）を用いた。この M-GTA は、データに密着した分析から理論を作り出す分析方法で、その特徴として「社会的データをよく見て、よく読んで、解釈する」ことが挙げられる。M-GTA で分析や考察を行った上で、ソーシャル性という大きな特徴を抽出したものである。また、ソーシャル性には具体的には、学習性社交動機、シェア、参与、信頼・認知、ネットワークという五つの側面があることが明らかとなった。

1. 研究方法

「日本語独習 LAB」の仕組みの実践を通して、実践の参加者に対して半構造インタビュー（8 人）を行い、M-GTA で分析や考察を行った。

本研究の『日本語独習 LAB』実践の仕組みは、「ヴィゴツキーの社会構成主義の学習理論」を基礎として、「独習者同士間の繋がり」だけではなく、「日本人講師&アシスタントとのインタラクション」も加え、さらに先行研究でよく使用されているメディア形式「コミュニティ」と現在最新のメディア形式「ライブ」を組み合わせた仕組みとして構築した（図 1）。

図1 『日本語独習 LAB』の構成仕組み



2. 研究結果

本研究は、上記のように、「日本語独習 LAB」のコミュニティの学習活動の実践及び参加者への半構造インタビューのデータに基づいて、「ネットワーク関係」、「ネットワークの仕組み」、「認知」、「信頼」という四つの軸に従い、日本語独習におけるソーシャル的な特徴を抽出した。

手順については、まず得られたデータから対象者の関係性に着目した分析を行い、分析ワークシートを作成した。

表1 分析ワークシートの一例

概念名	議論への参与
定義	独習者が学習プロセスの中で自分から積極的に議論、交流へ参加すること、繋がりを探すこと。
バリエーション	<p>独習者 1:</p> <p>普段なかなか日本人との交流チャンスがないので、日本人先生から生の日本語や文化の知識をゲットできるし、先生の質問に対して、リアルタイムのコメントで答えて、先生と一緒に視聴している人から修正もらえるのはとてもいい。</p> <p>独習者 2:</p> <p>グループの毎日の日本語クイズを期待している。クイズが出たら、基本的に、答えをメッセージで回答する。答えがわからないときには自分で調べて、解釈や説明文を他の学習者にもシェアしたい。他</p>

	<p>の人がグループに質問を聞く時に、自分が知っている範囲の知識であれば、必ず回答する。</p> <p>独習者 4:</p> <p>基本、ライブの時には、よくコメントする。ライブは毎回違う話題のキーワードで、リアルな日本の知識や情報を聞けるし、先生が優しくて面白い人なので、自分が知りたいことも聞きたくなる。でも、知識や文化の面の教授の他、主題であるキーワードに関して日本人のディープな考え方を知り、皆さんと一緒に交流できたらもっと良いと思う。</p> <p>独習者 5:</p> <p>一人で勉強すると、なかなかうまく続いていかないので、一緒に話しながら勉強すると、競争になりやすいので、競争しながら勉強するのは、私にとって効果的な学習方法である。</p> <p>独習者 7:</p> <p>ライブでは、アクティブな交流環境で盛り上がりやすいし、視聴者からも面白いネタも出てくるので、交流や話が展開しやすい。特に、大喜利の脳体操の練習はとても参加したい。他の人の面白い発想も知りたい。</p>
理論的メモ	<p>グループやライブでのコメントでの学習や交流について語っている。受講者は一緒に勉強する仲間だけではなく、日本人講師との繋がりも希望している。内容は、サポート側が出した主題以外に、自発的な質問やネタの議論も展開している。手段は、グループでのメッセージでの交流とライブ動画でのコメントでの交流がメインで、直接の音声でのつながりを期待するニーズもある。その一方、グループの人数が多いため、メッセージを送ると他人の邪魔になる恐れがあり、グループ内の議論には参加しにくいという意見も出てきた。</p>

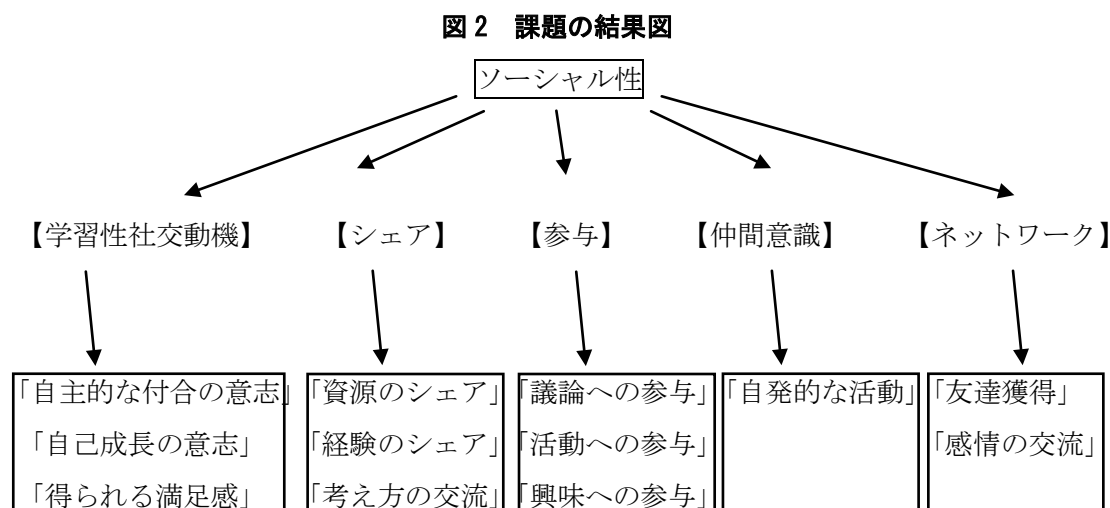
ワークシートを作成した後は、その概念が果たして成立するかということを、具体例の類似例及び対極例を常に見ながら、概念の妥当性を検討することで確認し、完成度を高めていく作業を行った。

その後、生成した概念を個々で比較し合い、何らかの関係がありそうなまとまりとなる概念はどれか、生成した概念と対極的な関係にある概念は何かを考え、データを多角的に解釈し、関連し合う概念をまとめて、カテゴリーを生成した上で、各カテゴリー間について検討を行った（表 2）。

表2 抽出したカテゴリー・概念 一覧表

メイン カテゴリー	サブ カテゴリー	概念	定義
ソーシャル性	学習性社交 動機	自主的な付合の 意志	独習者が学習プロセスの中で 自分から積極的に社会へ参加 すること、繋がりを探すこと。
		自己成長の意志	独習者の学習ニーズ及び学習 意欲の強さ
		得られる満足感	独習者が様々な作業を通して 予定の目標に達成できるかど うか、及び内面の感じ
	シェア	資源のシェア	独習者が資源をシェアする程 度、自発的・積極的にシェアす るかどうか
		経験のシェア	独習者が学習経験を共有する こと
		考え方の交流	情報、知識の獲得などで行っ た考え方に関する思考の交流
	参与	議論への参与	独習者が学習ネットワークの 中での議論に参加する程度や 深さ
		活動への参与	独習者の学習ネットワークの 中での活動参加の頻度、レベ ル、深さ
		趣味への参与	個人的趣味に従って関連の話 題の議論、活動に参加するかど うか
	仲間意識	自発的な活動	独習者が個人の学習レベルや 興味などに従って、議論や活動 を行うかどうか
	ネットワー ク	友達獲得	独習者が学習プロセスの中で 友達作りの状況
		感情交流	独習者が学習の中で他の人と 感情の交流を行うかどうか

検討の際には、理論的飽和に至ったと判断できれば、分析を終了させた。M-GTA における理論的飽和の判断は、データを分析しても新たな重要な概念が生成されなくなった時点で行い、そこで分析を終了する。最後に、概念やカテゴリー間の関連性を提示する結果図を描く。分析結果を踏まえ、日本語独習の特徴を図2に示す。



Ⅲ. 結論

図2に基づき構成されたストーリーライン及び考察は以下の通りである。

ソーシャルメディアを活用した日本語独習プロセスの中では、多くの日本語独習者は独習を通して、「自己成長の意志」ならびに精神的なサポートを獲得したいため、「自主的な付き合いの意志」が強い。また、自主的な学習や繋がりの中で、「得られる満足感」も強くなる。そのため、{日本語独習の社交性}は、「自己成長の意志」、「自主的な付き合いの意志」、「得られる満足感」などの【学習性社交動機】の行為であり、自主的に行う傾向がある。【学習性社交動機】に基づいた様々な行為の中で、多くの独習者は他人との「資源のシェア」、「経験のシェア」、「考え方の交流」が好きである。つまり、【シェア】の様々な行為は{日本語独習の社交性}の重要な構成要素である。しかし、他人への配慮などを考え合わせると、【シェア】をする際には、ソーシャルメディアの場を選ぶ必要があると考えられた。実践に参加している独習者の中でよく【シェア】するコアメンバーがいる。【シェア】の内容に関する「議論参与」も自発的に展開し、また、アシスタントが提供した学習企画イベントへの「活動参与」、及び日本人講師が教えた様々な知識分野でのキーワードの議題に関して、個人の関心に従った「興味参与」もよく行い、日本語独習や学習者同士との交流、日本人講師とアシスタントとの交流にとっても役立つと言った独習者が多い。つまり、【参与】行為は日本語独習及び他人との繋がりに役立つと分かった。他の学習者と日本人講師とアシスタントとの【シェア】や【参与】を見て、勉強できた、感動した、と言った学習者も多い。その影響で、多くの独習者が最終的に「自発的な活動」を行い、学習のプ

ロセスの中で、【仲間意識】を強く持つようになり、この実践グループから「友達獲得」を行うことが可能となった。同じ目標やニーズを持っている友達なので、安定な関係性を保つことができ、その結果、ディープな「感情の交流」も実現出来ている。そこで、日本語独習のプロセスの中で学習者同士、学習者と日本人講師とアシスタント、学習者と学習内容の間の複雑な関係性で【ネットワーク】の構築ができた。以上の分析により、日本語独習には、ソーシャル性という大きな特徴があることがわかった。

おわりに

本稿は新しい教育パラダイムや学習手法としてのソーシャルラーニング及び日本語独習領域に位置づけられるソーシャル型の日本語独習者に焦点を当て、日本語独習の「ソーシャル性」という大きな特徴を明らかにした。また、ソーシャル性には具体的には、学習性、社交動機、シェア、参与、信頼・認知、ネットワークという五つの側面があることが明らかとなった。今後の課題としては、「独習者、独習内容、独習形態」三つの側面から、さらに日本語独習の特徴を細分化し、それぞれの特徴に従って日本語独習におけるソーシャルラーニングの方法ならびに支援の仕組みを探究していくことである。

参考文献

- 小松祐子（2011）、「ソーシャルメディアと外国語学習・教育—フランス語の新しい学びのために」『関西フランス語教育研究会論文集 RENCONTRES』25、76-80 頁。
- 伊藤秀明・石井容子・武田素子・山下悠貴乃（2016）、「日本語学習者のネット利用状況と学習サイトへの期待—海外 11 拠点の調査結果から」『国際交流基金日本語教育紀要』12、97-104 頁。
- 吉開章（2014）、「日本語学習者の学習意識における学習者本人と日本語教育者・一般日本人の認識の差：「インターネット時代の新自律学習者」が日本理解・日本コンテンツ/製品消費の主役に」『国際日本語教育日本研究シンポジウム予稿集』10、504-508 頁。
- 山内祐平（2013）、「教育工学とインフォーマル学習」『日本教育工学会論文誌』37（3）、187-195 頁。
- 高橋敦（2014）、「グローバルネットワーク時代における「新しい日本語学習者」とオンラインコミュニティへの需要」『桜美林言語教育 論叢』10、139-156 頁。
- 高橋敦（2015）、「社会的視点から見た第二言語習得におけるオンラインコミュニティ可能性と管理者役割—Facebook を用いた実践から」『言語教育研究』5、41-58 頁。
- 末松大貴（2017）、「新しい日本語学習者の実態と学習コミュニティに対する評価」『言語文化教育研究』15、172-193 頁。
- 松浦健二・中村勝一（2011）、「SNS を用いた学習・教育支援システムの設計・開発」『教育システム情報学会誌』28（1）、21-35 頁。
- 木下康仁（2003）、『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』弘文堂。

About the social characteristics of Japanese self-study

DONG, Xin

Abstract

With the advancement of computerization, learning opportunities outside of schools are increasing. In addition to learners studying at educational institutions, there are a considerable number of learners studying Japanese on their own. The research is positioned as a social learning area in informal learning. Using Japanese language self-study support with social media as a starting point and from the perspective of the relationship between self-directed learning methods and the surroundings, we will clarify the characteristics of social learning for Japanese self-study students. As a specific proposal, a “Japanese Self-Study Lab” mini platform will be built on the platform most used by self-study students. Through Japanese Self-Study Lab, video, audio, and text contents for learning will be provided, an online community that can directly interact with Japanese people will be formed, promoting two-way cross-cultural exchange, and information will be disseminated on various aspects of Japan. The aim of this research is to clarify the social characteristics of Japanese language self-study and to provide suggestions for the construction of social learning methods and support mechanisms.

Keywords : Social media, Japanese self-study, Sociality, Japanese self-study system

日本の大学におけるイノベーション戦略 —教育のオープン・イノベーションに関する考察—

カ丸 美和（福岡女子大学大学院生）

要旨

変化が激しい社会の中で、学生たちは急速に変化し、それにとまって学生たちのレディネスやニーズも多様化している。さらに、社会から求められる人材も変化しており、教育機関も社会が求める人材を輩出する機関として変革が求められている。

教員は社会や学習者の変化を見極め、そのレディネスやニーズに合わせた教育が提供できるよう成長を続ける必要があるが、このような環境の変化に対応できない教員も存在する。この問題を解決するために、本論文ではまず日本の教育の現状を考察し、日本の教育におけるオープン・イノベーションの必要性について論じた。その後、オープン・イノベーションの促進に必要とされるゲート・キーパーとして、博士人材の活用およびその方法を導出した。

キーワード： オープン・イノベーション、ゲート・キーパー、戦略、人的資源、教育

はじめに

長年の教員マネジメントの業務の中で、学生たちから各教員の教育に対するクレームを受けることがある。これは、個々の学生たちのレディネスやニーズを把握し、それに対応した教育が行われていないからであると考えられる。また、変化が激しい社会の中で、学生たちは急速に変化し、それにとまって学生たちのレディネスやニーズも多様化していることも看過できない。さらに、社会から求められる人材も変化しており、教育機関も社会が求める人材を輩出する機関として変革が求められている。

社会や学習者の変化や多様化に対応できず学習者のニーズを満たせないことは、その成長を阻害するものであるため、教員は社会や学習者の変化を見極め、そのレディネスやニーズに合わせた教育が提供できるよう成長を続ける必要があるが、このような環境の変化に対応できない教員も少なからず存在する。この要因をイノベーションの観点から究明し、教員の能力向上を促すことで、教育の質を保証する方策を明らかにすることが本論文の目的である。

I. イノベーションに関する先行研究

イノベーションという言葉は、オーストリアの経済学者 Schumpeter によって初めて定義された。イノベーションとは、新しいものを生産する、あるいは既存のものを新しい方法で生産することであり、生産とはものや力を結合することと述べている (Schumpeter, 1912)。

20 世紀の後半には、イノベーションの概念が科学や社会科学の様々な分野に広がり始めた。イノベーションは「新しい創造」だけでなく、様々な問題の解決策でもある。

Vaz and Nijkamp (2009) によると、イノベーションと成長を結びつける視点は広範であるが、変化の進展を記述する 1 つの方法はダイナミクスを新しい製品またはプロセスの連続的な生産として解釈することである。しかし、メカニズムは、新しいニーズや要求に対する社会の同時調整を前提としており、この相互の動きが表す情報の流れや交流の程度を認識しようとする理論家たちの関心を集めている。組織の調整能力とイノベーションを組み合わせるための後続の努力が、理論的な挑戦ではなく、むしろ社会の再形成をもたらす (Vaz & Nijkamp, 2009, 441-445)。

イノベーションの定義の多くは、イノベーションがどのように創造され、どのような戦略が構築されるかについての情報を含んでいる。本論文では、特に「オープン・イノベーション(OI)」の観点から教育現場を考察し、教員の成長及び教育の質の保証に役立てたいと考えている。OI はハーバード大学経営大学院の教授である Chesbrough(2003)によって提唱されて以来、注目を集めている。OI が注目される理由に、顧客ニーズの多様化があげられるが、教育においても同じ事象が上げられる。学習者をとりまく急激な社会変化に対応する新たな教育の必要性和教育ニーズの多様化である。これらの多様なニーズに対応するためには、内部のリソースに頼るだけではなく、外部からのインプットや外部へのアウトプットにより生まれる新結合、すなわち教育の OI が必要なのである。

1. オープン・イノベーション

Chesbrough (2003) によって提唱された OI は、企業が革新を進展させるために、社外のアイデアだけでなく内部のアイデアや、市場への内外の道のりを使用することができ、使用すべきであることを前提としている。

また、Chesbrough and Bogers(2014)は、OI を「組織の境界を越えて意図的に管理された知識フローに基づく分散型イノベーションプロセス」と定義した (Chesbrough & Bogers, 2014, 17)。企業イノベーションの成功を改善するために、インプットとアウトプットをいかに活用できるかについての洞察を提示し、イノベーション研究の分野でよく知られるようになった。

図 1 に示されているとおり、OI には 2 つの重要な種類がある。アウトサイド・インとインサイド・アウトは、それぞれインバウンドとアウトバウンドの OI と呼ばれる。アウトサイド・インの OI は、企業のイノベーションプロセスを様々な外部からのインプットに開放

することである。学術研究や産業界の実践において、最も注目されているのはOIのこの側面である。インサイド・アウトのOIは、未使用及び未利用のアイデアを他の人がビジネスやビジネス・モデルで使用するために組織外に出すことを組織に要求する。モデルのこの部分は、学術研究及び業界慣行の両方で、未だ探求されてはいない。

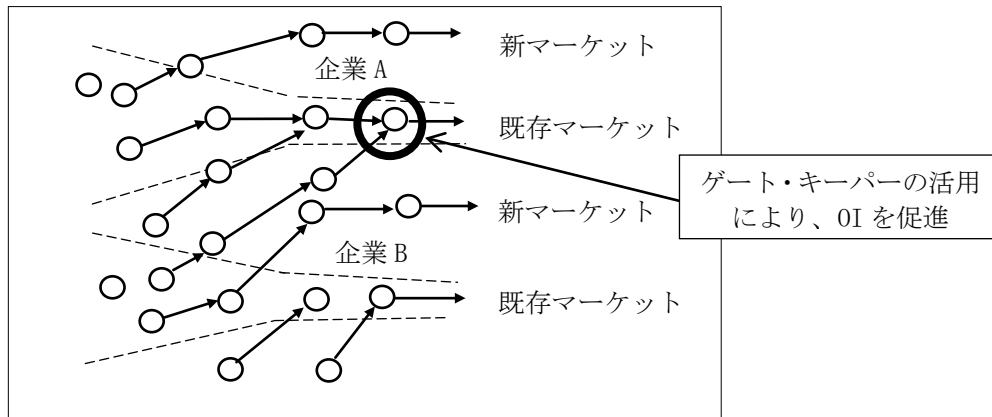


図1：オープン・イノベーションの概念図

出所：Chesbrough(2003)をもとに筆者作成

イノベーションは本質的に複雑でダイナミックな社会プロセスであり、理論と実践を結びつけるには大きな価値がある。教育においても内部のリソースだけではなく、外部からのインプットに開放することで新たなイノベーションを生み、また内部のリソースを外部に開放することで、新たなイノベーションが生まれると考えられる。しかしながら、現段階でこの点を究明した先行研究は数少ないため、教育においてもOIの観点から考察することが必要であると考えられる。

2. 教育におけるイノベーション

教育におけるイノベーションの例として、Drucker(1985)はコメニウスの教科書をあげている。また、Christensen(1997)は、「確立された技術」として「経営大学院」をあげており、「それを破壊する技術」として「企業内大学、社内マネジメント研修プログラム」をあげている。また、「キャンパスと教室での授業を破壊する技術」として「インターネットを利用した遠隔教育」をあげている。さらには、「標準的な教科書を破壊する技術」として「カスタム・メイドのモジュール式デジタル教科書」をあげている。

OIは学術、産業界、政策立案などにおいて広く用いられている概念である。しかしながら教育の分野においては、いまだ広く用いられていないのが現状であり先行研究も数少ない。このOIを教育にも取り入れ、教育の質を向上させるには、Allen(1977)が提唱した組織内のコミュニケーションの緊密さを維持し、組織体と外界を結びつける役割のゲート・キーパーである教員の存在が必要であると考えられる。

Ⅱ. 日本の教育の現状と考察

日本において、初等教育から高等教育までの近代的な学校制度が確立するのは明治時代である。1877 年に日本で初めての大学「東京大学」が創立された（文部省、1992）。国立大学は、1949 年の国立学校設置法により、戦前の帝国大学を含む 19 の大学、26 の高等学校、62 の専門学校、83 の師範学校等が統合され、70 の新制大学へ移行した。その際の最も重要な方針は、「教育の機会均等を実現するため、一府県一大学を設置する」ということであった（一般社団法人国立大学協会、2018）。その結果として、大学数の増加とともに学生数が増えてきている（表 1）。また、大学院の制度化は、小規模で弱体であるとはいえ、帝国大学がその内部に大学教員・研究者集団の、自前の再生産装置を持つに至ったという点で、きわめて重要である（天野、2009、100）。

表 1: 大学における学校数および学生数

年度	学校数	学生数【人】				
		大学全体	学部	修士課程	博士課程	専門職学位
1960	245	626,421	601,464	8,305	7,429	—
1970	382	1,406,521	1,344,358	27,714	13,243	—
1980	446	1,835,312	1,741,504	35,781	18,211	—
1990	507	2,133,362	1,988,572	61,884	28,354	—
2000	649	2,740,023	2,471,755	142,830	62,481	—
2005	726	2,865,051	2,508,088	164,550	74,907	15,023
2010	778	2,887,414	2,559,191	173,831	74,432	23,191
2015	779	2,860,210	2,556,062	158,974	73,877	16,623
2016	777	2,873,624	2,567,030	159,114	73,851	16,623
2017	780	2,890,880	2,582,670	160,387	73,909	16,595
2018	782	2,909,135	2,599,805	163,118	74,372	16,547
2019	786	2,918,668	2,609,148	162,261	74,711	17,649

注：—はデータ不明

出所：文部科学省(2019)「学校基本調査 - 令和元年度結果 - の概要」をもとに筆者作成

2019 年の 3 月に大学（学部）を卒業した者は、572,639 人で前年度より 7,203 人増加している（文部科学省、2019）。2009 年より継続して大学院への進学者数が減少し、就職者が増加している背景には、労働者不足による求人倍率の上昇が一因として考えられるが、2020 年以降の卒業者は、新型コロナの感染拡大による経済悪化から、就職ではなく大学院進学を選択する学生も増加することが考えられる。大学院の修士課程を修了した者は、73,169 人で前年より、1,723 人増加している。博士課程を修了した者は 15,578 人で前年より 80 人減少している（文部科学省、2019）。卒業・修了後の状況は、就職も進学もしていない者の比率が、大学（学部）卒業者は 6.7%、修士課程修了者は 9.4%、博士課程修了者は 17.3%と学位が上がるにつれて上昇している。また、正規の職員でない者の比率は、

大学（学部）卒業者は2.8%、修士課程修了者は2.7%、博士課程修了者は14.3%で、博士課程修了が最も高い。修士課程修了者が進路選択の際に、この現実を目の当たりにすれば、博士課程進学に躊躇することは想像に難くない。また、日本における労働市場と高度人材のミスマッチ解消も喫緊の課題であることが分かる。

1. 教育に関する問題

2016年4月に中央教育審議会に対して諮問された「第3期教育振興基本計画」においては、2030年以降の社会の変化を見据え、2030年以降の国際社会を生き抜く素質と能力を備えた人材を育成するために必要な教育政策のあり方を検討するとされている（文部科学省、2017）。独立法人化、大学のガバナンス問題、自己点検・外部評価・中期計画、教授会による学部・大学運営から「学長のリーダーシップ」へ、教育方法の「強制的変更」（シラバス、クォーター制、AL、PBL、など）、外部研究費の獲得の「強制」、予算減による教員の任期付き採用、教育のオンライン化など、大学にも多くの変化が訪れている。また、学生の状況にも変化が起きている。大学全入によるモチベーションの低下、学力の低下、進路指導・受験産業依存による自主性の低下・欠如、知への探求心の低下・欠如、保守化、留学生の増加などである。このような状況において、教員は学生の価値観、気質、能力に見合った教育能力の習得が求められるが、大学設置基準では、教員は「研究上の業績を有する者」、「専攻分野について特に優れた知識及び経験を有する者」などを対象に、「大学における教育を担当するにふさわしい教育上の能力を有する者」としており、教育上の能力については深く触れていない。国としての免許制度がなく、学生の基礎学力が低下した中で教育を行っていくには、教員一人ひとりの教育指導のあり方について方向性を提示し、教員の教育能力開発をする必要がある。そのため、大学改革支援・学位授与機構(2017)は、教育の内部質保証に関するガイドラインの案を策定・公表した。このガイドラインには、内部質保証システムの各要素に関連する事例が取り上げられているが、内部質保証システムは今後、日本の大学において構築が望まれる内容をあげたものであり、報告された事例は現段階では発展途上にあるものも数多く見受けられる。これらの取組をとりまとめる役割は、教育に関する深い知識を持ち、OIを促進するゲート・キーパーの素質を持つ人物が担うことが推奨されると考えられるが、とりまとめる役割などについては深く言及されていないため、この点を明らかにすることが必要である。

Ⅲ. オープン・イノベーションにおけるゲート・キーパーの活用に関する考察

教員は自身の受けてきた教育を踏襲して授業を展開しがちであるが、社会や大学、学生が変われば求められる教育内容も教授法も変化する。その変化や学習者の多様性に対応するためには、組織内部のシーズだけに頼るのではなく、外部からのインプットや外部へのアウトプットを活用したOIが有効である。前節で述べた大学をとりまく様々な変化や問題

に対応し、より良質な教育を提供するためには、大学組織においても OI が必要であると考ええる。OI のためには、組織内のコミュニケーションの緊密さを維持し、組織体と外界を結びつける役割のゲート・キーパーである教員の存在が必要である。

Allen(1977)は、技術集団のイノベーションにおいて、ゲート・キーパーが相互のコミュニケーションの緊密さを維持し、それによって組織体と外界とを結びつけてきたことを指摘している。大学という専門家集団においても、情報に精通した教員が、ゲート・キーパーとして組織内のコミュニケーションの緊密さを維持し、組織体と外界を結びつけることで OI が促進され、教育のイノベーションが発生すると考えられる。

また、ゲート・キーパーが外部とインフォーマルに接触することによって、組織内の同僚に最新の技術の進展状況を知らせ (Allen、1977、130)、文献情報や個人的接触によって得た情報を、組織メンバーの情報に要領よく関連させ、理解しやすいように変換して伝える (Allen、1977、138)。教育が不得手な教員に対して、ゲート・キーパー的存在の教育の専門知識を持った教員が他の場所から得た知識や情報をその教員に分かりやすく共有することで教育の改善を促す。また、ゲート・キーパー的存在の教員が、組織外の人々とのインフォーマルなコミュニケーションの場を築き、そこで得た知識を所属組織の教員と共有することで、新たな教育方法を開発することが可能である。

ゲート・キーパーを担うものの特性として、「高度のパフォーマンス」「人間志向性」「適当な野心」「組織の内外からの適任能力の認知」「認知されやすさ」があげられる (Allen、1977、144)。日本の大学は、このような人材をゲート・キーパーとして認識し、学部長や学科長、プログラムコーディネーターなどのポストに登用することが、大学における教育のイノベーションを促進するカギとなるのである。

『オープン・イノベーション白書』(JOIC と NEDO、2018) においても人材の不足が OI 活動の課題としてあげられており、OI の推進役になるキーマンの存在が欠かせないと述べられている。トップ層には理解とコミットメントが求められ、ミドル層にはコーディネーター人材が求められるのであるが、こうした人材が OI に専念できるよう組織としてバックアップしていく必要がある (JOIC と NEDO、2018、256-257)。

厚生労働省(2018)は、22 か国対象の調査を実施した結果、各国の博士後期課程修了の割合とイノベーションの実現割合は正の相関があると指摘した。また、イノベーション活動を促進していく上では、「熱意・意欲」だけでなく、博士後期課程修了者をはじめとする専門性を重視した採用を増やすことも必要であると提言している。しかしながら、人口 100 万人当たりの博士号取得者数は、日本 119 人、米国 268 人、ドイツ 344 人、英国 376 人、韓国 284 人、中国 43 人である。日本と中国は主要国と比較すると博士号取得者が少ない(文部科学省、2020)。イノベーションの実現割合も、米国 18.5、ドイツ 37.0、英国 26.5、日本 15.0 で日本は非常に低いことが分かる(厚生労働省、2018)。このことは、OI におけるゲート・キーパー候補者が日本社会及び日本の教育機関において不足していることを示し

ている。

「能力のある人材の確保」を充足させるには、博士人材の活用や社会人の学び直しを促進することが必要であるが、日本においては博士課程に進学する学生が少なく、また企業における博士課程修了者の割合も低い。まずは、日本社会に博士人材がイノベーションを生み出すことを認識させることで博士人材の雇用のミスマッチを防ぎ、博士課程進学を迷う学生の心理的不安をとりのぞくことが必要である。博士号取得者を増やすためには様々な支援が必要であるが、奨学金は年々減少しており、特に人文・社会科学専門の学生を対象とした奨学金は少ない。教育機関のOIを促進するための第一歩として、ゲート・キーパー候補である人材への経済的及び雇用促進の支援が必要不可欠なのである。

知識の創造者として、またその後継者を育てる存在として、大学におけるゲート・キーパー候補者となる博士人材を、自然科学分野だけではなく人文・社会科学分野においても育成し、活用するシステムを構築することは、日本の大学ひいては日本の社会のイノベーション促進に求められている。

おわりに

本論文では、日本の大学におけるイノベーション戦略と題して、OIとゲート・キーパーとしての役割を担う博士人材の重要性について論じてきた。現在、大学の正規の教員採用時には博士号が求められることが多い。しかしながら2020年現在、日本は他の先進諸国に比べ博士号取得者が少ない。日本においては、博士課程修了後に正規の職に就く者の割合が非常に少なく、これが要因で多くの学生が博士課程進学を思いとどまっている。まずは、ゲート・キーパー候補となりうる博士人材の活躍の場を幅広く社会に構築し、進学希望者の心理的不安を取り除くことが大切である。また、博士人材を大学に雇用した後は、研究者・教育者として成長させる環境を整えることが必要である。

博士人材の母数を増やすことにより、教育機関のゲート・キーパー候補となる教員の卵を増やし、その中からゲート・キーパー的素質を持った人材を活躍できる立場に登用することが肝要である。それにより大学のOIを促進し、教育のイノベーションを生み出すことができるのである。それこそ、多様化する社会や学習者のニーズを満たす教育を提供する第一歩なのである。

参考文献

天野郁夫 (2009)、『大学の誕生 (上)』中公新書。

一般社団法人国立大学協会 (2018)、「高等教育における国立大学の将来像 最終まとめ」。

http://www.janu.jp/news/files/20180126-wnew-future_vision_final3.pdf.

オープンイノベーション・ベンチャー創造協議会(JOIC)、国立研究開発法人新エネルギー・産業技術総合開発機構(NEDO) (2018)、『オープンイノベーション白書第二版』経済産業調査会。

厚生労働省（2018）、「平成 29 年版 労働経済の分析—イノベーションの促進とワーク・ライフ・バランスの実現に向けた課題—」厚生労働省。

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構（2017）「教育の内部質保証に関するガイドライン」。

文部科学省（2017）、『科学技術要覧 平成 29 年版』株式会社ブルーホップ。

文部科学省（2019）、「学校基本調査 - 令和元年度結果 - の概要」文部科学省。

文部科学省（2020）、『科学技術指標 2020』科学技術・政策研究所。

文部省（1992）、『学制百二十年史』株式会社ぎょうせい。

Allen, T. J. (1977), *Managing the Flow of Technology: Technology Transfer and the Dissemination of Technological Information within the R&D Organization*, Cambridge, MA: MIT press.

Chesbrough, H. W. (2003), *Open Innovation: The New Imperative for Creating and Profiting from Technology*, Boston: Harvard Business School Press.

Chesbrough, H. W. and Bogers, M. (2014), “Explicating Open Innovation: Clarifying an Emerging Paradigm for Understanding Innovation,” H. Chesbrough, W. Vanhaverbeke, and J. ed., *New Frontiers in Open Innovation*, Oxford: Oxford University Press, pp.3-28.

Christensen, C. M. (1997), *The Innovator's Dilemma When New Technologies Cause Great Firms to Fail*, Boston: Harvard Business School Press.

Drucker, P. F. (1985), *Innovation and Entrepreneurship*, New York: Harper & Row.

Shumpeter, J. A. (1912), *Theorie Der Wirtschaftlichen Entwicklung*, Leipzig,: Duncker & Humblot.

Vaz, T. D. N., and Nijkamp, P. (2009), “Knowledge and Innovation: The Strings between Global and Local Dimensions of Sustainable Growth” *Entrepreneurship and Regional Development*, 21:4, pp. 441-455.

Innovation Strategies in Japanese Universities : A Study on the Open Innovation in Education

RIKIMARU, Miwa

Abstract

In a rapidly changing society, students are changing rapidly, and their readiness and needs are diversifying along with it. Furthermore, the human resources demanded by society are also changing, and educational institutions are required to change to produce the human resources demanded by society.

Teachers need to continue to grow so that they can identify the changes in society and learners and provide education that meets their readiness and needs, but some teachers are unable to respond to these changes in the environment. In order to solve this problem, this paper first examines the

current state of education in Japan and discusses the need for open innovation in Japanese education. After that, the use of doctoral personnel as gatekeepers for promoting open innovation and the methods for doing so are derived.

Keywords : Open Innovation, Gate Keeper, Strategy, Human resource, Education,

卒業論文における中国人日本語学習者の接続詞の 使用実態について —「順接」関係の接続詞に注目して—

李 成愛（山東科技大学）

要旨

本研究では、日本語母語話者との比較を通じて卒業論文における中国人日本語学習者の接続詞、特に「順接」の接続詞の使用傾向を調べた。使用頻度からみると、日本語母語話者では「そこで」、学習者では「それで」の使用が目立っている。分析の結果、「そこで」については、両者とも同じ意味用法で使われているものの、日本語母語話者の「そこで」の使用例には特徴的な文章構造及び共起表現が見られ、自説をより効果的に導入することを目指していることが窺える。一方、「それで」については、日本語母語話者の使用例は0例に対して、学習者は15例もあり、「それで」は話し言葉ではよく使われるが、書き言葉として用いないことに対する認識が薄いことが窺える。また、日本語母語話者なら「そこで」を選ぶ場面で「それで」を選んでいる使用例も見られた。以上から、今後の論文指導において、接続詞の話し言葉、書き言葉の違いについて強調すると同時に、より論理性が高く、読み手に分かりやすい論文に仕上げるため、接続詞の意味・機能だけではなく、特徴的な文章構造及び共起表現の提示も必要なのではないかと思われる。

キーワード： 卒業論文、接続詞、順接、そこで、それで

はじめに

中国人日本語学習者の卒業論文を読むと、話し言葉の接続詞の使用や不自然な接続詞が目立ち、前後の語句や文がどんな関係なのかわかりにくいものがしばしばある。的確な指導を行うためには、中国人日本語学習者の卒業論文における接続詞の使用実態及び問題の所在を把握することが何より重要であるように思われる。

これまで日本語学習者の作文における接続詞の使用実態についての研究は盛んに行われており、浅井(2003)、金(2017a)の研究から日本語母語話者と日本語学習者の接続詞の使用傾向に違いがあることは明らかであり、その中で金(2017b)では、特に「それで」を取り上げ、韓国人日本語学習者の多用の原因は「それで」を意味範囲が広く、日本語の「それで」「だから」「そこで」をカバーしている韓国語の接続詞「geu-rae-seo」と同様のものと

して捉えている可能性がある」と分析している。また、俵山(2017)からは文章のジャンル別によって学習者の接続詞の使用傾向に違いがあることがわかる。以上のように、母語別、文章のジャンル別によって日本語学習者の接続詞の使用傾向がそれぞれ異なっていることは明らかであるが、今までの研究のほとんどは学習者の作文に集中しており、論理性が重視される論文を取り上げた研究は管見の限りでは見当たらない。そこで、本研究では中国人日本語学習者（以下、学習者と称する）の卒業論文における接続詞に焦点を当て、日本語母語話者との比較を通じて、学習者の接続詞の使用実態、特に「順接」関係の接続詞の使用実態を明らかにすると同時に、学習者の接続詞の指導に必要なのは何かについて考察することにする。

I. 調査データ及び調査方法

1. 調査データ

日本語母語話者のデータは日本語学会発行の『日本語の研究』に載せられた論文 30 部（文総数は 5085）であり、学習者のデータは中国国内で日本語を専攻とする四年生の卒業論文 30 部（文総数は 5997）である。ここでは初稿、すなわち、指導教員の添削を受ける前の段階の原稿を分析対象とする。本研究で『日本語の研究』を比較対象としたのは人文科学系の論文であり、論文一部あたりの平均文章数が学習者の卒業論文に近いからである。

2. 調査方法

本研究では、接続詞の認定及び類型の分け方はそれぞれ石黒他(2009)と石黒(2008)に従っている。石黒(2008)は今までの研究を参考に、接続詞をジャンルにかかわらず収録し、さらにそれを類型別に分けたものである。また、石黒他(2009)は石黒(2008)をもとに、接続詞の一部を削除・補完し、137 種にまとめたものである。

まず、石黒他(2009)のリストを認定基準として今回のデータの文頭に現れた接続詞を取り出し、その使用数をカウントし、文総数に対する使用率を調べる。また、接続詞ごとにその使用数をカウントし、具体的にどのような接続詞がよく使われているのかについて調べる。さらに、類型別の使用傾向を見るために、石黒(2008)の類型をもとに抽出した接続詞を分類し、その使用傾向を分析する。

II. 調査結果と考察

1. 全体の使用傾向

接続詞は日本語母語話者の論文に 1280 例、総文数の 25.2%の文に見られており、石黒他(2009)の論文における接続詞の割合(25.5%)と極めて近い結果となっている。一方、学

習者の卒業論文には 880 例、総文数の 14.7% の文に見られ、全体的に学習者より日本語母語話者の方が接続詞を多く使用している結果となった。また、今回の研究では、学習者の方が様々な種類の接続詞を用いており、日本語母語話者は 59 種類であるのに対し、学習者は 67 種類の接続詞を用いていた。

表 1 接続詞の類型別の使用状況

類型	日本語母語話者	学習者
順接	134 (10.5%)	143 (16.3%)
逆接	158 (12.3%)	163 (18.5%)
並列	268 (21.0%)	217 (24.7%)
対比	102 (8.0%)	43 (4.9%)
列挙	160 (12.5%)	134 (15.2%)
換言	100 (7.8%)	39 (4.4%)
例示	110 (8.6%)	106 (12.0%)
補足	137 (10.7%)	17 (1.9%)
転換	47 (3.6%)	11 (1.3%)
結論	64 (5.0%)	7 (0.8%)
合計	1280 (100.0%)	880 (100.0%)

さらに、類型別の使用傾向を見るため、石黒(2008)の類型に従って分類し、類型別出現数の上位 3 位をみると、表 1 のように日本語母語話者では「並列」「列挙」「逆接」の順で多く使用されているのに対し、学習者では「並列」「逆接」「順接」の順になっており、接続詞の使用傾向が異なっていることがわかる。李(2020)では、すでに上記の「並列」「逆接」関係の接続詞に注目して分析を行ったため、本研究では主に「順接」の接続詞に焦点を当てて分析を行うことにする。

2. 「順接」の接続詞の使用傾向

表 2 は、論文における日本語母語話者と学習者の「順接」の接続詞の使用数を表したもので、上位 3 位をみると、日本語母語話者では「そこで」「したがって」「そのため」の順に多く使用されており、学習者では「したがって」「そのため」「それで」の順になっている。以上から、両者とも「したがって」「そのため」が多く使用されているものの、「順接」の接続詞の使用傾向に違いがあることは明らかであり、日本語母語話者では「そこで」、学習者では「それで」の使用が目立っている。このような結果を踏まえ、以下では「そこで」「それで」に焦点を当て、その詳細についてみていくことにする。

表2 「順接」の接続詞の使用数

接続詞	日本語母語話者	学習者
そこで	39 (29.1%)	14 (9.8%)
したがって	35 (26.1%)	49 (34.3%)
そのため	23 (17.2%)	29 (20.3%)
その結果	15 (11.2%)	12 (8.4%)
よって	11 (8.2%)	0 (0.0%)
そうすると	4 (3.0%)	1 (0.7%)
それでは	5 (3.7%)	0 (0.0%)
すると	2 (1.5%)	2 (1.4%)
だから	0 (0.0%)	14 (9.8%)
それで	0 (0.0%)	15 (10.5%)
ゆえに	0 (0.0%)	7 (4.9%)
合計	134 (100.0%)	143 (100.0%)

(1) 「そこで」の使用傾向

表2をみると、日本語母語話者の場合、「そこで」の使用例は39例で、「順接」の29.1%を占めている。日本語記述文法研究会（2009：66）では、「『そこで』は、先行部で表された内容が原因やきっかけになって、後続部で述べられる行動や状況が生起したことを表す」としている。日本語母語話者の実際の使用例（JPで表示）をみると、「そこで」は上記で紹介されたように、前件で生じた状況・場面を解決するための行為を取るという意味で使われており、その中で39例の約6割にあたる23例は以下の使用例(1)(2)のように先行文脈で問題の所在を述べたあと、「そこで」を挟んで問題解決への糸口を示す「本稿では～を明らかにする」「本節では～を指摘する」「以下では～を考察することにする」「次節では～を考察することにする」等の表現が使われており、特徴的な文章構造や共起表現が見られた。石黒（2012：177）では、論文の中で「そこで」は、「研究が行きづまってしまったように見えるとき、その有力な解決策を提示するとき」に使われることが多く、「自説を効果的に導入するときに使うと高い効果を発揮する接続詞」とであると述べられている。

- (1) 八尾市を含む近畿方言のヤルは、素材待遇形式のハルや軽卑語のヨルなどとともに言及されてきたものの、ヤルを主要な対象として扱った研究はあまり多くない。そこで、本節では、ヤルが大阪方言の中でどのように記述されてきたかを簡単にまとめ
 たうえで（2.1節）、先行研究の問題のありかを指摘する。（JP-1）
- (2) 撥音化終止形が文法的にどのようなものであり、どれくらい「同音衝突が問題になる」存在なのかが問題になる。そこで、次節では撥音化終止形の使用実態を観察し、
 その位置づけを考察することにする。（JP-4）

また、作文における日本語母語話者の「そこで」の使用状況を先行研究からみると、俵山 (2017) では「そこで」の使用例は見られなかったが、浅川 (2003) では1例、金 (2017b) では32例で「順接」の接続詞の28.8%を占め、「順接」の中で一番多く使われていた。具体的に、タスク12の「小学生新聞で七夕の物語を紹介する」場面で32例の6割にあたるものが使われており、金 (2017b : 63) では、「前件で困った状況になり、後件でその状況を改善・解決するための行為が述べられている」としている。以上から、日本語母語話者の場合、作文において上記のような特定のタスク場面では「そこで」の使用が目立っているが、それ以外では使用が少ないということがわかる。

一方、作文における学習者の「そこで」の使用状況を先行研究からみると、金 (2017b) では19例で「順接」の11.0%を占めており、浅川 (2003) では3例、俵山 (2017) では4例が確認され、特定の場面に限らず、よく使われていることがわかる。しかし、今回の調査で学習者の「そこで」の使用例は14例で、「順接」の9.8%を占めており、日本語母語話者の29.1%と比べ、その使用率は低い結果になっている。さらに、今回の学習者の使用例 (CNで表示) をみると、(3)(4)のように日本語母語話者と同じく、前件が原因やきっかけで後件が発生したことを表す用法で使われているものの、上記の日本語母語話者のような特徴的な文章構造や共起表現はみられなかった。さらに、学習者の使用している日本語の教材《新編日語》をみると、「そこで」は第一冊の第17課で新出語彙として紹介されており、中国語訳に「于是」が与えられている。呂 (2004 : 464) では、中国語の「于是」は「後ろの事柄が前の事柄を受けていることを表す。後ろの事柄は往々にして前の事柄から引き起こされるものを表す」としており、学習者は教材で学習した用法通りに「そこで」を使用していることがわかる。

(3) 彼らは、村の経営の相談会などのときには、その神霊の力を借りて相談をスムーズに運ぶことを考えた。そこで、神霊を呼び寄せる道具を工夫した。(CN-3)

(4) ホテルと違い、民宿の分布が分散している。従来の人工サービスだけでは、これらの管理会社の効率性は低い。そこで、一部の科学技術社は人工サービスを代わるため、ハイテク製品を開発した。(CN-4)

以上から、両者の「それで」の使用傾向は作文においても論文においてもそれぞれ違っており、論文において「そこで」は、両者とも前件が原因やきっかけで後件が発生したことを表す用法で使われているものの、その使用数は学習者の場合は「順接」の接続詞の1割弱を占めているのに対し、日本語母語話者は3割弱で、「順接」の接続詞の中でも一番よく使われている。また、論文において日本語母語話者の「そこで」の使用は特徴的な文章構造と共起表現が見られ、自説をより効果的に導入するのに役立てており、より論理性の高い論文に仕上げることを目指していることが窺える。一方、学習者は中国語訳の「于是」

の影響もあって前件が原因やきっかけで後件が発生したことを表す用法で使われているものの、日本語母語話者にみられた特徴的な文章構造と共起表現は確認されなかった。

（2）「それで」の使用傾向

表2から、日本語母語話者は論文において「それで」を用いないことがわかる。また、先行研究からみると、俵山（2017）、浅川（2003）では、日本語母語話者の「それで」の使用例は見られなかったが、金（2017b）では、8例で、「順接」の接続詞の7.2%を占めている。主には「メールで友人に本を借りる」「手紙で入院中の後輩を励ます」「メールで先輩に起こった出来事を友人に教える」などのタスクで用いられており、読み手との親疎関係からみると、いずれも親しい関係になっていることがわかる。

一方、今回の調査で学習者の「それで」の使用例は15例あり、「したがって」「そのため」の次に多く使用されていることがわかる。先行研究からみると、金（2017b）では35例で「順接」の20.3%を占めており、浅川（2003）では3例、俵山（2017）では7例が確認された。

以上から、日本語母語話者は論文においては「それで」を用いないが、メールや手紙などで相手が親しい関係の場合に限って「それで」を用いると言えよう。しかし、学習者の場合は論文においても、作文においても「それで」をよく用いる傾向がある。このような日本語母語話者と学習者の違いは何が原因であろうか。以下ではその原因を探ってみることにする。

日本語記述文法研究会（2009：64）では、「それで」は「先行部で述べたことが原因・理由で、後続部の事態が起きたと述べるもの」としている。また、学習者の使用している日本語の教材《新編日語》をみると、「それで」は第一冊の第5課で新出語彙として紹介され、中国語訳に「因此」「所以」が与えられている。呂（2004：452）では、中国語の「因此」は、「結果や結論を表す節に用いる。前節に“由于”を用いて呼応することもある」と述べられており、呂（2004：374）では、中国語の「所以」は、「因果関係を表す文に用い、結果や結論を表す」としている。以上から、中国語の「因此」「所以」は前件と後件の強い因果関係を表す表現であることがわかる。

学習者の「それで」の使用例をみると、以下の(5)(6)のように、前件と後件の因果関係を表すために用いられていることがわかる。しかし、日本語記述文法研究会（2009：65）では、「それで」は「口語的であり、日常会話に用いられる」としており、書き言葉では前件と後件の因果関係を表す際、「そのため」「したがって」「よって」等の表現がよく使われている。表2をみると、学習者では「したがって」が34.3%、「そのため」が20.3%で、「順接」の接続詞の中で最もよく使われていることがわかる。しかし、「順接」の接続詞の中で「それで」の使用率が10.5%を占めており、学習者は「それで」は「したがって」「そのため」と同じく、書き言葉として使えると認識していることが窺える。

- (5) 「あいさつ」の基本的な意味としては、日本人が日常生活や場合に対して、相対的に固定された言語表現の形式を使い、互いの間に短い礼儀的なコミュニケーションを行うことを指す。それで、「あいさつ」は人間関係を維持し、強化するためのマナー行為で、人と人との融和と調和を維持するために最良の策略と手段である。(CN-3)
- (6) 一方、日本の総出生率は年々下がっている。人口の高齢化が進むほど高齢の人口の割合もますます高くなる。それで、日本は労働力が不足の問題が深刻である。(CN-20)
- (7) 1980 年前後にアメリカにおいて軍民両用技術が注目を集め始めた。それで、日本はその時から、日本の政府は自国の国情に基づいて制作を調整し、軍民両用技術政策を実施した。(CN-7)

また、学習者の使用例には、(7)のように「そこで」の方がもっと相応しいと思われる例も見られた。確かに「それで」と「そこで」は前件と後件の因果関係を示す用法では共通しているが、森田 (2004 : 596) で述べられているように、「ある場面を設定して、その場面の事態に対処するために起こす意志的な行動を表す」場合は「そこで」が用いられるのである。以上から、学習者の「それで」の使用例が多いのは、書き言葉として使えると認識していると同時に、「そこで」と「それで」の使い分けができていないことが影響しているように思われる。

おわりに

本研究では、日本語母語話者との比較を通じて卒業論文における学習者の接続詞、特に「順接」関係の接続詞に注目して分析を行った。その結果を以下にまとめる。

全体的に学習者は日本語母語話者に比べ、接続詞の使用数は少ないものの、接続詞の種類は多いことが確認された。類型別に見ると、日本語母語話者では「並列」「列挙」「逆接」の順で多く使用されているのに対し、学習者では「並列」「逆接」「順接」の順になっており、論文において接続詞の使用傾向に違いが見られた。

特に「順接」関係の接続詞をみると、両者とも「したがって」「そのため」が多く使用されているものの、「順接」の接続詞の使用傾向に違いが見られており、日本語母語話者では「そこで」、学習者では「それで」の使用が目立っている。具体的に、「そこで」は、両者とも同じ意味用法で使われているものの、日本語母語話者の「そこで」の使用は特徴的な文章構造や共起表現が見られ、自説をより効果的に導入することを目指していることがわかる。一方、日本語母語話者の「それで」の使用例は 0 例に対して、学習者は 15 例もあり、書き言葉として使えると認識していることが窺える。また、日本語母語話者なら「そこで」を選ぶ場面で「それで」を選んでいる使用例も見られ、「そこで」の意味機能及び「そ

こで」と「それで」の違いについて十分理解していないことが考えられる。

以上の分析から、今後論文指導の際、文章をより正確に、論理的に表し、読み手に文章の展開を予測しやすくするため、接続詞の話し言葉と書き言葉の違いについてしっかり指導していくと同時に、個々の接続詞の意味・機能だけではなく、特徴的な文章構造及び共起表現を学習者に提示することも必要なのではないかと思われる。

参考文献

- 浅川美穂子(2003)、「論説的文章における接続詞について—日本語母語話者と上級日本語学習者の作文比較」『言葉と文化』4、87-97 頁。
- 石黒圭(2008)、『文章は接続詞で決まる』光文社出版。
- 石黒圭(2009)、「接続表現のジャンル別使用率について」『一橋大学留学センター紀要』12、73-85 頁。
- 石黒圭・阿保さみ枝・佐川祥予・中村沙弥子・劉羊(2009)、「接続表現のジャンル別使用率について」『一橋大学留学センター紀要』12、73-85 頁。
- 金蘭美(2017a)、「YNU 書き言葉コーパスに見られる日本語学習者の接続詞の使用について—韓国語母語話者の『逆接』関係の接続詞に注目して」『国語研究』35、87-93 頁。
- 金蘭美(2017b)、「YNU 書き言葉コーパスに見られる日本語学習者の接続詞の選択—韓国語母語話者の『それで』の多用に注目して」『ときわの杜論叢』4、52-68 頁。
- 俵山雄司(2017)、「流れがスムーズになる接続詞の使い方」(石黒圭『わかりやすく書ける作文シラバス』くろしお出版)、141-157 頁。
- 日本語記述文法研究会編(2009)、『現代日本語文法 7 第 12 部談話・第 13 部待遇表現』くろしお出版。
- 森田良行(2004)、『基礎日本語辞典』角川書店。
- 李成愛(2020)、「卒業論文における接続詞の使用実態について—日本語母語話者と中国人日本語学習者の比較」『東アジア日本学研究』4、99-114 頁。
- 呂叔湘(2004)、『中国語文法用例辞典』東方書店。
- 周平・陈小芬(2012)、『新編日語』上海：上海外语教育出版社。

Current Situation of the Use of Conjunctions Used by Japanese Learners in Graduation Thesis: Focusing on the Sequential Connectives of Conjunctions

LI, Chengai

Abstract

The research investigates the graduation theses and compares the difference in Japanese native speakers and Japanese learners in China with regard to the frequency of using conjunctions especially the use of “sequential connectives”. As for the frequency of conjunctions, the result

reveals that native speakers prefer to use 「*sokode*」 however, Japanese learners in China are very likely to use 「*sorede*」. The result shows that both native speakers and Japanese learners in China are using 「*sokode*」 in the same way, which stresses the feature of article's construction and co-expression by analyzing the examples of Japanese native and it can be seen that they are aiming to introduce their own theory more effectively. What's more, regarding to 「*sorede*」, there is 0 case of native Japanese learners to use but 15 Japanese learners often use it as a spoken language who lacks of the awareness that belongs to written language. Furthermore, there are many examples that Japanese native speakers chose to 「*sorede*」 when they should use 「*sokode*」. In the future guidance on thesis, it will be necessary to strengthen the difference of spoken language and written language in conjunctions and to make the article more logical and easy for readers to understand, it is necessary to present that not only the meaning and function of conjunctions but also the feature of thesis construction and co-expression.

Keywords : graduation thesis, conjunctions, sequential connectives, 「*sokode*」, 「*sorede*」

疑似疑問表現文末型“是不是”構文に関する一考察 —「認識喚起」における共起表現の形式と語用論的機能を巡って—

楊 明（九州大学大学院生）

要旨

本研究では先行研究を踏まえながら、疑似疑問表現文末型“是不是”構文の「認識喚起」用法における共起表現を研究対象とし、Brown, P., and S. C. Levinson. (1987)の語用論的観点を援用し、その形式と機能を解明することを目的とした。まず、調査の結果によると、299例の「認識喚起」のうち、142例の共起表現が分布したことが分かった。次に、「呼称詞」型(65)、「人称代名詞＋動詞」型(54)、「人称代名詞＋動詞＋呼称詞」型(21)、「呼称詞＋動詞」型(2)、という四種類の形式が観察された。他用法との対比を行った結果、「認識喚起」の方がより顕著な使用傾向も見られた。また、文末型“是不是”構文が「認識喚起」として使用される場合、形式的には無標的疑問文であるが、意味的には勧誘・提案を表す命令文であると提示した。さらに、人称代名詞と動詞と文末型“是不是”との共起表現は統語的には二重質問の形を採り、注意喚起語の一種であり、命題の是認に対する同意・共感への欲求であることを述べた。最後に、文末型“是不是”と呼称詞との共起表現には、情報伝達の相手を特定し、FTAの脅威を緩和する効果があることが示唆された。いずれの場合も、話し手の伝達意図を円滑に聞き手に伝える為の手段・方式の一つであると筆者は考える。

キーワード： 疑似疑問、文末型“是不是”、認識喚起、共起表現、語用論的

はじめに

「疑似疑問表現」とは、「〈疑い〉が消滅化・希薄化しているということから相手に認識や追認や同意を求めるといった〈問いかけ〉」（仁田 1991:152）の表現であり、中国語文末型“是不是”構文がその一つに数えられる。楊明（2020）では、森山（1989:100）の「聞き手情報配慮非配慮」及び蓮沼（1995:389-399）の「情報への心理的距離」という分類基準を参考し、文末型“是不是”構文の意味用法を「命題質問」「推量確認」「認識喚起」「認識要請」という四種類に分けた。その中、「認識喚起」は「有標的」(marked)な疑問用法（森山（1989:100）による「話し手(以下、S)情報確定・聞き手(以下、H)情報依存非依存」を表す文）であり、それをSがHに自分と同様な認識を共有するように同感を求めて

勧誘する用法であると定義した。そして、楊明（2020）において、「認識喚起」は使用率が最も高く、文末型“是不是”構文の最も典型的な用法であることが検討された。

そして、図1に示すように、「認識喚起」における発話のメカニズムが形成されることも明らかになった。まず、「Step-1」は「Sの発信」を表す段階である。この段階において、Sがある事情に対する自分の主張をHに伝達しようとしている。次に、「Step-2」は「Hの受信」を表す段階である。この段階において、HがSの主張を自分の立場で理解しようとしている。さらに、「Step-3」は「Hの発信」を表す段階である。この段階において、HがSに同意する場合は肯定的な回答をし、反対する場合は否定的な回答をし、不明な場合は回答しないとしている。そして、「Step-4」は「Sの受信1」（命題行為）を表す段階である。SがHから“是不是”に対して「是」あるいは「不是」という回答をもらったのである。最後に、「Step-5」は「Sの受信2」（発語内行為）を表す段階である。この段階において、SがHから自分の主張に対する同意を得たのである。前述に示すように、ステップ1からステップ5までの流れで「認識喚起」における発話のメカニズムが形成されると楊明（2020）は主張している。

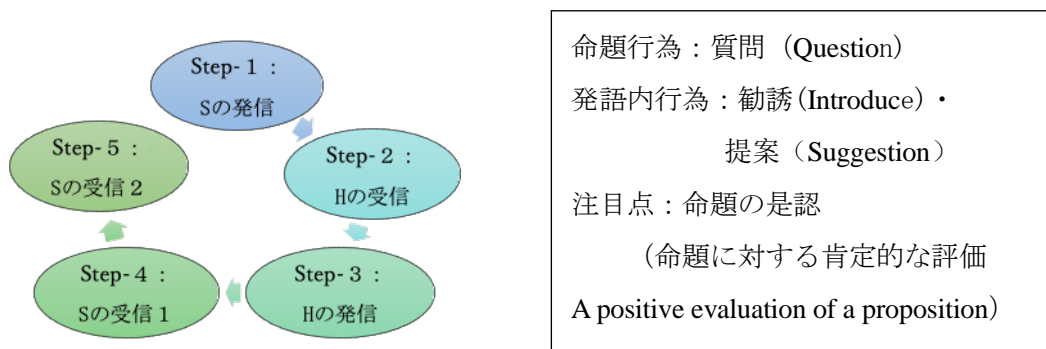


図1：「認識喚起」における発話のメカニズムの形成

また、筆者がデータを再分析する際に、「認識喚起」において、文末型“是不是”が人称代名詞と動詞及び呼称詞との共起表現の出現率が高いことも観察された。このような共起表現が「認識喚起」の発話メカニズムにおいてどのような機能を果たすのかに関しては検討する必要があると考える。しかし、楊明（2020）では「認識喚起」に焦点を当ててその形式と機能、特にそれに見られる共起表現を詳しく検討されていない。さらに、宇都（2003）、関（2006）、中田（2015）などの論述も本研究にとって貴重な論考であるが、文末型“是不是”構文の「認識喚起」という用法の形式と機能に関してあまり議論されていない。したがって、本研究は、先行研究を踏まえて筆者の初期研究における不足を補充する立場を取り、Brown, P., and S. C. Levinson. (1987)（以下、B&L (1987)）における語用論的観点を援用し、疑似疑問表現文末型“是不是”構文の「認識喚起」における共起表現を研究対象とし、その形式と機能を解明することを目的とする。

I. 「認識喚起」における共起表現の分布と形式

本研究では北京大学中国語言学研究中心が開発した《現代漢語語料庫》(CCL) と文学小説テキストを利用し、合計 585 例の文末型“是不是”構文を収集した。調査した結果、「認識喚起」(299 例、51.11%) のうち、共起表現がある用例は 142 例であることが分かった。その中、「呼称詞」型 (65)、「人称代名詞+動詞」型 (54)、「人称代名詞+動詞+呼称詞」型 (21)、「呼称詞+動詞」型 (2)、という四種類が観察された。統計の結果を以下の表 1 に示す。

表 1: 「認識喚起」における共起表現 (142 例) の形式と分布

種類 (用例数 ; %)	内訳 (用例数)
「呼称詞」型 (65 ; 45.77)	氏名 (32) ; 役職・職業名称 (13) ; 親族名称 (10) ; 社会通称 (10)
「人称代名詞+動詞」型 (54 ; 38.03)	你 (29) / 你们 (7) / 您 (5) / 我 (2) / 你们俩 (1) + 说 + “是不是” ; 你 (4) / 您 (1) + 看 + “是不是” ; 你 (2) + 瞧 + “是不是” ; 你 (1) / 您 (1) + 想 + “是不是” ; 你们 (1) + 瞅瞅 + “是不是”
「人称代名詞+動詞+呼称詞」型 (21 ; 14.79)	呼称詞+你+说+“是不是” (13) ; 呼称詞+你+看+“是不是” (4) ; 你+说+“是不是”+呼称詞 (3) ; 你+呼称詞+看+“是不是” (1)
「呼称詞+動詞」型 (2 ; 1.41)	大伙+说+“是不是” (1) ; 弟兄们+说+“是不是” (1)

また、「認識喚起」において、共起表現が文末型“是不是”構文の他の用法より多用されることが見られた (「命題質問」2.82% (71 例のうち、2 例あり) ; 「推量確認」2.15% (93 例のうち、2 例あり) ; 「認識要請」0.00% (122 例のうち、0 例))。形式上他用法とはっきり区別できる特徴を有することによって、「認識喚起」は機能上特別な役割を果たすのではなかろうかと考えられる。

II. 「認識喚起」における共起表現の意味と機能

話者が文末型“是不是”構文を「認識喚起」として使用する場合、形式的には「…は正しいかどうか」という無標的 (unmarked) な疑問文であるが、意味的には「…しよう」「…の方がいい」と言う勧誘・提案を表す命令文である。「認識的に優位な位置にいる話し手が、自分と同様な認識をもつように聞き手を促し、その成立状態を確認するといった共通の働きを認める」ことができ、「通常の間人であれば必ず備わっているはずの認識能力である『理解力・悟性』に訴えて、相互了解を形成し、その適合を確認」(蓮沼 1995:389-399) する

のである。すなわち、S の発話の最終的なゴールは相手に自分の主張を遂行させると言うことである。

「認識喚起」として用いられる文末型“是不是”は、「聞き手に対する積極的働きかけを表す成分」と頻繁に共起する（中田 2015 : 122-123）。この「成分」について邵敬敏（1996 : 125）は、「帮助询问的词语（疑問の一助になる語）」と陳述し、“助问词语”と名付けた。本研究は、このような“助问词语”の出現型を収集したデータに基づき、「呼称詞」型、「人称代名詞＋動詞」型、「人称代名詞＋動詞＋呼称詞」型、「呼称詞＋動詞」型、という四種類に分けた。その中、下に示す（1）と（2）のように「人称代名詞＋動詞」型の下位タイプである“你＋说＋是不是”（あなたが言えば…）は、出現率が高いことが確認された。また、表 1 に示すように、第二人称代名詞の場合では、“你”だけでなく、敬称である“您”、複数型である“你们”“你们俩”も出現した。そして、動詞の場合では、“说”（言う）だけでなく、“想”（考える），“看”“瞧”“瞅瞅”（見る）のような動詞も第二人称代名詞の後ろに来て“是不是”と共起することができる。

“你＋说＋是不是”（あなたが言えば…）が文末型“是不是”と共起しやすい原因について、中田（2015 : 123-124）は「両者ともに『話し手の判断が是である』という認識の上で、聞き手に同調を要求するものである」と指摘している。文末型“是不是”の意味は「あなたが言えば…そうだろう」という意味が含まれること、そして、「你说」自体も質問の形を取っていることから、「人称代名詞＋動詞」と文末型“是不是”との共起表現は統語的には二重質問の形になる。“你说”（あなたが言えば…）は文法上には独立成分であり、「是由于语用交际需要而添加的（言語コミュニケーションのニーズに応じて付け加えた）」（邵敬敏 1996 : 125）為、（1'）と（2'）のように省略されても非文にならない。

（1）

“你，我，还可以挖点野菜、扒点树皮。可你弟弟田青不成，他太小，要不吃粮食，就
没法养大他。你说是不是？”

“是。娘，我以后一粒粮食都不吃，全省给小弟。”她打了个哈欠要躺下。

（俞智先，廉越《走西口》）

（「君と私は山菜とか樹皮とか食べてもいいが、弟の田青は無理だ。まだ小さいから
ご飯を食べないと育てられない。あなたが言えばそうだろう。」

「はい。お母さん、今後ご飯をちっとも食べない、全部弟に譲る。」彼女はアクビをしながら寝ようとした。）

（1'）

“你，我，还可以挖点野菜、扒点树皮。可你弟弟田青不成，他太小，要不吃粮食，就
没法养大他。是不是？”

(2)

“这次眼看着我们就要大发了，没想栽到李鸿章那个老小子手里。不过，也没什么，这年头只要脑瓜子活，弄钱还不容易！何况我还结识了德公公你哩，你说是不是？”

（张建伟《走向共和》）

（「今回は我々があわやお金を儲けそうになろうとしたのに、李鴻章のあの奴の手に陥ちるなんかとは思わなかった。でも、とんでもない。こんな時代に頭さえ良ければ、お金を作るのは易しい。加えて、徳様と知り合いになった、あなたが言うとうさだろ」）

(2')

“这次眼看着我们就要大发了，没想栽到李鸿章那个老小子手里。不过，也没什么，这年头只要脑瓜子活，弄钱还不容易！何况我还结识了德公公你哩，是不是？”

しかし、(1) と(2)に示すように、文末型“是不是”の前に“你说”（あなたが言えば…）が付加えられると、(1') と(2')より語用論的な特徴と機能を有する。まず、「“是不是”と機能的に互助的な作用を生ずる」（宇都 2003:9）為、相手に向ける注意喚起語（attention-getter）の一種であると言っても過言ではない。次に、刘月华（1986:168）において、「“你说”有时是征询对方对人或事物的看法，让对方表态，目的在于表明自己的看法是正确的，希望对方同意自己的看法。（“你说”は時には相手に人物や事柄に対する意見を問い掛け、相手に態度を表明させる。自分の考えが正しいということを表明し、相手が自分の考えに同意してほしいということが目的である。）」という指摘通りに、ある発話において、話者が相手に対して、命題の是非ではなく、命題の是認に対する同意（agreement）・共感（sympathy）への欲求（wants）と言えるだろう。

さらに、前述した「人称代名詞＋動詞」以外に、文末型“是不是”の前後にはHの氏名も出現し、二種類は併用できる場合も多い（邵敬敏 1996:125, 関 2006:189-191）。つまり、本研究の用語で換言すれば、文末型“是不是”は(3)のように呼称詞と共起する場合もあり、(4)のように人称代名詞と動詞と呼称詞の三つが共起する場合もある。そして、前述の「人称代名詞＋動詞」の場合と同じ、(3')と(4')のように文末型“是不是”と共起する呼称詞などを削除すると、コミュニケーション伝達上には語用論的ポライトネスが失われて不自然になる恐れがある。

(3)

杨先生 ……来，我帮着大哥去干，今天被撤职，明天就得还弄到个官。即使再失败了，咱们还会另开途径，到别处去找官作，是不是，大哥？

洗局长 不成问题。到哪里也得有咱们的官作，凭咱的本事，凭咱的经验。

（老舍《残雾》）

（楊先生「よし、兄貴の手伝いをしに行こう。今日は免職されても、明日は官職を得る。たとえ再び失敗しても、我々は別の道を切り開いて、他のところで官職を探しに行ける。そうだろう、兄貴。」

洗局長「問題ない。我々の腕前と経験でどこにも官職があるのよ）」

(3’)

即使再失败了，咱们还会另开途径，到别处去找官作，是不是？

(4)

“据我看，四月二十七既是吉日，又是礼拜天。你知道礼拜天人人有‘饭约’，很少的特意吃咱们。可是他们还不能不来，因为礼拜天多数人不上衙门办事，无可借口不到。八爷你说是不是？”

“就是！”

（老舍《老张的哲学》）

（「僕から見ると、四月二十七日は吉日であるし、週末である。週末だったら、みんな約束あるから、わざわざ我々の食事会に参加する必要性がない。しかし、彼らは出席しなければならない。なぜかという、週末なので事務の窓口とかは開けないから来ない言い訳がなくなるから。八爺様あなたが言うそうだろう。」

「そうだよ！」

(4’)

可是他们还不能不来，因为礼拜天多数人不上衙门办事，无可借口不到。是不是？

文末型“是不是”と呼称詞との共起表現は「聞き手を特定する」（関 2006:189-191）機能を持つと考えられる。しかも、相手のフルネームがほぼ出現しないことが確認された。それは、フルネームを使うことが相手に「逃げ道を与えず」、「フェイスを脅かす行為」（FTA）に「縛りつける」ことになり、「ポライトでない」からである（田中 2011:77-78, 288-289）。また、B&L (1987) の説によると、「同じ集団の一員であることを伝える」表現を使うことで、「S は暗に、H との共通基盤（common ground）を主張すること」が可能になり、その共通基盤の標識には、「仲間ウチの呼びかけ表現」が挙げられる（田中 2011:144）。

S が H に文末型“是不是”を用いて勧誘・提案する際に、文末型“是不是”の前後に、親しい人に対する「氏名」（愛称（diminutives）や親愛を表す呼称（endearments）など）及び「親族名称」などを付け加え、初対面の人に対する「社会通称」などを利用することで、「一般的親切さ（kindness）」を表明したり、「仲間意識」を強調したり、「FTA の脅威」を緩和したりする方略を工夫する（田中 2011:144-169）。こうした共起表現の使用は、B & L (1987) におけるポジティブ・ポライトネス（positive politeness）に当てはまるのではないかと考えられる。また、目上（尊敬すべき・敬遠すべき）の人に対して、S が文

末型“是不是”の前後に「役職・職業名称」などを用いることで、敬意 (deference) を表明する様子が窺えた。このような場合、「H が S より社会的に上位にある」こと、言い換えれば、『相手との力関係』 (power) の差が大きいという認識を持っていること」を、S は直接に H に伝えようとしている (田中 2011 : 250)。こうした共起表現は、「潜在的にフェイス威嚇的である行為の性質を緩和する効果」を持つことを示し、B&L (1987) におけるネガティブ・ポライトネス (negative politeness) に従った結果であると考えられる。いずれの場合も、文末型“是不是”と人称代名詞と動詞と呼称詞との共起表現は、S の伝達意図 (communicative intentions) を円滑に H に伝える為の手段 (means)・方式 (mode) の一つであると筆者は考える。

おわりに

本研究では先行研究を踏まえ、疑似疑問表現文末型“是不是”構文の「認識喚起」における共起表現を研究対象とし、B&L (1987) の語用論的観点を援用し、その形式と機能を説明することを目的とした。まず、調査の結果によると、299 例の「認識喚起」のうち、142 例の共起表現が分布したことが分かった。次に、「呼称詞」型 (65)、「人称代名詞+動詞」型 (54)、「人称代名詞+動詞+呼称詞」型 (21)、「呼称詞+動詞」型 (2)、という四種類の形式が観察された。他用法との対比を行った結果、「認識喚起」の方がより顕著な使用傾向も見られた。また、文末型“是不是”構文が「認識喚起」として使用される場合、形式的には無標的な疑問文 (「S 情報不確定・H 情報依存」を表す文) であるが、意味的には勧誘・提案を表す命令文であると提示した。さらに、人称代名詞と動詞と文末型“是不是”との共起表現は統語的には二重質問の形を採り、注意喚起語の一種であり、命題の是認に対する同意・共感への欲求であることを述べた。最後に、文末型“是不是”と呼称詞との共起表現には、情報伝達の相手を特定し、FTA の脅威を緩和する効果があることが示唆された。いずれの場合も、S の伝達意図を円滑に H に伝える為の手段・方式の一つであると筆者は考える。

参考文献

【日本語文献】

- 宇都健夫 (2003)、「“是不是”を用いた「確認性疑問形式」」『東京大学中国語中国文学研究室紀要』第 6 号、1-23 頁。
- 関光世 (2006)、「中国語における文末付加型疑問文のイントネーションに関する観察—正反タイプを中心に」『京都産業大学論集』人文科学系列第 34 号、187-208 頁。
- 中田聡美 (2015)、「中国語における“是”構文の意味と機能」大阪大学博士論文 14401 甲第 18184 号。
- 仁田義雄 (1991)、『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房。
- 蓮沼昭子 (1995)、「対話における確認行為—『だろう』『じゃないか』『よね』の確認用法」(仁田義雄編

『複文の研究（下）』くろしお出版）、389-419 頁。

森山卓郎（1989）、「コミュニケーションにおける聞き手情報—聞き手情報配慮非配慮の理論」（仁田義雄・

益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版）、95-120 頁。

楊明（2020）、「疑似疑問表現文末型“是不是”構文の有標疑問用法について—その日本語訳との対照を兼ねて」『東アジア日本学研究』第2号、105-112 頁。

【中国語文献】

刘月华（1986）、「对话中“说”“想”“看”的一种特殊用法」《中国语文》第3期、168-172 頁。

邵敬敏（1996）、『现代汉语疑问句研究』商务印书馆。

【英語文献】

Brown, P., and S. C. Levinson. (1987), *Politeness: Some Universals in Language Usage*, Cambridge: Cambridge University Press. （ペネロピ・ブラウン、スティーヴン・C・レヴィンソン [著]；田中典子 [監修]；斉藤早智子・津留崎毅・鶴田庸子・日野壽憲・山下早代子 [訳]（2011）『ポライトネス：言語使用における、ある普遍現象』研究社）

【テキスト及び用例出典】

現代汉语语料库（CCL）北京大学中国語言学研究中心

追加文学小説テキスト：阿耐《欢乐颂》（2016 年、四川文艺出版社）；艾米《山楂树之恋》（2007 年、江苏文艺出版社）；常琳《北京青年》（2012 年、华侨出版社）；高满堂，孙建业《闯关东》（2009 年、万卷出版公司）；高璇，任宝茹《我的青春谁做主》（2009 年、花山文艺出版社）；郭宝昌《大宅门》（2003 年、作家出版社）；海岩《便衣警察》（1985 年、人民文学出版社）；海岩《拿什么拯救你，我的爱人》（2001 年、作家出版社）；海岩《你的生命如此多情》（1999 年、作家出版社）；海岩《永不瞑目》（1998 年、作家出版社）；海岩《玉观音》（2000 年、群众出版社）；兰晓龙《士兵突击》（2006 年、花山文艺出版社）；兰晓龙《我的团长我的团》（2009 年、人民文学出版社）；李晓兵《生存之民工》（2005 年、海天出版社）；六六《蜗居》（2007 年、长江文艺出版社）；刘猛《利刃出鞘》（2012 年、花山文艺出版社）；路遥《平凡的世界》（1986 年、北京十月文艺出版社）；麦家《风声》（2007 年、南海出版社）；缪娟《翻译官》（2006 年、江苏凤凰文艺出版社）；莫言《红高粱》（1986 年、海峡文艺出版社）；慕容余华《我们生活的年代》（2008 年、花山文艺出版社）；盛和煜，张建伟《走向共和》（2003 年、民族出版社）；石康《奋斗》（2007 年、百花洲文艺出版社）；石钟山《军歌嘹亮》（2002 年、漓江出版社）；唐欣恬《裸婚》（2010 年、华文出版社）；俞智先，廉越《走西口》（2009 年、作家出版社）；周梅森《人民的名义》（2017 年、北京十月文艺出版社）

A Study on Pseudo-question “Shi bu shi” Sentence-final Construction

YANG, Ming

Abstract

The purpose of this paper basing on previous research is to clarify the form and function of the method of "arousing recognition "in pseudo-question “Shi bu shi” sentence-final construction from the viewpoint of pragmatics in Brown, P., and S. C. Levinson. (1987). Firstly, according to the survey results, co-occurrence expression of 142 cases is recognized in 299 cases of "arousing recognition". Secondly, four types of forms are observed: "address forms" type (65), "personal pronoun + verb" type (54), "personal pronoun + verb + address forms" type (21), and "address forms + verb" type (2). As a result of comparison with other uses, "arousing recognition "shows a tendency to be more pronounced. In addition, when “Shi bu shi” sentence-final is used as "arousing recognition", it is formally an unmarked interrogative sentence, but it is presented that it is an imperative sentence which expresses introduce and suggestion in meaning. Moreover, it is proven that the co-occurrence expression of personal pronoun and verb and “Shi bu shi” sentence-final takes the form of a double question syntactic. It is a kind of attention-getter, and it is the wants for agreement and sympathy for the approbation of the proposition. Finally, it is suggested that the co-occurrence expression of “Shi bu shi” sentence-final and address forms is effective for identifying the information transfer addressee and alleviating the threat of the FTA. In either case, the author considers that it is one of the means and mode for smoothly transmitting the communicative intentions of speaker.

Keywords : pseudo-question, “Shi bu shi” sentence-final, arousing recognition, co-occurrence expression, pragmatic

近代詩形成期における『学之光』の意義について —『学之光』誌の詩を中心に—

池 孝民（商丘師範学院）

要旨

1914年4月に創刊され、1930年12月に第30号まで刊行された学友会の機関誌『学之光』には文芸作品とか西洋近代思想の紹介など多様な作品が載せられて、朝鮮民衆の啓蒙にも多くの役割を果たした。朝鮮国内で言論の自由がほとんどなかった1910年代に『学之光』誌は朝鮮国内にも広く購読されて朝鮮民衆の啓蒙にも大きな役割を果たした。『学之光』誌に掲載されている詩を前世代の詩と比較して見れば、形式においては破格的な自由詩形式に近くて、内容面においては個人的な感情と自我への個別的な認識が表現された抒情詩に近い作品群が多い。本稿では、1910年代『学之光』誌に掲載されている詩群が1920年代の本格的な近代詩成立過程の過渡期における意義を探ってみる。

キーワード： 近代詩、学友会、学之光、自由詩、抒情詩

はじめに

韓国の近代詩史において一般的に1920年代は近代詩が本格的に出発した時期として認定されている¹⁾。1920年代に入ってから急激に増えた文芸誌とともにある程度の形を成した近代詩の出発が始められた。ここで、「新体詩」と呼ばれる多少は曖昧な時期を経て本格的な文芸誌、そして金素月・韓龍雲などより専門的な文学へ渡る途中に置かれた過渡期的な時期として1910年代は近代詩の以前と以後を分ける境界線であると同時に架け橋ともいえるような意義を持つ。1910年の日韓合併によって、留学生団体を失った在日留学生らは1911年5月11日に新たな留学生代表機関として親睦会を組織した。そして解散・再結成などの紆余曲折を経て、この親睦会を母体²⁾として1912年10月27日在日留学生の代表組織として在東京朝鮮留学生学友会が結成されて在日朝鮮人全体の中心的な存在となった³⁾。

また1914年4月から1930年12月の第30号まで刊行された学友会の機関誌『学之光』には文芸作品とか西洋近代思想の紹介など多様な作品が載せられて、朝鮮民衆の啓蒙にも多くの役割を果たした。『学之光』に掲載されている詩を前世代の詩と比較して見れば、形式においては破格的な自由詩形式に近くて、内容面においては個人的な感情と自我への個別的な認識が表現された抒情詩に近い作品群が多い。

I. 革新志向の文学観

1910年代に入ってから当時の留学生たちの文学観を理解する上で李光洙が『大韓興学报』第11号(1910. 3. 30)に載せた「文學의 價値(文学の価値)」がもっとも代表的で、またこれが今まで知られた韓国最初の「近代文学論」ともいえる。李光洙は文学の意義について文学は元々一般学問であったが、徐々に学問の複雑化によって「詩歌、小説など“情”をもつ文章」になったと定義して、英語の「Literature」も似ている歴史をもっていると定義した。

『学之光』第3号に載っている崔斗善の「文學의 意義에 關하여(文学の意義に関して)」は文学の語意、範囲、流れに対して簡単に纏めた文章である。彼は「文学」を文章の中に「情・意」を書くものと定義しながら、このような定義の刺激を与える文学こそが「生命」をもつ文学であると主張していた。

文学の意義を論ずるに当たって(中略)文学が文学を成す理由があるはずなので、一言でいえば文学には文学の命があることだ。更にその命はその文学が価値があればあるほど命は益々長く、その文学を産んだ人は限られた命があるが、産まれた文学そのものは千年でもその命を保つことができるのだ。また、我々が千年間その文学を鑑賞することは即ちその命を味わうことである。⁴⁾

このような崔斗善の文学に対する見解と比較してみるべき「文学定義」が『学之光』第6号に掲載されていた「朝鮮의 文學(朝鮮の文学)」という安廓の文学観である。文学を学問的な領域に持ち込んだ安廓の文学観は李光洙と崔斗善の文学観とはまた大きく異なるものである。安廓は文学の定義を次のように述べていた。

文学はその範囲が広く、その種類が複雑で簡単明瞭に定義して解釈することは非常に難しい。しかし、敢えて表面的に解釈するならば、文学は美の感想を文字で表現するものであるといえよう。⁵⁾

安廓は文学を「美の感想を文字で表現したものである」と定義していた。慣習的な時代規範から離れて宇宙の法理と人心を得たものこそが完全なる文学になりえると明かしながら、今日文学の責任について説破していた。

『学之光』第8号に載っている「社会短評」の中にある「文學의 誤解(文学の誤解)」という評論を勘案すれば、純文学に心酔した一部の留学生以外の当時一般留学生たちの文学に対する認識を覗き見ることができる。「文學의 誤解(文学の誤解)」の中では文学は芸術としての「文学」ではなく、文明の牽引役としての文学に対しての「文学」を論じたもので、これこそが純文学に心酔した一部の留学生を除いての一般的留学生がもっていた文学観であろう。

私はこの際にして我が文壇に新詩と新小説が誕生して我が青年たちが新思想、新生命を得てそれを詠んで歌ったり、或は泣いたり悩んだりすることを望んだが、卓上には色とりどりの三文小説しか跋扈しないことをみて呆れてしまいます。

上述のように文学というものは、今は既存の文学概念から離れて、文学が「新文明の先鞭をつける」役割をしなければならず、新文学を通じての新文明の鼓吹こそが新思想の鼓吹ができると主張していた。従って朝鮮文壇に新詩と新小説の出現を待ち望むが、まだ朝鮮の青年たちは「タクチ本(六錢小説)」⁶⁾だけに溺れている現実を嘆く内容であった。

当時、留学生たちは文学がもつ社会的な意義について美的な領域に限らず民衆への啓蒙的な役割を強く意識していた。

現在、文学と政治を比べれば、政治は人民の外形を支配するもので、文学は人民の内情を支配するものである。故に、一国民の文明を考える上で、政治の変遷より文学の消長を察することが大で、また政治を復興させようとする場合は先ず人民の理想を復興させることで奏功すると思う。⁷⁾

即ち、彼らは小説・詩作品の役割について純粋な文学性だけではなく民衆への啓蒙までを意識していた。

そして安廓は「朝鮮の文学」の後半で新文学の建設を主張する。彼が主張する新文学とは旧時代的、すなわち儒教的な思想の影響下にある旧文学を打破すると同時に再建しなければならないというものである。

今、我が朝鮮の文学は一新を際して(中略)漢文と儒教は当然に撃退すべき時期で、真の文学を紹介して純正な趣味を普及して思想を革新させることに対してもまた大文豪を誕生させるべきである。大概、破壊と同時に建設が必然的なもので、今日の新風潮を際して旧文学を打破して新文学家の誕生は予の号令を待たずにも自生するだろう⁸⁾

破壊と建設の同時追求は新文学の本質が即ち、旧時代的な秩序を清算して新たな時代の秩序を内情の領域で構築しようとするところにあることが克明に表れている。ところが、破壊が即ち建設ではなく、また新しい文学の建設が即ち外国のものに同化されて成し遂げるものではない。

今日、若干の新刊した小説と詩歌を見ても七五調の洋風調の曲が流行して恋愛観の外国小説を翻訳することが多く、また修辞造句だけを自慢にするのみで、万一の場合、文学者が新風

潮だけに惑わされ単なる外来文学だけを崇めれば、以前の儒教に惑わされたことと同様に朝鮮固有の特性は滅ぼされ再び外来化されるだけなので、苦心しないはずがない。⁹⁾

このように朝鮮人が外国の新思潮とか新思想とかを吸収する際、批判的な態度を取らず、外国恋愛小説の単純翻訳だけの程度に留まれば、結果的には単純模倣に過ぎないと主張しながら、これは真の新文学とは言えないと批判している。また、文学の役割について国権喪失の現実を勘案すれば、植民地朝鮮にとって政治的な競争が事実上不可能になったからこそ文学、特に新文学の役割がもっと切実であって、新文学を通じて民衆への啓蒙も非政治的な面からすれば一つ有効な選択肢であるという主張が読み取れる。

Ⅱ. 『学之光』と詩

『学之光』には数多くの詩が載っている。当時の朝鮮人留学生たちは、相当な自負心を持っており、そして朝鮮社会に対する使命感も溢れていた。『学之光』の詩の内容もこのような彼らの心情を直接的に反映している。『学之光』に載っている詩の内容を大別すれば、①うっ憤の吐露、②苦悶の象徴、③伝統的な叙情の三種に分類できる。

1. うっ憤の吐露

捫鼻室主人の「제야말노(ジェヤマルロ)」では次のように詠んでいる。

原文: 兄弟야 記憶하는가 梅花꽃 香氣나는 나라/二八少女 아리다운 뺨같은 紅桃花 피는 나라/(중략)/運命이 우리를 逐出한 此樂土/어느 때에 다시한번 돌아가리!¹⁰⁾

訳文: 兄弟よ、覚えているか? 梅の花の香りのする国/十六の少女の美しい顔のような桃の花が咲く国/(中略)/運命が我らを追出したこの楽土/いつになったらもう一度帰れるのか!

また、兩球生の「六字歌」では次のように詠んでいる。

原文: 저건너不咸山에, 無窮花 한雙을 심었더니,/ 모진狂風에, 다 떨어져난 貌樣,/ 五臟이 터져, 내가 못볼게나./ (중략) 네아모리微物이나 못참난私情은 우리와 갓할게나.¹¹⁾

訳文: 彼方の白頭山にむくげの花を一双植えたが/酷い狂風で散ってしまったよう/五臓が破裂しそうで、私は見たくない。/(中略)/小さな雁とは言っても、捜せないその心は我らと同じであろう。

『学之光』に載っている詩歌の中でもこの二つの詩は、亡国民に転落した当時朝鮮留学生たちの心情をもっとも典型的に表出した作品と言える。

亡国の鬱憤を吐き出しながら彼らが提示している解答は朝鮮人の戦いであった。

原文：이즈러졌다그러나봄만오면/떠러졌구나그러나봄만오면은/다시둥글기언약치안이
하었나/다시나오기씩은남지안엇는가/웨—우러—네—알고우는가!!/웨—우러—네,모르고우
는가?!¹²⁾

訳文：欠けてしまった たが十五夜にさえなれば/散ってしまった たが春になりさえすれ
ば/再び満月になると 約束したのではないか/再び芽生えと 芽は残ってるのではない
か/なぜ一泣くのか お前は分かって泣いてるのか!!/なぜ一泣くのか お前、分からなく
て泣いているのか?!

つまり、芽が残っている以上は泣くばかりではなく戦うべきであると訴えていた。このほ
か「벨지엄의 용사(ベルギーの勇士)」、「新年의 노래(新年の歌)」(第4号)、「梁山道」(第5号)、「卒
業하신 여러 兄님에게 드리는 말(卒業される諸兄に捧げる言葉)」(第20号)などは皆戦うこ
とを訴えた内容であった。このような作品は従来の「新体詩」の形式から脱皮して近代風の
自由詩形式を試みながら、植民地現実に対する苦悩、そして戦いを訴えていた。

2. 苦悶の象徴

『学之光』への寄稿、投稿者たちは当時学生あるいは20代の青年が多かったため、人生問
題と真理、あるいは人生に対する態度などに関する作品も目立っている。

原文：「死의 恐怖,苦痛,死의 逸樂」을 뒤에 맞으며 가라느니,그래도,/「살지 아니하면
아니된다!」바람의標대로지아니할수없나니대개이는죽음은暗黒,悲哀,苦痛,絶望,戀愛,煩惱
,孤獨,寂寞을超越하여意識의空虛,온갖의忘却,無反應의 靜止,無抵抗의 漠漠世界로서니,오오
生의欲望!「살지아니하면아니된다!」—죽음과맞나는그刹那,그瞬中,아아「生」의實在,眞存
在를알기만하면살라는것이,온갖萬物이 바라는 바의 기쁜 웃음이여라!¹³⁾

訳文：「死の恐怖、苦痛、死の逸樂」を後にして行こうとしても、だけれども、/「生きなけ
ればならない!」という希望の目標に向かって行かなければならないと言うのは死は暗黒、
悲哀、苦痛、絶望、恋愛、煩惱、孤独、寂寞を超越して意識の空虚すべての忘却、無反応の
静止、無抵抗の漠々な世界ゆえ、嗚呼、生の欲望!「生きなければいけない!」—死と出会
うその瞬間、その最中、嗚呼「生」の實在、眞の存在を知りさえすれば、生きられるとい
うのが、全万物が望んでいる喜びの微笑みであろう!

これらの詩歌は、生を肯定的に歌ったものであつて、限られた生命を懷疑的ではなく真理
を求めながら、時には志操を詠った内容で意識と感覚の動きとを口語形式で思いのままに生
き生きとうたっている。韓国における自由詩の嚆矢となったのは『創造』創刊号(1919年2月)
に発表された島崎藤村・北原白秋らの詩集で習作期を過ごした朱耀翰の「火祭り」とされて

いる。¹⁴⁾

朱耀翰の「火祭り」は一青年の胸の内に湧きおこる亡国民としての人生や理想への思いをうたった散文詩である。詩の冒頭では、「あゝ日が沈んでゆく、西の空に、淋しい江の水面に、砕け散る薄紅色の波……あゝ日が沈めば 日が沈めば、日毎、あんずの木陰に、一人泣く夜がまた訪れるが」とやや感傷的にうたいだされている。ところが、「가는 시간(過ぎ行く時間)」(第4号)、「夜半」、「밤과 나(夜と私)」(第5号)、「한 곳(ハンクッ)」、「잘 때(寝る時)」(第6号)、「暗夜」(第20号)などの作品は朱耀翰「火祭り」「朝鮮の処女」などより何年前にすでに発表されていた。これらの作品も自由詩という新しい形式を取り入れながらも植民地朝鮮民衆に対して亡国の苦悩を伝達していた。

3. 伝統的な叙情

原文：타는 가슴, 눈물, 압힘, 무서운, 무거운, 설음, 숨, 놀림…… 이것을 가슴에 안고/그들은 깨어나니!/刹那의 동안 가슴에서 電火와 갓 치떠오르는/—갈 이는 가지안 이치 못 허리라—/—잇슬 이는 잇지안 이치 못 허리라—/허나, 아즉躊躇 허나니, 이것이 하여眞實 안인 꿈인가 허며,/그러나 그러나 꿈의 꿈은 안이고眞實인 꿈이니/眞珠 갓 흔 눈물은 끈이지안 이허고 숨여나오며/微笑를 들니 우든 그 의미마에는 悲哀의 주름을 띄우고/그 가슴에는 이름모를 허물이 생기나니/아아, 이것이 즐기든 사랑의 離別인가!¹⁵⁾

訳文：焦がれる胸、涙、痛み、恐い、重い、悲しみ、哀れ、驚き……これらを胸に抱いて/彼らは目を覚ました!/刹那の間、胸の中から火花のように浮かび上がる/—去る者は去るしかない—/—残る者は残るしかない—/でも、まだ躊躇している、これがもしかして眞実ではない夢かと思い、/しかし、しかし夢の夢ではなく眞実な夢だから/眞珠のような涙が絶えずにじみ出ている/微笑みを浮かべている彼の額には悲哀のしわを浮かべ/その胸には言いがたい空洞が生まれている/ああ、これが楽しんでた愛の離別なのか!

原文：閑가히 소물고 섭고던넛牧童에 돌아가,/長堤에 옥어진, 푸른 갈 입, 휘격거,/한 곡 맑은 필이부니,/「아—다스한고 원이여!/다시한번, 그부드럽고 다스한—愛 잇고 좇 잇는—/그 품에 싸안기고 십혀!」/은 空間의 沈黙을—一時에 깬 처라.¹⁶⁾

訳文：悠々と牛追いしていた昔の牧童に戻り、/堤防に生い茂っている青い葦を折り/一曲清らかな笛を吹くと、/「ああ—暖かい高原よ!/もう一度、その柔らかくて暖かい—愛があった香りがある—/その胸に抱かれない!」/すべての空間の沈黙を一瞬に打ち砕け。

前者の作品は別れを、後者の作品は郷愁と亡国民の哀愁を詠んだものである。このほか作品の内容にほかの要素を取り入れず、純粹に叙情と亡国民の哀愁を詠った作品に、「申 朝君을 보냄(申 朝君を送る)」(第4号)、「山女」(第5号)、「황혼의 노래(夕暮れの歌)」、「흰 모래 위에(白砂の上で)」、「除夜」、「夜市」、「午後」、「저녁 때(夜の時)」、「墓地에서(墓地にて)」

(第27号)などがある。

上述の作品群からも表れるように作品中には自分らの「啓蒙者」という意識を忘れず、作品の至る箇所に亡国民といううっ憤を刻みながらも当時日本での最新文芸思潮を朝鮮半島でも少なくない読者層を持っていた『学之光』を通じて伝えていた。これらの作品は漢詩形式を重んじた1900年代の詩風から脱皮して、口語体自由詩形式を取り入れて日本での新文芸思潮を朝鮮半島に伝播しながら近代詩に移行するまでの過程で架け橋的な役割を果たした作品群であった。1920年代に入ってから朝鮮半島で様々な同人誌の発刊、そして朝鮮文壇の形成とともに自由詩の形式も定着することになる。そして詩の創作は1910年代の「情」と「啓蒙」の動機から徐々に「情」と「美」の満足のための創作に変遷するようになった。以上のように『学之光』には、相当量の詩歌が掲載されており、また朝鮮近代文学史上、近代詩に移行する過程で一定程度重要な役割を果たしていたことがわかる。

おわりに

『学之光』は留学生たち学友会の一機関誌に過ぎなかったが、それでもその文学性については評価すべきである。『学之光』では後の1920年代以後の朝鮮文壇を担う多くの人々が足跡を残していた。その目的が習作であったか、それともうっぷんを晴らす場と見做していたか、亡国民としての不満吐露の場としていたかに関わらず、文芸発表の場が少なかった当時として文人輩出の揺籃であったことは間違いない事実である。彼らは日本に受容されていた西欧文芸思潮を積極的に受け入れて自身の思考を明確に表現して詩創作においては亡国民としての悲しみと彷徨を積極的に表出しながらも新しい文芸思潮・思想を朝鮮半島に伝播した功績は大きい。

注

- 1) 白鉄, 李秉岐(1993)、国文学全史、新丘文化社；김용직(1982)、韓國近代詩史、새문사等
- 2) 「学友会創立略史」、『学之光』3、1914. 12、p. 51～p. 52
- 3) 朴慶植編、『在日朝鮮人関係資料集成 第1巻』、「在京朝鮮人状況」、1975年、p. 138
- 4) 崔斗善、「文學의 意義에 關하여」、『学之光』第3号、1914年12月
- 5) 安廓、「朝鮮의 文學」、『学之光』第6号、1915年7月
- 6) タクチ本(택지본)1910年代初期から流行した廉価な出版物。名称は、表紙がめんこ(タクチ)のようにカラフルだったことによる。タクチ本は鉛活字を用い、西洋式印刷技術で大量に印刷された。6銭(これは当時の麺類1杯分程度の価格である)でうられていたことから、「六銭小説」とも呼ばれた。
(金基哲、「日帝時代を風靡した「タクチ本」を知っていますか」、2010年7月14日、朝鮮日報)
- 7) 社会短評「文學의 誤解」、『学之光』第8号、1916年3月
- 8) 前掲 安廓の「朝鮮의 文學」
- 9) 同上

- 10) 捫鼻室主人、「제야말노」(一部)、『学之光』第3号、1914年12月、p. 43
- 11) 兩球生、「六字歌」(全文)、『学之光』第4号、1915年2月、p. 51~p. 52
- 12) 悟然子、「왜 우리?」(第三連)、『学之光』第3号、1914年12月、p. 46
- 13) 流暗、「한 곳」(一部)、『学之光』第6号、1915年7月、p. 81
- 14) 任展慧、『日本における朝鮮人の文学の歴史』、法政大学出版局、1994年、p. 80
- 15) 돌섬、「離別」(一部)、『学之光』第3号、1914年12月、p. 45
- 16) 星笛、「故園을 바라보면서」(一部)、『学之光』第22号、1921年6月、p. 86

参考文献

資料：学之光、影印本、太学社、1978年

김용직(1982)、『韓國近代詩史』、새문사

김윤식(1999年)、『이광수와 그의 시대 1、2』、솔出版社

佐藤能丸(2005年)、『近代日本と早稲田大学』、早稲田大学出版部

김학동(1981年)、『韓國開化期詩歌研究』、시문학사

박철희(1980年)、『韓國詩史研究』、一潮閣

About the significance of "Hakjigwang" in the period of modern poetry formation: Focusing on the poems of "Hakjigwang" magazine

CHI, Xiaomin

Abstract

"Hakjigwang" magazine was first published in April 1914, and the alumni association's magazine "Hakjigwang", which was published up to the 30th issue in December 1930, has a variety of literary works and introductions of modern Western thoughts. The work was posted and played many roles in enlightening the Korean people. In the 1910s, when there was little freedom of speech in Korea, "Hakjigwang" magazine was widely subscribed in Korea and played a major role in enlightening the Korean people. Comparing the poems published in "Hakjigwang" with the poems of the previous generation, it is close to the exceptional free verse form in terms of form, and personal feelings and individuality to the ego in terms of content. There are many works that are close to lyric poetry that express a typical perception. In this paper, I will explore the significance of the poems published in "Hakjigwang" magazine in the 1910s during the transitional period of the process of establishing full-scale modern poetry in the 1920s.

Keywords : modern poetry, alumni association's magazine, Hakjigwang, free poetry, lyric poetry

グローバル化と競技化に直面する合気道の課題とは何か —日本、グローバル化するスポーツ、N・エリアス「文明化過程論」—

村下 慣一（立命館大学大学院生）

要旨

本稿の目的は、グローバル化と競技化という二つの課題に直面する合気道について、歴史社会学の泰斗ノルベルト・エリアスによる「文明化過程論」を導きの糸として考察し、課題の特性を把握し、その分析のための理論的視座を獲得することにある。とくに本稿では、合気道がグローバル化するなかで起こる文化的実践における「意味」の問題に力点を置いて、合気道の現状整理と分析枠組みの探求を試みる。本稿を通して明らかになったのは、第一に、合気道のグローバル化を捉えるには、日本—西欧の関係論的枠組みが要求されること、第二に、合気道もまた近代スポーツ同様に、グローバルな世界システムの再編過程のなかで、文化の変容を捉えていく必要があることである。

キーワード： 合気道、競技化、文明化、グローバリゼーション

はじめに

本稿の目的は、グローバル化と競技化という二つの課題に直面する合気道について、歴史社会学者ノルベルト・エリアス（Norbert Elias）の「文明化過程論」を導きの糸として考察し、課題の特性を把握し、その分析のための理論的視座を獲得することにある。以下に、本稿の考察のプロセスを示す。

まず、第一章では、合気道の現状について簡単に確認する。つぎに、第二章では、エリアスの『文明化の過程』に含まれる分析視角を確認する。そして、第三章では、エリアスとその弟子ダニング（Eric Dunning）を中心とする「エリアス学派」による日本武道・合気道研究として、ガルシア（Raúl Sánchez García¹⁾;2019）と拙稿（2020）による研究の要点を整理する。最後に、第四章では、「日本」という「非西洋」の描き方について、近代化論とグローバリゼーション論の見地から、グローバル化に伴う社会的な再編過程のなかに置かれた合気道の可能性とその分析枠組みについて、考察する。

I. 合気道の「現在」：グローバル化と競技化

合気道とは、植芝盛平によって体系化された近代武道である。植芝は柔術、剣術、槍術など、多くの武術を鍛錬し、それらをひとつの総合武道として体系化した。合気道の特徴は、「非競技性」である。合気道家は、一部の例外を除いて、植芝の教えを守り、「試合」をせず、型稽古のみで鍛錬する。植芝は、大本教や猿田彦信仰を通じた宗教的経験、思想を合気道の思想に組み込んだ。それは簡潔に言えば、「武道の根源は神の愛であり、自分と相手や宇宙を調和させ、一体化することが重んじられる。そのため、調和（≒平和）を乱す争う心を乗り越えなければならない」というものである。それゆえ、闘争心を掻き立てるような「試合」は、明確に否定されるのである。

このような独特な思想が色濃く反映された合気道は、日本国内外から多くの関心を集めてきた。合気道の最大会派「合気会」を中心に国際統括組織として国際合気道連盟（International Aikido Federation）が1976年に設立された。IAFは、加盟国間の円滑な連携のための調整機関であり、国際的認知度を高めるための活動に取り組んでいる²⁾。たとえば、IAFは1984年国際スポーツ団体連合（General Association of International Sports Federations）へ加盟し、1989年以降、国際ワールドゲームズ協会（International World Games Association）主催のワールドゲームズ大会に参加している³⁾。ワールドゲームズとは、非オリンピック種目の国際総合競技大会である。

ところで、近年、このように「合気道＝非競技＝平和」というイメージが世界的に共有されつつある情勢下で、少数派である「競技派」の国際化戦略が徐々に広がっている。たとえば、植芝の弟子のひとりである富木謙治を流祖とする「昭道館合気道連盟」を中心に国際統括組織WSAF（Worldwide Sport Aikido Federation）が設立するなど、独自の国際化戦略を行なう動きが加速している。このWSAFは、2016年に設立された組織で、主要な組織目標に「オリンピック・ゲームズへの参加志向」を掲げている⁴⁾。このような、合気道の文化原理をめぐる世界的なせめぎ合いは、どのような意味を持つのだろうか。

一般的に、「平和武道」や「愛の武道」と形容される合気道は、欧米では「動く禅（Moving Zen）」としても評価されている、という⁵⁾。これは合気道という文化実践に含まれる、固有の意味生成の場の、そして欧米での受容の際に経験された意味の読み替えによる産物であろう。このような意味生成の場としての「合気道」が、「世界」との関係性のなかで経験する意味、身体観（実践感覚）の読み替えをめぐる「同一性と差異の闘争過程」を探求することで、合気道に含まれる「人類愛」の理念という意味の問題や、世界システムによる意味収奪の危機とそれに対する抵抗など、「合気道」という文化を取り巻く影響因子とその関係構造を把握することができる、と考えられる。合気道がグローバルな関心を高めているなかで、「合気道史」を日本文化の再創造過程として捉え直し、しばしば「術から道へ」と表現される現代武道の創出過程とその歴史的発展過程を「世界史」的な認識から描き直す作業が求められるのである。

すでに武道研究では、井上俊（2004）を嚆矢として、坂上康博（2010）らが、柔術・柔道を事例に、「西洋」との関係性を前提とする議論を試みており、歴史的蓄積が進んでいる。しかし、こと合気道においては、国際関係を前提とするような社会科学的分析は十分に進んでおらず、岩切朋彦（2009）、拙稿（2020）など、未だ限定的である。

そこで本稿では、「合気道」創造後の文化原理の創造・変容過程に着目する枠組みについて、予備的な考察を試みる。この枠組みは、「特殊日本」的とされるような、身体運動文化が「西洋」との対抗的な関係性のなかで「非西洋」的な文化として創造される過程、またその「非西洋」的な文化がグローバル化のなかで、モダンに適応する様に再編されていく過程を明らかにすることを意図とするものである。それでは、ノルベルト・エリアスの『文明化の過程』を導きに、合気道における国際化と競技化の課題を検討する理論的な枠組みの構築に向けた検討を試みる。

Ⅱ. N・エリアス「文明化過程論」：主著『文明化の過程』（1969）を中心に

本章ではエリアスの主著『文明化の過程』の要点を整理する。『文明化の過程』は、「フイギュレーション社会学」と呼称されるエリアスの方法論の基盤であり、それゆえ多くの分析視角が盛り込まれている。たとえば、ドイツ・フランスにおける「文明化」概念の社会発生、宮廷貴族のマナー・エチケットの変化、中世西欧社会における国家形成過程のメカニズムについて、である。エリアスは西欧社会の長期的な社会構造の変化が、個別の人間の振る舞いや情感にどのような変化を及ぼすのか、ということを礼儀作法書や書簡などから読み解いている。

エリアスの分析の特徴は、ある人間の振る舞いを、彼/彼女を取り巻く他者や社会との間にある、双方向的な、相互依存的な関係性から捉えようとするところにある。たとえば、「宮廷人」は絶えず、彼/彼女の属する宮廷社会において「合理的」とされる振る舞いを求められ続け、自身の情動を自ら統御しなければならない。なぜなら、それが社会的地位の上昇に不可欠であり、そのためには中流階級層と区別された「理性的人間の権化」（エリアス, 2010a: 9）である必要があったからである。このような「宮廷人」の振る舞いは、絶対主義の社会発生による、「行動様式の文明化とそれに即応する人間の意識および衝動状態の改変」、そして「支配者－被支配者間の社会的結合、相互依存の緊密化」と合わせて論じられなければならない、というのがエリアスの主張である（上掲: 9-10）。

このようなエリアスの分析視角は、その後エリアス学派の研究者によって、「非西洋」に属する「日本社会」研究やスポーツ研究のなかで、展開されていった。エリアス学派の合気道研究は、どのように展開されたのだろうか。次章では、ガルシアの著作『日本武道の歴史社会学』を確認する。

Ⅲ. エリアス学派による日本武道・合気道研究の新展開：ガルシア(2019)の試み

エリアス学派による日本武道研究を先導してきたのは、ガルシアである。これまでガルシアは、種目分析として、講道館柔道における文明化過程の分析やボクシングジムと合気道道場の比較分析など、他種目にわたる武道研究を蓄積してきた。それらの分析をもとに、日本武道の通史的で体系的な研究として『日本武道の歴史社会学(原題: The Historical Sociology of Japanese Martial Arts)』を出版した⁶⁾。ここでは、ガルシアの分析モデルと精緻化の可能性について簡単に確認したい。

ガルシアは、日本武道が近代以降に「再創造」された文化であることなどから、「近代性」や「伝統性」の双方を含み込む新しい混合（ブレンド）によって、一層進行する組織化と体系化に過程を捉えようとする（García, 2019: 137）。そのため、彼は近代国民国家形成期以降における日本武道の発展過程の機軸として、嘉納治五郎の講道館柔道に代表される「国際的日本性」と大日本武徳会に代表される「土着的日本性」という用語を用いている。このことが象徴されるのが、ガルシアの大きな功績として評価できる分析モデル「明治期から第二次世界大戦までの日本武道のフィギュレーション」（García, 2019: 182; 村下, 2020: 38）である。ガルシアの同モデルは、「国民国家形成期から超国家主義的国家体制へと向かう過程のなかで複雑化した日本武道界全体の相互依存的な関係性を、権力バランスという観点から構造化」（村下, 2020: 39）したものである。

拙稿（2020）は合気道研究に限定的な評価を行なっている。そのため、拙稿は同モデルを、「学校システム」を頂点とする垂直的に構造化されたモデルとしてみなす。拙稿は、ガルシアが国家という枠組みのなかで日本武道界を捉え直したことで、これまでの師弟関係とは異なる新しい関係性を提示した、という点を評価する（上掲: 39）。そのうえで、拙稿はガルシアのフレームを踏襲しつつ、彼が捉え切れていない合気道界内部の権力関係に着目することに精緻化の可能性を見出している。

拙稿は、合気道の「非競技性」という文化原理をめぐる「文化ポリティクス」について、エリアス学派のフレームが有効性を持つことを提起する。拙稿が示唆するのは、合気道界内部における「文化ポリティクス」は、「非競技性」を保持し続けようとする主流派と、「競技化」を推し進めようとする少数派との間に現れる力学を捉えるうえで有効である、という分析視角である（上掲: 40）。拙稿によれば、「合気道界において『競技』というシステムに対する嫌悪感、ないしは承認の度合いは、定着者一部外者関係〔引用者補足：主流派と少数派〕の間に闘ぎ合う不均衡な権力バランスと連動している」（上掲: 41）という。その際の枠組みとして、エリアス学派スポーツ研究が依拠する「定着者一部外者関係構造」という枠組みを援用することで、エリアス学派による合気道研究を精緻化しようとするのである。しかし、拙稿（2020）は合気道研究に限定的であったため、ガルシアが水平方向の権力バランスを捉えるために援用した「国際的日本性—土着的日本性」という両極的な分析尺度について言及しきれていない。このような尺度は、合気道が、また合気道を取り

巻く日本武道界や日本社会が、経験してきた近代化過程を描くうえで示唆的であり、検討の余地がある。

次章では、「日本」という「非西洋」の近代化過程、そしてグローバル化について、厚東、マグワイア、山下の議論を参照し、合気道が近代化およびグローバル化のなかで直面した「アポリア」について、確認する。

IV. 合気道のグローバル化の「アポリア」:「非西洋」と「グローバル化」の相克

「日本」の近代化論には、「西欧化」と「土着」とのせめぎ合いのような双方向的な力学として、捉えようとする議論がある。たとえば、厚東洋輔は、日本にみられる「後発的」近代化の力学として、「欧化」と「土着」との間の牽引反発のダイナミクスを捉えている。厚東は、「ハイブリッド・モダン」つまり、文化伝播によるモダンの変容の様相を決定づけるのは、「土着」のあり方であり、それが西欧的なモダンの侵入つまり、「欧化」への対処のヴァリエーションを決定する、という（厚東, 2011: 27-28）。

このようなダイナミクス分析の枠組みについて、エリアスの「機能的民主化」⁷⁾概念に依拠したのが、マグワイアである。マグワイアは、「非西洋」における西洋文化（近代スポーツ）の受容過程を、当該社会の固有の文脈に則した抵抗、再解釈と還流の過程として捉えている（Maguire, 1999: 85; 山下, 2002: 374）。それゆえ、マグワイアは、「西洋」との関係性のなかで、「非西洋」における「文明化の過程」が、どのように経験されていくのか、ということ进行分析する（Maguire, 1999: 37）。つまり、エリアス学派の分析視角は「非西洋諸国の人々が西洋的形態を再解釈し、それに対する抵抗と固有の文脈に沿った意味づけと再創造を行うのか」（山下, 2002: 374-375）という点に着目することで、グローバリゼーションという人類史的過程のなかで諸力の動態や多方向的な力学を捉えようとするものである、といえる。

ところで、近代以降、日本は西欧との関係性のなかでどのように文明化過程を経験するのだろうか。明治以降の近代化のなかで、また戦中の総動員体制、戦後の占領政策を経て、「合気道」という特異な日本武道は、どのような「文明化の過程」の経験を通して、「非競技性」を獲得し、主流派と少数派との間で絶えず文化原理をめぐるせめぎ合いが繰り広げられたのか。また、御家元である日本と世界システムのなかでヘゲモニーを保持している欧米とのせめぎ合いのなかで、グローバル化していったのだろうか。そして、グローバル化のなかで、「日本」の文化である合気道は、どのような意味解釈の文脈を通して、「非競技性」という意味を保持し、「人類」という類型的認識へと向かうという可能性を思想として内在化するようになったのか。この過程を捉えるには、どのような射程が必要となるのか。以上の点は、グローバル化と競技化に直面している合気道を分析するうえで、無視できないものである。以下では、その手がかりとして、山下（2002）を確認する。

山下は、近代国民国家形成以降の文化は、モダニティの諸要素と結合されており、「固有

の非西洋」を見出すことが極めて困難であることを指摘している（上掲：379）。山下によれば、近代以降の「非西洋文化」の創造過程は、たとえば「想像の共同体」を形成する「創られた伝統」として現れるように、「西洋」との交渉のなかで創られた「非西洋」である場合が多く、それゆえに、国際関係を前提とする差異的な創造過程として現れる、という（上掲：379）。

さらに山下は、このような近代以降の文化変容過程について、「日本の祭祀にみられる民衆娯楽の変化のように、土着の身体文化の近代的变化を、スポータイゼーション・プロセス〔引用者補足：イングランドの土着文化であった余暇活動が「スポーツ」として世界的に伝播されていく過程を指す、エリアス(2010b)の概念〕として近代社会の形成に必然的に伴う『文明化』された文化の再創造の過程として説明し得る」（上掲：373）と指摘する。

エリアスは『文明化の過程』や『諸個人の社会』のなかで、「サバイバル・ユニット」という、一蓮托生の生存単位が、部族から国民国家へと再編され、さらにそれを超出した「人類社会」という、全世界が、相互依存的で関係的なひとつの生存単位へと再編されていく社会構造的変動を捉えようとしている。

山下はこのことを的確に捉えたうえで、現代スポーツのグローバルな再編が、ギデンズのいう「脱埋め込み」化過程のなかで、トランスナショナルな統括組織を生成し、またスポーツ界が世界資本によるシステムの均一化に編み込まれることによってなされている、と指摘する（上掲：383）。このようなグローバルな再編構造過程は、世界支配構造の再編とエリアスの捉えた「対照幅の縮小」のテーゼ、この両者が関連した過程として認識できる、というのである（上掲：384）。

このようなグローバル化に伴う再編過程は、非競技派/競技派ともに、モダンへの適応のなかで世界システムへと組み込まれていく傾向性を確認できる。合気道界内に残存する「モダンへの抵抗力」は、グローバル・システムへの編入という、激しい闘ぎ合いのなかで、かつてほどの抗力効果を持たなくなった、とも考えられる。この再編過程は、もはや「合気道が国際化に成功した」という文言以上の意味を持っている。合気道という文化の歴史的過程をより正確に捉えようとするならば、この過程を、さらに文明化過程の枠内で再考する必要がある。

おわりに

本稿では、合気道のグローバル化と競技化という方向性に関する現状を、エリアス学派を手がかりに検討してきた。以上の考察を通して、合気道のグローバル化は、思想として「人類愛」という、類的共存の可能性を保持しながらも、近代スポーツと同様に、普遍化へと向かう「脱埋め込み」という性格を持っている。それゆえ、「対照幅の縮小」の経験を通して、合気道は「(グローバルな) 人類社会」という「類的認識」へと向かわせうる可能性を持っている、といえる。しかし、同時に、世界支配構造の再編とは、グローバル資本

や IOC などの国際スポーツの統治機構によって、文化の「均一化」や文化実践を通して経験される意味の「直接的な収奪」が行われるリスクを含んでいる（山下, 2002: 384）。

この点は、合気道の文化原理に直接関係する、重要な問題点であると指摘することができよう。今日では、グローバル化と競技化のなかで、合気道の文化的性格や実践の意味が、様々な影響因子によって、変化しつつある。文化原理や競技化の是非は、単に文化内在的な技法・思想に基づく議論だけではなく、このような俎上で議論されることが求められている。

以上のような点をふまえ、グローバル化と競技化に直面している合気道が、さらに検討すべき課題は、合気道のグローバル化と競技化の過程で起こる文化変容がどのようなものか、を把握することである。この点を理論的に分析するためにも、山下の議論を援用しながら、エリアスの文明化過程論について、さらなる考察を進めたい。

注

- 1) ガルシアは、マドリード工科大学（Universidad Politécnica de Madrid）に在籍するエリアス学派格闘技研究者である。ガルシアは、格闘技全般について社会学的分析を行っている。
- 2) IAF（公開年不明）、About <https://www.aikido-international.org/about/>（閲覧日時: 2020 年 7 月 24 日）を参照した。
- 3) 笹川スポーツ財団（公開年不明）、「合気道」
https://www.ssf.or.jp/ssf_eyes/dictionary/aikido.html（閲覧日時: 2020 年 7 月 24 日）を参照した。
- 4) WSAF（公開年不明）、About <https://www.wsafaikido.org/about>（閲覧日時: 2020 年 7 月 24 日）を参照した。
- 5) Toronto Aikikai（公開年不明）、About What is Aikido?
http://www.torontoaikikai.com/n_whatisaikido.htm（閲覧日時: 2020 年 7 月 24 日）を参照した。
- 6) 合気道研究に限定されているが、同著について考察したのが、拙稿（2020）である。そこでは、同著を通底する分析フレーム、合気道に関する二つの節、そして「明治期から第二次世界大戦までの日本武道のフィギュレーション」という構造化された分析モデル、この三点を扱った。
- 7) 「機能的民主化」が指すのは、エリアスが「対照幅の縮小」として定式化される、諸集団間に存在するすべての権力格差の縮小（社会的な権力配分の変化）へと向かう趨勢であり、それは相互依存関係の緊密化による権力行使機会の配分の平等化と全面的拡散へと向かわせるような社会過程である（エリアス, 1994: 238）。

参考文献

- 井上俊(2004)、『武道の誕生』吉川弘文館。
- 岩切朋彦(2009)、「合気道の近代とはいったったのか—武道としての合気道の誕生」『西南学院大学国際文化研究論集』3、111-133 頁。
- 厚東洋輔(2011)、『グローバリゼーション・インパクト—同時代認識のための社会学理論』ミネルヴァ書房。
- 坂上康博(2010)『海を渡った柔術と柔道—日本武道のダイナミズム』青弓社。
- ノルベルト・エリアス(1994)、『社会学とは何か—関係構造・ネットワーク形成・権力』（徳安彰、原著は1970年）法政大学出版局。
- (2010a)、『文明化の過程・下—社会の変遷／文明化のための見取り図』（波田節夫ほか、原著は1969年〔初版1939年〕）法政大学出版局。
- (2010b)、「序論」（ノルベルト・エリアス、エリック・ダニング『スポーツと文明化—興奮の探求』（大平章、原著は1986年））法政大学出版局、27-88 頁。
- 村下慣一(2020)、「エリアス学派による合気道研究の新規性と課題—サンチェス・ガルシア『日本武道の歴史社会学』の批判的考察」『現代スポーツ研究』4、30-43 頁。
- 山下高行(2002)、「グローバリゼーションとスポーツ—ノルベルト・エリアス、ジョセフ・マグリフィアの示す像」（有賀郁敏ほか『近代ヨーロッパの探求—スポーツ』ミネルヴァ書房）、365-87 頁。
- Joseph Maguire(1999), *Global Sport: Identities, Societies, Civilizations*, Oxford: Polity Press.
- Raúl Sánchez García(2019), *The Historical Sociology of Japanese Martial Arts*, New York: Routledge.

What challenges does Aikido face with regard to globalization and the introduction of the Aikido-randori?: Japan, globalizing sports and Elias's theory of the civilizing process

Murashita, Kanichi

Abstract

The purpose of this paper is to discuss the development of Aikido in the face of the twin challenges of globalization and the introduction the randori system (competitive Aikido). The study employs Norbert Elias' theory of the civilizing process as a theoretical perspective for analyzing the characteristics of the issue and complexity of Aikido's global development and dissemination. This paper summarizes the current state of Aikido with an emphasis on the production of meaning in the cultural practices that occur during the process of globalizing Aikido. The arguments of this paper converge on the following two points. Firstly, it is clear that the globalization of Aikido requires a

relational framework of Japan (non-West) and the West to understand the how the globalization of Aikido transforms its meanings and practices. Secondly, as with modern sports, Aikido needs to be understood as part of the broader cultural transformations occurring as a result of the restructuring of the global world system.

Keywords : Aikido, Aikido-randori(competitive Aikido), civilization, globalization

寅さん映画のイデオロギー —起こること、起こらないこと—

仲矢 信介（東京国際大学）

要旨

1969年の『男はつらいよ』に始まる、山田洋次監督のいわゆる寅さんシリーズは、主人公を演じた渥美清が一貫して主役を務め、渥美の生前だけでも48作が制作された。観客動員数は総計8000万人を数え、ビデオカセットからブルーレイディスクに至るまで再発売とリマスターを重ねてきた。制作当時から現在まで、国民的人気を博してきた作品群と言える。このシリーズについては従来さまざまな研究がおこなわれてきたが、本稿ではシリーズに共通するプロットの構造を抽出し、「そこで何が起こらないか、実現しないか」に注目して分析を試みた。

すると、本シリーズは、資本が人間性を奪って行くことへの告発、労働によって損なわれていく人間性の尊さを逆照射しながら、一方では、労働者であることの拒否が何をもたらすかを常に描いていることが看取される。資本に不実なものへのペナルティが物語の重要な側面をなしており、資本からは逃れようがない現実と、労働者としての立場の甘受を暗に要求する作品群が本シリーズであって、そのことは観客の大多数の人生における選択と一致する。結果的に資本の側、権力の側に立って観客を「教化」しようとするのが寅さん映画であることを示した。

キーワード： 起こらないこと、労働、資本、ペナルティ、観客

はじめに

1969年の『男はつらいよ』に始まる山田洋次監督の寅さんシリーズは、主人公の車寅次郎役を生前の渥美清が演じた作品だけでも48作を数え、興行的に全作品が成功した¹⁾。毎年のようにテレビで全作品が放送され、販売商品としても、VHSビデオから、DVD、さらに全作品を網羅したDVDマガジンが刊行された。現在でも、Amazon prime video、Hulu、Netflixといった複数のインターネット動画配信サービスにおいて、全作品が視聴可能である(2020年9月現在)²⁾。2019年12月には全作品を再びリマスターして4Kブルーレイディスクが発売、50作目の新作「男はつらいよ お帰り寅さん」が公開されるなど、長期にわたって国民的人気を博している。

このシリーズについては、主人公・車寅次郎と同一視されるほどになっていった、主役の渥美清の演技、印象的なセリフ、脇を固める俳優たちの魅力、監督の山田洋次の演出等、すでに語り尽くされた感があり、先行研究にも意義深いものが既にあるが、本論文では、第一作の『男はつらいよ』を中心に、この作品群を、プロットの構造と「起こらないこと」「実現しないこと」に注目して読み解き、隠されたメッセージを抽出する。

I. 先行研究と本論文

本作品についての発言を、公開当時、映画史上の位置づけ、映画作家としての山田洋次論における評価の3つの視点から整理する。

1. 公開当時

『キネマ旬報』504号掲載の、最も早い批評と目される井沢（1969）は、「大船調の中で、下町ものというジャンルがあるが、この山田洋次作品は、その線上に立ちながら、現代的な魅力あるテンポを創り出している。渥美清の演ずる香具師に、疎外された人間の悲しさと善意を集約させ、そこから笑いとペーススを盛り上げる。」と作品を賞賛しつつ、松竹の伝統が守られるか否か不安であることが述べられる。

長部日出雄（1969）は「日本映画批評」『キネマ旬報』505号において、「山田監督の映画を見ているとき、わたしはいつもゲラゲラ笑っているのだが、映画館を出るときは、必ずちょっとシブイ顔になっている。これほど笑いをよく知っている監督が、どうしても肝腎のヤマ場を、センチメンタリズムや「公式」で処理するのだろう、という不満を感じずるからだ。」と、クライマックスのありように不満を述べる。

『朝日新聞』の「純」は、「大船調の下町ものとして、軽快にまとまっており、見終わってすがすがしい気分になる」と始まる賞賛の批評に若干の留保をつけて「さわがしい世の中を、わざと見て見ぬふりをしている作品ではある」と記す。（「映画　すがすがしい下町の人情」1969年8月28日夕刊）

長部の「いつも肝腎のヤマ場を、センチメンタリズムや「公式」で処理するのだろう、という不満を感じずる」という評価につながる理由や、『朝日新聞』の「わざと見て見ぬふり」という表現で敢えて触れられていない事柄はなにか、本稿でひとつの解答を与えてみたい。

制作側の人間が述べたこととして、当時松竹社長の任にあった城戸四郎³⁾の発言が興味深い。

城戸四郎（1971）は、「山田洋次のシナリオから読みとって戴きたいもの」として、「（山田のシナリオに）底流として流れているのは、松竹市民映画の伝統が、蒲田撮影所の昔から大船撮影所へと、伝えてきたものであることも、感じとっていただきたい。私たちが作ってきた蒲田以来の松竹映画の根本にあるものは、プロレタリア・イデオロギーである。

しかも小津安二郎その他によって培われてきた根本理念は、社会の矛盾や欠陥についてゆくのだが、それをおっとり刀ではつつこまないで、フィルムの上に生活的に生き生きと

描かれた作家各人各様の人間像の上に、描出していこうというものである。」と述べる。

松竹映画の根本に「プロレタリア・イデオロギー」があるというのだが、仮にそうだと
して、どのようなイデオロギーであるか、本稿で明らかにされるであろう。

2. 映画史上への位置づけ

映画史上に位置づけた研究から拾うと、佐藤忠男（2006）は「撮影所の伝統の粋をこらしたような傑作」、(『日本映画史』増補版3、第9章「多様化の時代」6喜劇、岩波書店、141頁)「このシリーズは、よく笑わせ、要所要所でほろりとさせ、平均して高い水準を保った」(142頁、同)と記す。岩本憲児（1998）も「近代化を進めたせわしない現代日本が失っているものは、などと寅さん>に問うのは野暮だ。人情喜劇に山田洋次監督の手腕が光る」(『日本映画の歴史』第3巻『現代の映画』112)と評価しつつ、「問うのは野暮だ」と、正面からの批評を避けた、あるいはこのような表現によって不足を衝いた節がある。「近代化を進めたせわしない現代日本が失っているもの」を、実は当シリーズが示し得ていないという指摘とも取れ、それが何であるか明らかにしてみたい。

3. 山田洋次論

山田洋次という映画作家を他の作品群も含めて論じた研究には、白井佳夫（1978）「寅さん監督 山田洋次の研究」、上野昂志（1988）「死との過激な戯れ、そしてその喪失 山田洋次論」と四方田（2004）「寅さん、無頼の零落」がある。白井は、それまで「ふてぶてしい居直りの抵抗精神、毒気」(175頁)を含んでいた寅さんシリーズ以前の山田の作品群と比較して、『男はつらいよ』は「相当になりふりかまわぬ、単純化、平明化、大衆化のほどこされた作品」となり、それが絶賛を得て予想外のヒットとなったことで、年2作、コンスタントに作られていった過程を追っている。そして「平均的日本人は、誰でもくあゝ、このきまりきった毎日の連続から、一人でふっと抜けだし、脱出できたらなあ>という、一種の蒸発願望を持っている。」(178頁)ことを指摘し、さらにそこには都市生活からの脱出、日々家族と鼻つきあわせて暮らしている生活からの解放を求める願望があつて、それを一身に体現しているのが寅さんであることを述べる。

上野は、かつて「死を過激に、それこそ手玉に取るようにしてその作品に持ち込んだ作家」であった山田洋次の、「死を悲劇的にでなく喜劇的に、苛烈なユーモアをもって扱う姿勢は、七〇年代以降の、『男はつらいよ』を中心とする山田作品からは消えていく」(66頁)と記す。四方田（2004）は、「寅さん、無頼の零落」で、本シリーズの国民的人気の理由として、シリーズが毎年2回、正月と8月に公開されることが「多くの日本人にとって儀礼的行為であり、日常のさわしない時間の進行からひとたび離れて、古代的な円環的異時間秩序に身を委ねることを意味していた」(126頁)ところ、また、寅さんが「自由と放浪への憧れを説いてやまないところ」にあり、(同)ヤクザを目の当たりにすることは脅威では

あったが、同時に物語の中のヤクザが、社会からのロマンチックな逸脱の夢を語ってきた」と述べ、山田の映画作家としての変貌を、「歴史意識からの転落」と結論づける。

白井、上野、四方田の論は、本シリーズへの批判的観点から述べられたものであり、シリーズの弱点を衝いている。本論文ではさらにそこから議論を進めて、何が隠されているかを考えてみたい。四方田（2011）「日本映画の研究はどうあるべきか」に触発されてのことである。四方田は、自身の映画批評についてこのように述べる。

「ある一本のフィルムを批判することは単に美食趣味やディレクタントイズムの次元の問題ではない。それはフィルムの背後にあるイデオロギーを暴き出し、その自明さの見せ掛けの裏側に隠蔽された政治性を白日のもとに晒す行為でなければならない。ある時代に高い評判を生み、興行的にも成功を収めたフィルム、誰もが（ときに国民的規模で）賞賛を惜しまないフィルムに対し、距離をもって眺め、そこで除外されているものとは何か、意図的に（あるいは無意識的に）削除されているものは何かを見定めることが、神話批評の原点となるであろう。」（220 頁）

Ⅱ．隠された・製作者の無意識的志向のもたらすメッセージ

第一作『男はつらいよ』のプロットは以下のようなものである。

- (1) 桜の時期、寅さんが放浪の旅から故郷柴又に帰ってくる。
- (2) 題経寺（通称：帝釈天）庚申祭で御前様・叔父夫婦、妹と再会する。
- (3) 叔父夫婦の経営する団子屋・とらやに寅さんは戻る。
- (4) 妹・さくらの見合いに同席、不適切な言動で縁談を破談に。そのことで叔父と喧嘩、家を出る。
- (5) 寅さんは奈良で御前様と娘・冬子に出会い、冬子に一目惚れする。
- (6) 柴又へ帰り、冬子に毎日のように会いに行く。
- (7) とらやの裏手の工場の従業員・博の、さくらへの恋心を知り、寅さんは仲立ちする。
- (8) 仲立ちは失敗する。
- (9) 結局二人は結ばれ、博とさくらは結婚する。
- (10) 寅さんは冬子に婚約者があることを知り失恋、放浪の旅に出る。

このように、作品は寅さんの帰郷に始まり、さまざまなエピソードが展開され、恋愛し、失恋し、また放浪へという流れが全作品に共通している。

作品群にほぼ共通するプロットを一般化するなら以下のようなになる。

- (ア) 寅が帰郷する。
- (イ) 寅は騒動を巻き起こす。（騒動の種類は作品ごとに異なる）
- (ウ) 寅は片思いの恋愛をする。（恋愛する女優はほぼ作品ごとに異なる）
- (エ) 寅は失恋する。
- (オ) 寅は旅に出る。

なお、(イ) と (エ) の部分は作品ごとに入れ替わる。

この図式をさらに抽象化するならば

- (1) 安定と均衡（寅の帰郷前のとら屋とその周辺）
- (2) 寅の帰郷により均衡が崩壊し、不均衡の状態へ（寅の巻き起こす騒動、恋愛＝均衡への異議申し立て）
- (3) 寅の恋は破れ、放浪へ旅立つ。とらやの均衡が再び充足→ (1) へ回帰と整理できよう。

また、第9作からは、冒頭に寅次郎が英雄的に活躍する寸劇が、その都度寅次郎の夢として描かれるようになる。これらの冒頭の寸劇では、多く、寅は様々な時代と舞台で描かれるとらや一同の苦境を救うのが定番である。ここでは活躍を演じて「くるまや」の人々を救う（9作、10作、11作等）、自身の結婚を告げる（13作）などのシーンはあっても、さくらを兄妹とは認めず去る、あるいはさくら夫婦との再会は果たすにせよ、寅さんの結婚は夢の中のエピソードとなるなど、全員との幸福な再会は描かれないか、夢としてのみ描かれる（第15作）。

本シリーズに共通するプロットにおいて、寅次郎に何が起こらないか、何が実現しないかをまとめると、以下のようになる。

- (a) 寅さんは通常の労働をしない。たまさか機会があっても門前払い（第28作）あるいは続かない（第5作）。
- (b) 寅さんは定住しない。
- (c) 寅さんの恋愛は成就しない。
- (d) 結婚しない。

これらは本シリーズに共通する。こうでない寅さんは考えられない。これらは寅さんシリーズ成立の要件であり、観る者の暗黙の了解といってもいいだろう。また、恋愛について、口では勇ましいが、いざ行動となると小心さのために踏み切れないという定番の筋立ても、多くの観客が人生で経験するところであり、そのことは従順な労働者であることに踏みとどまることとも通底している。以上と表裏をなす、「何が起こるか」に焦点を当てて本シリーズの良さをいうなら、前掲佐藤や岩本の述べるように、「よく笑わせ、要所要所でほろりとさせ」る「人情喜劇」の味わいということになるだろう。

寅は常時放浪していて自由であり、しかしたまさか帰郷するとそれが引金となって騒動が巻き起こる。そして堅気の常識的な感覚とは常に相容れないがそれに抗しうる力はない。常に人情豊かにふるまうことを第一とし、我慢はしない。労働を揶揄し、真面目な労働はできない・しない。およそ堅実さとは無縁である。恋愛しては決まって失恋する。とらやから出て再び放浪の旅に出る円環をいつまでも続け、安定とは無縁である。堅気の共同体からはじき飛ばされた存在である。

このことを、視点を変えて堅気の世間から見るならば、堅気の世間の均衡は寅さんを拒

否することによって成立し、保たれているのである。「物語の中のヤクザが、社会からのロマンチックな逸脱の夢を語ってきた」（四方田前掲 126 頁）ことは、寅さんの映画までつながっている。われわれ観客は夢の世界と位置づけた上で、ヤクザ映画を娯楽として享受することができる。

日本共産党系の映画評論家である山田和夫（1997）は「＜男はつらいよ＞・人間らしい映画をめぐって」『日本映画 101 年 未来への挑戦』210-211 頁）において、エンゲルスを引き、現代人の「残酷な無関心、各個人の自分の私的利益への無情な孤立化」が「今日の社会の根本原理となっている」と述べ、そのような「社会の根本原理」に「異議申し立てを続けてきたのではないか？」と評価する。

その通りである。しかしながら、そのような「異議申し立て」は寅さんシリーズにおいて常に却下されることに留意する必要がある。資本主義社会に同調しないことに対するペナルティが寅さん映画の「起こらないこと」である。寅さんの自由は、寅さんのようでは仕事に就けない・定住できない・成就する恋愛はできない・結婚はできないことに裏打ちされている。

このように考えてくると、前掲の批評家たちが賞賛しつつ述べた、シリーズの特徴である「いつも肝腎のヤマ場を、センチメンタリズムや「公式」で処理する」「さわがしい世の中を、わざと見て見ぬふりをしている作品」「近代化を進めたせわしない現代日本が失っているものは、などと＜寅さん＞に問うのは野暮だ」という指摘にも、なぜそれが「野暮」とされるのか、答えが見えてくる。センチメンタリズムや公式、さわがしい世の中、近代化を進めたせわしない現代日本、といった指摘は、まさにそれらが寅さんを反抗させ、しかし結局はそこからはじき出されるところの、資本主義社会の姿を示すものだからである。

おわりに

山田洋次の『男はつらいよ』シリーズについて、そこで起こることと並行して、起こらないこと、成就しないことに注目することで、われわれは以下の結論に達する。

1. 資本主義によって搾取されていく労働者と、そのような資本主義に抵抗し、労働者になるまいとする車寅次郎という人物の奮闘、資本が人間性を奪って行くことへの告発の物語が『男はつらいよ』である。
2. 寅さんが厳しい労働に拘束されずにいることは、労働によって損なわれていく人間性の尊さを逆照射している。
3. しかしながら同時に、労働者であることの拒否は、労働者よりもさらに貧しさ、尊重されないこと、放浪のやまない旅を強いることが示される。寅さんシリーズに通底しているのは、資本に不実なものへのペナルティの描写であり、資本からは逃れようがない現実と、労働者としての立場の甘受を暗に要求する姿勢であって、結果的に資本の側、権力の側に立つのが寅さん映画である。前掲木戸の「プロレタリア・イデオロ

ギー」の内実は、このようなものであった。おとなしい労働者である以外に生きる道はないと観客に説く構造が 48 作に共通している。

なぜこれほどの人気を博したかという問いへの答えも、ここに見いだされるだろう。観客の多くは、寅さんのように自由でありたいと思いつつ、資本主義とその共同体に縛られ、その枠で生きること、その方向でしか人生はあり得ないと感じ、そのような方向を事実、選び、受け入れてきたからだ。そして自由や放浪を夢見ながら、それはあくまでも夢に留めておかなくてはならないことをシリーズは教え、観客も納得する。それが寅さんシリーズへの共感の、隠された側面である。

寅さんシリーズは、観客の密かな願望を寅さんのような人物と行動に担わせ、ひととき酔わせ、しかしそれが夢であって現実にはあり得ないこと、あってはならないことを教えようとする「教訓」の映画である。第 9 作以降定番化した、寅さんが正義の味方、英雄として現れる、冒頭の寸劇は、寅さんの存在自体が夢であることを暗示する。白井のいう現代人の蒸発願望は、満たされてはならない。上野の述べる、山田洋次が「死を悲劇的にでなく喜劇的に、苛烈なユーモアをもって扱う姿勢」は、寅さんシリーズの発想からは排除されていた。本シリーズではそのような姿勢は「消えて」行く必要があったのである。

注

- 1) 第一作は 54 万 3000 人であったが、徐々に動員数を増し、200 万人を超えた作品も少なくない。井上ひさし監修（1996）『寅さん大全』、筑摩書房、14 頁。また、制作会社・松竹によるウェブサイト『＜男はつらいよ＞40 周年プロジェクト』によれば、シリーズ全 48 作の延べ観客動員数は 8000 万人以上であるという。
- 2) 本シリーズのディスクはたびたび再発されており、参考文献には本論のために入手し参照し得たディスクを掲げた。
- 3) 松竹に長年にわたり在籍し、取締役、副社長、社長、会長を務めた。この時期は社長。『松竹 110 年史』『松竹年表』による。

参考文献

- 井沢淳（1969）、「＜映画＞の面白さがたっぷり」『KINEJUN 試写室』『キネマ旬報』504 号、57-58 頁。
- 井上ひさし監修（1996）、『寅さん大全』筑摩書房。
- 岩本憲児（1998）、「故郷喪失、自分探し」『現代の映画』6 章、『日本映画の歴史』第 3 巻、日本図書センター、107-128 頁。
- 上野昂志（1988）、「死との過激な戯れ、そしてその喪失 山田洋次論」『季刊リュミエール』11 号、筑摩書房、65-74 頁。
- 長部日出雄（1969）、「日本映画批評」『キネマ旬報』505 号、70 頁。
- 城戸四郎（1971）、「山田洋次のシナリオから読みとって戴きたいもの」『キネマ旬報』550 号、66-67 頁。

- 佐藤忠男（2006）、「多様化の時代」6、「喜劇」『日本映画史』増補版3、第9章、岩波書店、139-144頁。
- 白井佳夫（1978）、「寅さん監督 山田洋次の研究」『中央公論』1978年9月号、172-187頁。
- 松竹（2016）、「松竹年表」『松竹百十年史』非売品、731-809頁。
- 純（1969）、「映画 すがすがしい下町の人情」1969年8月28日『朝日新聞』夕刊9面。
- 山田和夫（1997）、「＜男はつらいよ＞・人間らしい映画をめぐって」『日本映画101年 未来への挑戦』新日本出版社、210-216頁。
- 四方田犬彦（2004）、「道化とヤクザ—日本映画におけるトリックスター」『藝術学研究』14号、55-64頁、明治学院大学藝術学会。単行本は四方田犬彦（2007）、「寅さん、無頼の零落」、『日本映画と戦後の神話』、岩波書店、107-129頁。本稿は単行本による。
- 四方田犬彦（2011）、「シネフィル、批評、そして研究」『日本映画は生きている』第8巻、岩波書店、219-227頁。

『男はつらいよ（第1作）』（1969）、山田洋次監督、松竹制作、DVD、松竹、2002年。

『男はつらいよ 望郷編（第5作）』（1970）、山田洋次監督、松竹制作、DVD、松竹、2000年。

『男はつらいよ 柴又慕情（第9作）』（1971）、山田洋次監督、松竹制作、DVD、松竹、1997年。

『男はつらいよ 寅次郎夢枕（第10作）』（1972）、山田洋次監督、松竹制作、DVD、松竹、2005年。

『男はつらいよ 寅次郎忘れな草（第11作）』（1973）、山田洋次監督、松竹制作、DVD、松竹、2000年。

『男はつらいよ 寅次郎恋やつれ（第13作）』（1974）、山田洋次監督、松竹制作、DVD、松竹、2005年。

『男はつらいよ 寅次郎相合い傘（第15作）』（1975）、山田洋次監督、松竹制作、DVD、松竹、2000年。

『男はつらいよ 寅次郎紙風船（第28作）』（1969）、山田洋次監督、松竹制作。DVD、松竹、2005年。

ウェブサイト 松竹、『＜男はつらいよ＞』40周年プロジェクト』

<https://www.cinemaclassics.jp/tora-san/project/index.html>（2020年9月20日閲覧）

Ideology in Tora-san series: Focusing on what Doesn't Happen

NAKAYA, Shinsuke

Abstract

Starting with *Otoko wa Tsuraiyo* (It's tough being a man_) in 1969, so-called Tora-san series YAMADA Yoji directed has consistently starred ATSUMI Kiyoshi, who played the main character, and 48 films were produced during ATSUMI's lifetime. The series has attracted a total of 80 million viewers, and has been re-released and remastered on every format from Video cassettes to Blu-ray discs. From the time of production to the present, the series has enjoyed national popularity. This paper extracts the structure of the plot common to the series and analyzes it by focusing on "what have not happened or what is not realized on screen."

The penalty for being unfaithful to capital is an important aspect of the story, and the works in this series implicitly demand that we accept the reality that there is no escape from capital and our position as laborers, which coincides with the choices made by the majority of the audience in their lives. As a result, Tora-san films have shown that it is the films that stand on the side of capital and power and try to "indoctrinate" the audience.

Keywords : What Doesn't Happen, Labor, Capital, Penalty, Audience

鉄嶺安全農村と教育

金 珽実（商丘師範学院・九州大学留学生センター訪問研究員）

要旨

「満洲事変」により、生存地を無くした在満朝鮮人は鉄道沿線に集まってきた。朝鮮人避難民の数が多くなるにつれて朝鮮総督府は満鉄監督下の東亜勸業に集団部落を建設させ、朝鮮人を統制しようとした。それにより満洲各地に1932年の鉄嶺安全農村を始めとして五つの朝鮮人安全農村を設けた。鉄嶺安全農村は主に平安道出身で、耕地一戸あたりただ2町しかなく、劣悪な環境で生活が営まれた。それにしても子弟に対する教育熱は高く、乱石山普通学校を設立したが、運営費が足りず朝鮮総督府の補助金を受けざるを得なかった。朝鮮総督府も補助金を名目に、朝鮮人学生に「忠良なる帝国臣民」を養成しようとしたのも確かである。

キーワード： 「満洲事変」、在満朝鮮人、安全農村、鉄嶺、教育

はじめに

「彼は支那ばかりでなく、最初は朝鮮、満洲へ渡って、仁川へも行き、京城へも行き、木浦、威海衛、それから^{てつれい}鉄嶺までも行った。支那の中で、一番気に入ったところは南京だった。一番長く居たところもあの古い都だった」。これは、明治 から昭和初期にかけて活躍した文学者、島崎藤村の短編小説で、1911（明治44）年に『時事新報』に「十人並」の総題のもとで連載された連作の第1話『船』の中の話である。主人公が足を踏み入れたところを並べている地域で、日本人にはあまり馴染まない鉄嶺という地名が出てくる。鉄嶺は、中国遼寧省北東部にある渤海以来の古い町で、「鉄嶺粟」「金元大豆」「鉄嶺米」「鉄嶺綿布」を産する農業地帯であり、ロシアによる東清鉄道敷設以前は遼河による水運の拠点であった。日露戦争後には日本領事館も設置され、日本人居留地が増加し、日本軍の駐屯も実施された地域でもある。また、朝鮮総督府は1931年9月18日以降の日本軍の軍事行動によって、それまで生活していた村を離れざるをえなくなった朝鮮人農民を管理しようとして東亜勸業に補助金を与え、1932年から1935年にかけて中国東北部の5カ所に「安全農村」を建設したが、その中の「鉄嶺安全農村」がまさに1932年に鉄嶺に建設された最初の「安全農村」である。本稿では鉄嶺安全農村と教育の実態について考察するものであ

る。

「安全農村」に関する研究の嚆矢としては金（1992）と梶村（1993）があり、両方とも「満洲」の抗日民衆史の一部としてとらえたものである。「安全農村」の設立を日本の「満洲国」への朝鮮人移民政策の一環としてとらえたものが孫（2003）であり、移民一世のライフ・ヒストリーによるミクロの視点で「安全農村」について分析・考察したものが朴（2008）である。本研究は以上の先行研究の成果を踏まえて、鉄嶺安全農村と教育に焦点を当て、「安全農村」建設の背景、鉄嶺安全農村の実態、教育などについて考察していく。

I. 鉄嶺の歴史

鉄嶺は、遼寧省北部、松遼平原の中央に位置し、南は瀋陽、撫順市、北は吉林省四平市、東は撫順市清原満族自治県、吉林省遼源市と接する。西は瀋陽市法庫県、康平県、内モンゴル自治区科尔沁左翼后旗、通遼市である。現在の鉄嶺は、明朝に設置された鉄嶺衛を前身とし、清朝に於いて1664年には鉄嶺県（tiyeliyen）と改編され、奉天府の下に帰属することとされた。鉄嶺は軍事要衝で歴史上瀋陽の北門の鍵として歴代兵家の必争の地であった。ロシア勢力の南下に備え、1877年には、昌図庁が昌図府へと改編され、さらに1907年、奉天將軍が廃止され、奉天巡府が新設された。清末のころには、現在の市域にあたる鉄嶺県、開原県、昌図県、康平県、西豊県の5県は奉天省に帰属した。日露戦争後の1906年6月1日に奉天に於いて在奉天総領事館が設置された。1905年12月22日に調印された「満洲に関する日清条約」により、遼陽・鉄嶺・長春・吉林・チチハル・満洲里など14都市を外国人に開放することが決定された。鉄嶺は、はじめ1906年9月20日に奉天総領事館の分館として設置されたが、1908年9月10日に領事館に昇格した。その後、1916年10月4日に海龍に分館を設け、同月11日に掬鹿に分館を設けた（後に両分館とも奉天総領事館に転属）。1933年6月1日に遼陽領事館とともに閉鎖されるが、実際、奉天総領事館も1937年12月の「満洲国」における治外法権撤廃に伴い、1939年2月28日に閉鎖されてしまう。また、鉄嶺領事館と共に、1906年10月に奉天警務署鉄嶺警務支署が設置され、1908年5月には鉄嶺警務署になり、その下に鉄嶺駅派出所、新台子駅派出所、平頂堡派出所、得勝台駅派出所、乱石山駅（乱石山駅は元々非営業駅で1907年9月1日に閉鎖されるが、1913年12月1日に再び旅客営業が開始された）派出所を設け管轄した。

II. 安全農村

「安全農村」とは、朝鮮総督府が「満洲事変」の後、在満朝鮮人を保護するという名目で「満洲国」に建設した農場である。「安全農村」が建設された地域は、無主地ではなく、中国人農民を追い出し、朝鮮人を移住させて建設された。また、「安全農村」には在満朝鮮人だけではなく、朝鮮半島から、特に南部朝鮮地域からの朝鮮人を多く収容した。「安全農村」の建設によって、帝国日本は、いわば一石三鳥の利を得た。つまり、朝鮮総督府は、

過剰人口を「満洲国」に送り出すことができた。「満洲国」を支配した関東軍は、在満朝鮮人の管理が容易になり、日本政府は朝鮮人の内地流入を軽減することができた。

日本の離間策で20年代の中・韓両民族関係は円滑ではなかった。その上、「満洲事変」直前の日本側の捏造による中・韓両民族農民たちの間で起きた万宝山事件はその矛盾を極度に至らせた。それにより、在満朝鮮人が「満洲事変」後敗残兵と馬賊たちから被害を受ける直接の原因であった。中国兵は戦線で敗ると、朝鮮人の村に入り、略奪、放火、強姦、殺人など、さまざまな暴行を加え、在満朝鮮人に莫大なる被害を与えた。被害を最も受けたところは「満洲事変」が起きた南満地域であった。各地の朝鮮人民会は被害を受けた朝鮮人に対する収容、救済活動を始めた。収容所は奉天以外にも、新台子、撫順、鉄嶺、開原、四平街、安東などの地域にも設置されていた。また、東満地域では、当時、敦図線、図寧線、朝陽川から開山屯までの鉄道建設が真っ盛りであったため、多くの朝鮮人避難民が労働者として働くことができた。しかし、朝鮮総督府は、避難民をそのまま放置することとはできないと考えた。ややもすれば、社会的不安の要素であって、特に飢餓、絶望の中で彷徨した朝鮮人避難民は、中国共産党の指導下の反日運動に参加する可能性が高いからであった。このような状況で、朝鮮人避難民を収容するために、朝鮮総督府は「安全農村」を建設することにした。即ち、朝鮮総督府は拓務省、関東軍、大使館、満鉄などの協力を得て、朝鮮人集団居住地を建設することにした。「満洲事変」直後、朝鮮総督府は東亜勸業株式会社に委託し、5つの安全農村を建設した。表1のように、1932年には鉄嶺、1933年には営口・河東、1934年には綏化、1935年には三源浦に建設されたものである。

表1 満洲朝鮮人安全農村の現況 1939年¹⁾

科目 村名	所在地	開村 年度	1939		
			戸数	耕地面積 (町)	戸当たり 耕地面積
鉄嶺	奉天鉄嶺県附近	1932	383	913	2.4
営口	奉天省営口県営口附近	1933	1,832	3,955	2.2
河東	濱江省珠河县烏吉密河站 附近	1933	766	1,642	2.1
綏化	濱江省綏化県綏化附近	1934	480	1,060	2.4
三源浦	奉天省柳河县三源浦附近	1935	172	355	2.1
計			3,633	7,925	平均2.2

この「安全農村」の建設が、ただ朝鮮人避難民の生計を立てるためだけであるとは考えられない。その理由は、全部の安全農村が「満洲事変」前後には朝鮮共産党、独立運動家、中国人反日部隊及び抗日遊撃隊の活動が最も活発に行われた地域であったからである。こ

のような地域に安全農村を建設した目的は、朝鮮共産党などを牽制しようとするにあった。実際に「安全農村」を建設するときに、日本守備隊、満洲国警察隊、領事館警察隊等が討伐と宣撫工作をすると同時に、「安全農村」に警察署と自衛団を設置し、在郷軍人まで導入して治安維持に力を入れた。

Ⅲ. 鉄嶺安全農村

鉄嶺安全農村は、また乱石山安全農村とも称され、遼寧鉄嶺南部 20kmの乱石山の西部に位置している。この「安全農村」は南・北満洲で建設された五つの「安全農村」の中で最初に建設されたものであった。1932 年、朝鮮総督府が 7 万元を交付して東亜勸業会社がこれの 2 倍の資金を投入し、合計 21 万円で 600 町歩の水田を購入して、満鉄沿線に乱石山安全農村を建設した。該土地の元の主は、奉系軍閥首領・張作霖の妹婿・楊春芳で彼が経営していた「圃記稻田公司」所属の土地であった。「満洲事変」勃発後、楊春芳は天津に避難していたため水田は荒廃していた。これを朝鮮総督府と東亜勸業会社は地理上の好位置と見做して様々な手段を併用して 1932 年末に「商租」の形で 426 町歩を手に入れて安全農村建設に着手し、そして八つの部落を建設して表 2 のように 190 戸 1000 余名の朝鮮人を収容した。翌年末まで朝鮮農民の戸数は 233 戸 1271 名にまで増えた。1934 年までには予定した土地購入計画を完了し、また水利灌漑施設の整備も整えた。鉄嶺安全農村では合計八つの朝鮮人集団部落を建設して各部落は平均 30 戸、或は 40 戸で構成された²⁾。

注目すべきことは、日本は「安全農村」を建設するために不当に土地を「購入」しただけではなく、安全農村部落建設の阻害となっていた先住民たちを追出したり、住居地を移動させたりもしていたが、この中には朝鮮人の先住民も含まれていた。鉄嶺安全農村所属の土地は水田耕作に適した土地であったため、早くから一部の朝鮮農民たちは地元の地主と契約を結んで水田を開墾させて有り余るほどの生活をしていた。しかし、日本は計画的に家屋を建築するために無理矢理先住の朝鮮農民たちを現地或は他の所の漢族農民の家屋に追出した。

鉄嶺安全農村には日本領事館が派遣した二人の警察が常駐しながら、村内朝鮮人たちの一挙手一投足を監視して、もし不祥事が発生すれば随時鉄嶺等の日本領事館警察から支援を受けることも可能であった。

鉄嶺安全農村の朝鮮農民は非常に劣悪な条件で生活を営んだ。1936 年 4 月まで朝鮮慶尚南道から転入して来た 50 戸の朝鮮人で形成されていた部落には便所が一つのみであったので、子供たちは村の至る所で用を済ますことになっていた。衛生条件だけでなく、水質も悪く飲用水も問題であった。現地の水質は沸しても匂いが臭くて飲用水としては使えなかった。その結果、村では重病を患って死亡に至ることもしばしば現れた。例えば、1936 年 5 月から翌年 2 月まで、全村では 52 人が死去したが、中には男 34 人、女 18 人で、僅か 10 ヶ月内に全村人口の 2.3%を占める村人が死去してしまった。

表 2 朝鮮人の人口増加状況

	戸数	人口（人）
1929	123	681
1930	124	710
1931	190	1,059
1932	190	1,000
1933	235	1,288
1934	235	1,372
1935	325	1,704
1936	428	2,251

表 3 朝鮮人原籍地分布³⁾

道別	戸数	%	南北道%
平安北道	176	50.1	63.4
平安南道	46	13.3	
慶尚北道	25	7.2	32.5
慶尚南道	88	25.4	
黄海道	4	1.2	1.2
京畿道	2	0.6	0.6
忠清北道	2	0.6	1.5
忠清南道	3	0.9	
全羅南道	1	0.3	0.3
総計	347	100	100

表3からわかるように、平安道出身が63.4%を占めて一番多く、慶尚道出身が32.5%で、平安道と慶尚道出身が約96%を占め、鉄嶺安全農村の主流になっていたことが分かる。

IV. 教育状況

満洲に移住し、荒廢地を開拓しながら貧農として生きていた在満朝鮮人にとって衣食住の次に解決すべき問題は子弟の教育であったが、鉄嶺安全農村も例外ではなかった。彼らは子弟の教育のために村民同士で1933年5月から学校組合を設立して基金を捻出し、また東亜勸業株式会社と朝鮮総督府の補助金を得て七部屋の民家を改造し、乱石山普通学校を設立して1933年4月10日に開校した。そして、朝鮮半島の朝鮮教育令による普通教育を実施する傍ら、水田耕作の実習を通して農事知識を与えた。生徒の増加により、次の年の8月に校舎を増築して1935年8月に落成したが、その経費は次の通りである。

表 4 鉄嶺安全農村内乱石山普通学校新築費用明細表

収入			支出		
項目	金額	%	項目	金額	%
組合員負担金	5,555.54	63.6	校舎138坪建築費	7,600.00	81.0
総督府補助金	2,000.00	23.0	附属建物13坪	153.18	1.8
寄付金	620.00	7.1	その他費（3千坪）	639.43	4.2
借入金	562.77	6.4	その他	614.72	7.0
計	8,737.33	100	計	8,737.33	100

表4から見て取れるように、村民の負担が学校全体予算の約64%を占めており、当時安全農村の居住人350戸で割ると一戸当たり16円にもなることは朝鮮人にとっては大きい負担であることがわかる。それでも学校費用を捻出することは当時の鉄嶺安全農村の朝鮮人達の旺盛なる教育熱を表している。

1935年の教職員は次のようである。

表5 乱石山普通学校教職員表⁴⁾

職名	教職員名	生年月日（歳）	出身校	経歴
校長	崔道国	1896. 1 (49)	平壤高普師範科	教員
教師	桂龍文	1903. 1 (33)	鉄嶺育英学校	教員
教師	朱錫健	1912. 1 (24)	龍井村大成中学校	教員
教師	文麟煥	1914. 1 (22)	義州公立農業学校	農業技手
教師	金禪実	1914. 3 (22)	平壤女子高等普通学校	

表5を確認すると、校長である崔道国は朝鮮半島の名門である平壤高等普通学校師範科出身で、既に教員経験があるベテランで、この乱石山普通学校で校長に就任していた。桂龍文教員は鉄嶺育英学校出身で、同じく他校で教育経験があり、朱錫健教員は間島龍井の私立学校で有名な大成中学校出身で、他校での教育経験があり、文麟煥教員は義州公立農業学校を出て農業技手として赴任したものであり、金禪実教員は朝鮮半島の名門である平壤女子高等普通学校を卒業してすぐに赴任したことがわかる。また、五人中三人が朝鮮半島平安道出身で、二人が満洲出身であることがわかる。前述の人口構成で平安道出身が半数以上の63.4%を占めていることから、教員三人も平安道出身であることは順当な構成であろう。

就学状況を見てみよう。

表6 就学状況調 1935年度⁵⁾

学級別	児童数		合計
	男	女	
第一学年	35	25	60
第二学年	33	21	54
第三学年	51	16	67
第四学年	15	2	17
第五学年	7	1	8
補習科	—	—	206

表7 出欠現況 1936年⁶⁾

月別	出席率	在籍児童数	一箇月平均欠席
3月	96.6	174	5.9
4月	95.7	252	10.8
5月	96.6	274	9.3
6月	93.5	276	17.9
平均	95.6	244	10.7

表6から確認できるように普通科5学年で、生徒206名が通っていた。また、表7から四か月間の学生の出席率を確認すると、農閑期の3月には平均値の95.6%より上の96.6%になるが、農繁期の6月には2.1%も少ない93.5%になり、子供まで農事を手伝わなければならないことが確認できる。

図1 診療所と学校⁷⁾

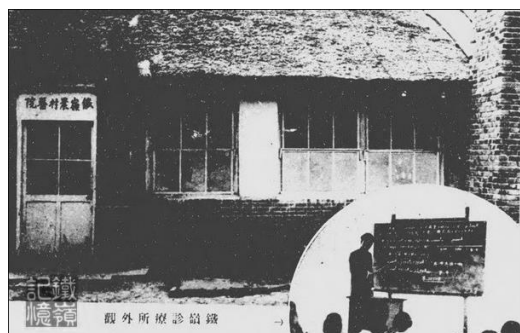


図2 軍事訓練の様子



「村内就学児童の教育施設としては各農村共総督府教育令による普通学校を設立して完全なる児童教育を実施すべく」としていることから、教科目は満洲に於ける他の朝鮮総督府補助学校と同じように、朝鮮教育令に沿って国語（日本語）、朝鮮語、漢文、算術と選択科目として理科、唱歌、体操、図画、手工、裁縫（女子）、農業、商業などを教えた。いわゆる、忠良なる帝国臣民としての教育が行われた。

また、敗戦近くになると、月曜日から土曜日まで全校生徒が毎日1時間軍事訓練を受けた。軍事訓練は軍隊式の本格的なもので、ラッパを吹き、太鼓を叩き、歩くのも分列行進で歩調を合わせなければならず、本物の銃と刀を真似た木製の銃と刀を使っていた。男子も女子も軍事訓練を受けており、また、学校では学業以外に、農事訓練も頻繁に行われた。そして、毎朝全校の生徒を集めて東京の方向に向かって天皇に対して遥拝を強要されたという⁸⁾。

おわりに

「満洲事変」により、生活の場を無くした在満朝鮮人は鉄道沿線に集まってきた。朝鮮人避難民の数が増えるにつれて朝鮮総督府は満鉄監督下の東亜勸業に集団部落を建設させ、朝鮮人を統制しようとした。それで満洲各地に1932年の鉄嶺安全農村を始めとして五つの朝鮮人安全農村を設けた。鉄嶺安全農村の朝鮮人は主に平安道出身で、耕地一戸あたりただ2町しかなく、劣悪な環境で生活が営まれた。それにしても子弟に対する教育熱は高く、乱石山普通学校を設立したが、運営費が足りず朝鮮総督府の補助金を受けざるを得なく、また農繁期には出席率も低かったものの、平安道出身の教員の下で勉学に励んだ。朝鮮総督府も補助金を名目に、朝鮮人学生に「忠良なる帝国臣民」を養成しようとしたの

も確かである。

注

- 1) 南満州鉄道株式会社調査部（1938）『満洲農業移民概説』南満洲鉄道 pp. 77-78。
- 2) 朝鮮総督府（1994）『朝鮮総督府帝国議会説明資料書』第一巻 不二出版社 p. 65；朝鮮総督府（1933）『朝鮮総督府時政年報』第16巻 p. 551；朝鮮総督府（1935）『朝鮮人移民問題の重大性』p. 65による。
- 3) 産業調査資料（1937）『移民地調査資料』第二輯 南満州鉄道調査部 pp. 283-288による。
- 4) 産業調査資料（1937）『移民地調査資料』第二輯 南満州鉄道調査部 p. 289とp. 291による。
- 5) 東亜勸業株式会社編（1935）『朝鮮人安全農村建設経過並現状--営口・河東・鉄嶺・綏化・三源浦』東亜勸業 p. 70による。
- 6) 産業調査資料（1937）『移民地調査資料』第二輯 南満州鉄道調査部 p. 290による。
- 7) http://blog.sina.com.cn/s/blog_52feed390102y5zo.html（2020年8月1日検索）。
- 8) 朴仁哲（2008）『『満州』における朝鮮人「安全農村」に関する一考察--朝鮮人移民一世への聞き取り調査を通して』『北海道大学大学院教育学研究院紀要』106号 p. 108。

参考文献

- 金静美（1992）、『中国東北部における抗日朝鮮・中国民衆史序説』現代企画室。
- 梶村秀樹（1993）、「1930年代満洲における抗日闘争に対する日本帝国主義の諸策動--『在満朝鮮人問題』と関連して」『梶村秀樹著作集』第4巻、明石書店。
- 朝鮮総督府（1994）、『朝鮮総督府帝国議会説明資料書第一巻』不二出版社。
- 孫春日（2003）、『「満洲国」時期朝鮮人開拓移民研究』延辺大学出版社。
- 玄恩柱（2003）、「農業生産を通してみる安全農村住民の経済状況」南陽洪鐘泌博士定年退任記念論叢発行委員会編『東北亜歴史の諸問題』白山出版社。
- 朴仁哲（2008）、『『満州』における朝鮮人「安全農村」に関する一考察--朝鮮人移民一世への聞き取り調査を通して』『北海道大学大学院教育学研究院紀要』106、103-117頁。

The Tieling Safety Rural and Education

JIN, Tingshi

Abstract

Due to the Manchurian Incident, Koreans, living in Manchuria who lost their habitats, gathered along the railway lines. As the number of internally displaced Koreans increased, the Governor-General of Korea tried to control the Koreans by building a group of villages in the East-Asian Agricultural Clubs under the supervision of South Manchuria Railway Co., Ltd. As a

result, five Korean safe farming villages were established in various places of Manchuria, including the Tieling Safety Rural in 1932. The people of the Tieling Safety Rural were mainly from Pyeongan-do, and each household only had two cho of land. What's worse, they all lived in a poor environment. Even so, the Koreans were very enthusiastic about the education of their children and established the LuanShiShan Ordinary School. However, they had to receive a subsidy from the Governor-General of Korea due to insufficient operating costs. It is clear that the Governor-General of Korea tried to train Korean students as "Loyal Subjects of the Empire" in the name of subsidies.

Keywords : Manchurian Incident, Koreans living in Manchuria, Safety Rural, Tieling, education

中国語話者における複合動詞「V1-疲れる」の 母語干渉の可能性について

杉村 泰（名古屋大学）

要旨

本稿は中国語話者における複合動詞「V1-疲れる」の母語干渉の可能性について、日本語母語話者の「V1-疲れる」、中国人日本語学習者の「V1-疲れる」、中国語母語話者の“V1-累”の許容度を比較して考察したものである。その結果、(1)V1が「切る」、「燃やす」のように他動性の高い動詞や、「咲く」「光る」のように無意志自動詞の場合は、日本語母語話者も中国人日本語学習者も「V1-疲れる」の許容度が低く、(2)「行く」「来る」など二格対象を取る意志的自動詞や、「聞く」「見る」など身体的動きの小さい動詞や、「座る」「乗る」のような結果指向の自動詞の場合、中国語話者の方が日本語話者よりも高い許容度を示す傾向のあることを明らかにした。その上で、V1が「聞く」「見る」など身体的動きの小さい動詞や、「座る」「乗る」のような結果指向の自動詞の場合において、中国語の“V1-累”からの母語干渉が起きる可能性があることを示唆した。

キーワード： 複合動詞、V1-疲れる、V1-累、中国語話者、許容度

はじめに

本稿は中国語を母語とする日本語学習者（以下、「中国語話者」）における日本語の複合動詞「V1-疲れる」の母語干渉の可能性について論じたものである。「V1-疲れる」は主体が前項動詞（V1）で表される行為の結果、疲れを生じることを表す表現で、中国語にも“V1-累”（“累”は「疲れる」の意味）という似た表現がある¹⁾。しかし、中国語の“听累了”は自然に使えるが、日本語の「聞き疲れた」は少し不自然であるというように、V1に来る動詞に違いがある。そのため、中国語話者は母語である中国語の影響で「V1-疲れる」のV1に来る動詞の可否を判断する可能性がある。

しかし、先行研究では影山（1993）や松本（1998）のように複合動詞全体の大まかな「V1+V2」結合の傾向を見るものが多い。また、杉村（2007, 2011）のように個別の複合動詞後項（V2）を見ているものはあるが、学習者の母語干渉に関してはあまり議論されていない。そこで本研究ではアンケートによる文法性判断テストを利用して、日本語話者の「V1-疲れる」（母語）、中国語話者の「V1-疲れる」（目標言語）、中国語話者の“V1-累”（母語）

の V1 の許容度を抽出し、これらを比較することによって母語干渉の可能性を論じる。

I. 先行研究

影山（1993）は日本語の動詞を他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞の3つに分類し、語彙的複合動詞の V1 と V2 の結合には「他動性調和の原則」が働いていると論じている。すなわち、V-V 型の語彙的複合動詞の「V1+V2」は、基本的に「他動詞+他動詞」、「非能格自動詞+非能格自動詞」、「非対格自動詞+非対格自動詞」、「他動詞+非能格自動詞」、「非能格自動詞+他動詞」の5つの中のいずれかになると主張している。

これに対し、松本（1998）は語彙的複合動詞の中にも、「歩き疲れる」や「泣きぬれる」のように「非能格自動詞+非対格自動詞」となるものや、「読み疲れる」や「飲みつぶれる」のように「他動詞+非対格自動詞」となるものもあるとして、これらを「他動性調和の原則の真の反例と考えられる（p. 50）」としている。その上で松本（1998）は、「二つの動詞の主語として実現する項が同一物を指す、というもので、主語になるものであれば外項同士（あるいは内項同士）である必要はない（p. 52）」と主張し、「主語一致の原則」を提唱している。確かに「V1-疲れる」は主語一致の原則によって説明することができる。

しかし、松本（1998）は具体的にどのような動詞が「V1-疲れる」の V1 に来るかについては論じていない。これに対し、杉村（2007）では Web 検索を利用して、V1 には「疲れる」の原因を表す動詞であれば他動詞でも自動詞でも付くことを指摘している。さらに杉村（2011）ではアンケートによる文法性判断テストによって、日本語の「V1-疲れる」と中国語の“V1-累”の V1 について分析し、次のような特徴のあることを指摘している。

日本語と中国語の類似点

- ・動作主の行為に焦点が当たる「動作主指向性」の自動詞や他動詞の許容度は高い。

（例）「歩く（100%）/走（100%）」、「遊ぶ（100%）/玩（100%）」

「歌う（98%）/唱（94%）」、「話す（96%）/说（92%）」

- ・対象の変化に焦点が当たる「対象指向性」の他動詞の許容度は低い。

（例）「切る（22%）/切（40%）」、「燃やす（12%）/烧（2%）」

- ・着点（ニ格）を取る「結果指向性」の意志的自動詞の許容度は低い。

（例）「行く（24%）/去（4%）」、「来る（0%）/来（0%）」

- ・心理動詞や無意志自動詞の許容度は低い

（例）「迷う（20%）/犹豫（2%）」、「驚く（14%）/吃惊（0%）」

「咲く（0%）/（花）开（4%）」、「光る（0%）/亮（2%）」、「痛む（0%）/疼（0%）」

日本語と中国語の相違点

- ・ 中国語は日本語に比べて二音節の動詞の許容度が下がりやすい。
(例)「戦う(74%)/战斗(20%)」、「考える(74%)/考虑(16%)」、「攻める(54%)/进攻(6%)」
- ・ 中国語は日本語に比べて身体的動きの小さい動詞の許容度が上がりやすい。
(例)「見る(38%)/看(94%)」、「聞く(46%)/听(92%)」、
「座る(48%)/坐(82%)」、「乗る(42%)/坐(车)(92%)」

これを受け、本稿では中国語話者の「V1-疲れる」の母語干渉について考察する。

Ⅱ. アンケート調査

本稿ではアンケートによる文法性判断テストを利用して、日本語話者と中国語話者の「V1-疲れる」および中国語話者の“V1-累”の許容度を比較する。調査の概要は以下の通りである。

1) 被験者

「V1-疲れた」

- ① 日本語話者：名古屋大学1年生 50人 (2008. 1. 17 実施)
- ② 中国語話者：南台科技大学応用日語系大学院1年生 17人 (2008. 2. 25 実施)
天津の大学の日語学院4年生 33人 (2008. 3. 13 実施) 計 50人
(日本語能力試験N1合格レベル)

“V1-累了”

- ③ 中国語話者：天津の大学の日語学院1年生 50人 (2010. 9. 29～30 実施)
(日本語は仮名と挨拶ぐらいしか勉強していないレベル)

2) 調査項目

次のような質問紙を使い、「V1-疲れる」と“V1-累”それぞれ72語について、被験者に○×の二者択一で正誤判断をしてもらった。「タ形」や「了形」を用いたのは原形よりもその言葉のイメージが捉えやすいためである。文脈を付けなかったのは文脈なしでもその複合動詞のイメージが頭に浮かびやすいかどうかを見るためである。

質問 次の表現が正しいと思う場合は○を、正しくないと思う場合は×を入れて下さい。

- | | | |
|-----------|-----------|-----------|
| () 諦め疲れた | () 遊び疲れた | () 集め疲れた |
| () 歩き疲れた | () 言い疲れた | () 行き疲れた |
| () 痛み疲れた | () 居疲れた | () 動き疲れた |

： ； ； (全72語)

3) V1 の選択基準

「疲れる」は行為の結果、主体に疲れが生じることを表すため、次のように他動詞も自動詞も「動作主指向性」の有無を考慮して分類した。V1 には「切る（切）」などの対象指向性の他動詞、「歌う（唱）」などの動作主指向性の他動詞、「歩く（走）」などの動作主指向性の自動詞、「行く（去）」などの結果指向性の意志的自動詞、「迷う」などの心理動詞、「光る」などの無意志自動詞を適宜選び、日中対訳となるようにした。

以上のアンケートによって、上の①～③の被験者グループごとに「○」（正しい）と回答した人の割合を算出し、それを各語の許容度とした。その結果を表 1 に示す。表 1 は中国語話者の「V1-疲れた」の許容度の降順に並べてある。

表 1 「V1-疲れる」（日・中）と V1-累” の許容度の比較

（左から日本語話者の「V1-疲れた」、中国語話者の「V1-疲れた」、中国語話者の“V1-累了”の許容度）

	V1	許容度(%)				V1	許容度(%)				V1	許容度(%)		
1	歩く/走	100	98	100	25	飛ぶ/飞	44	78	70	49	進む/进展	20	40	2
2	踊る/跳	98	92	92	26	叫ぶ/喊	96	76	94	50	迷う/犹豫	20	40	2
3	しゃべる/聊	90	92	80	27	待つ/等	82	74	74	51	切る/切	22	38	40
4	泳ぐ/游	100	90	78	28	投げる/扔	54	74	30	52	寝る/躺	16	36	50
5	泣く/哭	94	90	90	29	攻める/进攻	54	74	6	53	眠る/睡	16	36	32
6	読む/读	80	90	92	30	作る/做	44	74	74	54	暮らす/生活	12	36	46
7	歌う/唱	98	88	94	31	座る/坐	48	72	82	55	怒る/气	76	32	14
8	書く/写	88	88	94	32	選ぶ/选	58	70	26	56	燃やす/烧	12	32	2
9	働く/工作	82	88	84	33	押す/推, 按	38	70	34, 32	57	来る/来	0	30	0
10	走る/跑	94	86	98	34	動く/活动	78	68	54	58	壊す/破坏	36	24	2
11	笑う/笑	84	86	78	35	殴る/揍	64	66	36	59	驚く/吃惊	14	24	0
12	立つ/站	80	86	100	36	食べる/吃	46	66	48	60	困る/为难	8	24	0
13	登る/爬	78	86	88	37	乗る/坐(车)	42	66	92	61	並ぶ/排	52	22	10
14	戦う/战斗	74	86	20	38	持つ/拿	50	64	58	62	休む/休息	8	22	4
15	噛む/咬	58	86	46	39	見る/看	32	62	94	63	住む/住	6	22	20
16	言う/说	52	86	92	40	悩む/烦恼	54	60	2	64	溺れる/溺水	6	22	0
17	遊ぶ/玩	100	82	100	41	鳴く/鸣叫	66	54	8	65	帰る/回去	6	22	0
18	考える/考虑	74	82	16	42	逃げる/逃	60	52	32	66	咲く/(花)开	0	22	4
19	語る/谈	58	82	54	43	行く/去	24	48	4	67	光る/亮	0	20	2
20	聞く/听	46	82	92	44	騒ぐ/吵(闹)	86	46	74	68	痛む/疼	0	20	0
21	打つ/打	38	82	80	45	折る/折	26	44	10	69	泊まる/住	2	18	20
22	話す/讲	96	80	92	46	倦む/厌烦	2	44	2	70	居る/呆	8	16	28
23	叩く/敲	50	80	68	47	集める/收集	34	42	10	71	萌える/发芽	4	16	0
24	探す/找	94	78	50	48	飲む/喝	38	40	22	72	諦める/放弃	0	14	0

Ⅲ. V1 の種類別の特徴

本節では上のアンケート結果をもとに V1 の種類ごとに特徴を見ていく。まず、中国語の V1 が二音節動詞の場合について見る（表 2）。この場合、中国語話者の「V1-疲れる」は、日本語話者の許容度が高いものは日本語話者に近く、日本語話者の許容度が低いものは日本語話者より少し高めになっており²⁾、必ずしも中国語の“V1-累”からの干渉は見られない。（以下、表 2～9 は表 1 から該当部分を抜粋したものである。）

表 2 中国語の V1 が二音節動詞の場合

（左から日本語話者の「V1-疲れた」、中国語話者の「V1-疲れた」、中国語話者の“V1-累了”の許容度）

	V1	許容度 (%)				V1	許容度 (%)				V1	許容度 (%)		
9	働く/工作	82	88	84	49	進む/进展	20	40	2	62	休む/休息	8	22	4
14	戦う/战斗	74	86	20	50	迷う/犹豫	20	40	2	64	溺れる/溺水	6	22	0
40	悩む/烦恼	54	60	2	54	暮らす/生活	12	36	46	65	帰る/回去	6	22	0
41	鳴く/鸣叫	66	54	8	59	驚く/吃惊	14	24	0	71	萌える/发芽	4	16	0
47	集める/收集	34	42	10	60	困る/为难	8	24	0	72	諦める/放弃	0	14	0

次に、V1 が動作主指向性の自動詞の場合について見る（表 3）。動作主指向性の自動詞とは、意志的自動詞のうち「（～に）行く」のような着点を取る自動詞を除いたものである。この場合、日本語話者の「V1-疲れる」は「歩く」「泳ぐ」「働く」のように身体的動きの大きい動詞の許容度が上がり、「眠る」「暮らす」「休む」のように身体的動きの小さい動詞の許容度が下がる傾向にある。一方、中国語話者の「V1-疲れる」も同様の傾向にあるが、身体的動きの小さい動詞の場合は日本語話者よりやや高くなっている。しかし、二音節動詞の場合も含めて全体的に母語干渉は見られない。

表 3 V1 が動作主指向性の自動詞の場合

（左から日本語話者の「V1-疲れた」、中国語話者の「V1-疲れた」、中国語話者の“V1-累了”の許容度）

	V1	許容度 (%)				V1	許容度 (%)				V1	許容度 (%)		
1	歩く/走	100	98	100	17	遊ぶ/玩	100	82	100	53	眠る/睡	16	36	32
4	泳ぐ/游	100	90	78	25	飛ぶ/飞	44	78	70	54	暮らす/生活	12	36	46
9	働く/工作	82	88	84	34	動く/活动	78	68	54	62	休む/休息	8	22	4
10	走る/跑	94	86	98	41	鳴く/鸣叫	66	54	8					
14	戦う/战斗	74	86	20	44	騒ぐ/吵(闹)	86	46	74					

次に、V1 が動作主指向性の他動詞の場合について見る（表 4）。動作主指向性の他動詞とは、対象の位置的・物理的变化よりも動作主の行為に焦点が当たりやすい動詞のことである。この場合、日本語話者の「V1-疲れる」は全体的に許容度が高いが、「聞く」「見る」

のような身体的動きの小さい動詞の許容度は下がる傾向にある³⁾。一方、中国語話者の「V1-疲れる」の許容度は全体的に高く、身体的動きの大小と関わらず動作主指向性の他動詞の許容度を高く捉えている。そのため、「聞く」「見る」のような身体的動きの小さい動詞の場合に、母語干渉で許容度が高くなっていると考えられる。

表4 V1が動作主指向性の他動詞の場合

(左から日本語話者の「V1-疲れた」、中国語話者の「V1-疲れた」、中国語話者の「V1-累了」の許容度)

	V1	許容度(%)				V1	許容度(%)				V1	許容度(%)		
2	踊る/跳	98	92	92	18	考える/考慮	74	82	16	26	叫ぶ/喊	96	76	94
3	しゃべる/聊	90	92	80	19	語る/谈	58	82	54	27	待つ/等	82	74	74
6	読む/读	80	90	92	20	聞く/听	46	82	92	39	見る/看	32	62	94
7	歌う/唱	98	88	94	22	話す/讲	96	80	92					
16	言う/说	52	86	92	24	探す/找	94	78	50					

次に、V1が対象指向性の他動詞の場合について見る(表5)。対象指向性の他動詞とは、対象の位置的・物理的变化に焦点が当たりやすい動詞のことである。この場合、日本語話者の「V1-疲れる」は「書く」を除いて全体的に許容度が下がる傾向にある。一方、中国語話者の「V1-疲れる」の許容度は全体的に日本語話者より高く、特に「打つ」「投げる」のような相対的に他動性の低いもので日本語話者との差が開いている。また、中国語の「V1-累」よりも許容度高いものが多く、全体的に母語干渉はあまり見られない。

表5 V1が対象指向性の他動詞の場合

(左から日本語話者の「V1-疲れた」、中国語話者の「V1-疲れた」、中国語話者の「V1-累了」の許容度)

	V1	許容度(%)				V1	許容度(%)				V1	許容度(%)		
8	書く/写	88	88	94	30	作る/做	44	74	74	45	折る/折	26	44	10
15	噛む/咬	58	86	46	32	選ぶ/选	58	70	26	47	集める/收集	34	42	10
21	打つ/打	38	82	80	33	押す/推, 按	38	70	34, 32	48	飲む/喝	38	40	22
23	叩く/敲	50	80	68	35	殴る/揍	64	66	36	51	切る/切	22	38	40
28	投げる/扔	54	74	30	36	食べる/吃	46	66	48	56	燃やす/烧	12	32	2
29	攻める/进攻	54	74	6	38	持つ/拿	50	64	58	58	壊す/破坏	36	24	2

次に、V1が結果指向性の意志的自動詞の場合について見る(表6)。結果指向性の意志的自動詞とは、日本語で二格の着点を取りやすい動詞のことである。この場合、日本語話者の「V1-疲れる」は「立つ」「登る」を除いて全体的に許容度が下がる傾向にある。一方、中国語話者の「V1-疲れる」の許容度は日本語話者より高くなる傾向にある。このうち「座る」「乗る」は中国語の「V1-累」の母語干渉で高くなっている可能性がある。

表6 V1が結果指向性の自動詞の場合

(左から日本語話者の「V1-疲れた」、中国語話者の「V1-疲れた」、中国語話者の“V1-累了”の許容度)

	V1	許容度(%)				V1	許容度(%)				V1	許容度(%)		
12	立つ/站	80	86	100	43	行く/去	24	48	4	63	住む/住	6	22	20
13	登る/爬	78	86	88	49	進む/进展	20	40	2	65	帰る/回去	6	22	0
31	座る/坐	48	72	82	52	寝る/躺	16	36	50	69	泊まる/住	2	18	20
37	乗る/坐(車)	42	66	92	57	来る/来	0	30	0	70	居る/呆	8	16	28
42	逃げる/逃	60	52	32	61	並ぶ/排	52	22	10					

次に、V1 が心理動詞やその他の無意志自動詞の場合について見る（表4）。この場合、日本語話者の「V1-疲れる」は「泣く」「笑う」「怒る」のような身体的動作を伴う感情の場合には許容度が高くなるが、「悩む」「倦む」「迷う」のような身体的動作を伴わない感情やその他の無意志自動詞の場合は相対的に許容度が低くなる。一方、中国語話者の「V1-疲れる」の許容度は日本語話者と同等か少し高くなる傾向にある。ただし、「怒る」は日本語話者より許容度が低くなる。これは中国語の“气”の母語干渉による可能性がある。

表7 V1が心理動詞や無意志自動詞の場合

(左から日本語話者の「V1-疲れた」、中国語話者の「V1-疲れた」、中国語話者の“V1-累了”の許容度)

	V1	許容度(%)				V1	許容度(%)				V1	許容度(%)		
5	泣く/哭	94	90	90	55	怒る/气	76	32	14	67	光る/亮	0	20	2
11	笑う/笑	84	86	78	59	驚く/吃惊	14	24	0	68	痛む/疼	0	20	0
40	悩む/烦恼	54	60	2	60	困る/为难	8	24	0	71	萌える/发芽	4	16	0
46	倦む/厌烦	2	44	2	64	溺れる/溺水	6	22	0	72	諦める/放弃	0	14	0
50	迷う/犹豫	20	40	2	66	咲く/(花)开	0	22	4					

IV. まとめ

以上、本稿ではアンケートによる文法性判断テストを利用して、日本語話者の「V1-疲れる」、中国語話者の「V1-疲れる」、中国語話者の“V1-累”の3つの許容度を比較することにより、中国語話者における中国語の母語干渉の可能性を見た。

まず、中国語の“V1-累”はV1が二音節動詞の場合は使いにくい、中国語話者の「V1-疲れる」には母語干渉は見られなかった。このことから、母語の“V1-累”の音節による制約は、対応する日本語の「V1-疲れる」には影響しないことを明らかにした。

次にV1を「対象指向性の他動詞」、「動作主指向性の他動詞」、「動作主指向性の自動詞」、「結果指向性の意志的自動詞」、「心理動詞・無意志自動詞」に分けて、中国語話者の母語干渉の可能性を見た結果を表8に示す。表8に示したように、日本語の「V1-疲れる」は「聞く」「見る」のように身体的動きの小さい動作主指向の他動詞や、「座る」「乗る」のような

結果指向の自動詞では許容度が低くなるが、中国語話者は日本語話者に比べて許容度を高く捉えている。これは中国語の“V1-累”による母語干渉による可能性がある。

今後は「V1-疲れる」と同様にV2に動作主体の変化を表すものが来る「V1-慣れる」「V1-飽きる」などについても見ることにより、母語干渉の有無についてさらに解明していきたいと思う。

表8 中国語話者の「V1-疲れる」の動詞の種類別の特徴

	他動詞		自動詞		
	対象指向	動作主指向	動作主指向	結果指向	心理・無意志
中国語話者の「V1-疲れる」の特徴	日本語話者の許容度は中程度だが、中国語話者の許容度は日本語話者より高めになる。しかし、中国語の“V1-累”よりも許容度が高いものが多い。	日本語話者は全体的に許容度が高いが、「聞く」「見る」のように身体的動きの小さい動詞の許容度は下がる。しかし、中国語の“V1-累”は身体的動きの大小に関わらず許容度が高く、中国語話者の「V1-疲れる」の許容度も高くなる。	中国語話者も日本語話者と同様に「歩く」「泳ぐ」のように身体的動きの大きい動詞は相対的に許容度が高く、「眠る」「暮らす」のように身体的動きの小さい動詞の許容度は低くなる。	日本語話者は「立つ」や「登る」を除いて全体的に許容度が低い。中国語話者は日本語話者より許容度が高くなる。「座る」「乗る」は中国語の“V1-累”の許容度が高く、母語干渉で「V1-疲れる」の許容度高くなっている可能性がある。	日本語話者は「泣く」のような身体的動作を伴う感情の場合には許容度が高いが、「悩む」のような身体的動作を伴わない感情やその他の無意志自動詞の許容度は低い。一方、中国語話者は日本語話者と同等か少し高くなる。
母語干渉	基本的になし	身体的動きの小さい場合に干渉がある	基本的になし	「座る」「乗る」は中国語の母語干渉の可能性はある	基本的になし ただし「怒る」は母語干渉の可能性はある

注

- 1) 沈・林（2009）は、「张三骑累了马」には動作主の“张三”が疲れるという解釈と、対象の“马”が疲れるという解釈があることを指摘している。ただし、これは中国語でも特殊な場合であるため、本稿の考察範囲から外すこととする。
- 2) これは一般に他の文法項目にも見られることで、学習者には正しいという判断に比べて誤りであるという判断がききにくいためである。
- 3) 「言う」や「語る」の許容度が「話す」や「しゃべる」より低い理由は今後の課題とする。

参考文献

影山太郎(1993)、『文法と語形成』、ひつじ書房。

沈力・林宗宏(2009)、「中国語の結果構文と事象構造」、沈力・赵华敏（主编）『汉日理论语言学研究』学苑出版社、197-209 頁。

杉村泰(2007)、「複合動詞「一疲れる」の前項動詞の特徴について」『ことばの科学』第20号、名古屋大学言語文化研究会、101-115頁。

杉村泰(2011)、「日本語の「V1-疲れる」と中国語の“V1-累”」『漢日語言対比研究論叢』第2輯、漢日対比語言学研究(協作)会・黒龍江大学東語学院合編、北京大学出版社、231-240頁。

松本曜(1998)、「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』第114号、日本言語学会、37-82頁。

付記：本稿は平成28-32年度科学研究費基金(基盤研究(C))「中国人日本語学習者におけるポートフォリオ型学習データベースの構築と文法習得の研究」(研究代表者:杉村泰、課題番号16K02809)による研究成果の一部である。

On the Possibility of Native Language Interference from Chinese “V1-*lei*” on Usage of the Japanese Compound Verb “V1-*tsukareru*” of Chinese learners of Japanese

SUGIMURA, Yasushi

Abstract

his paper discusses the possibility of native language interference from Chinese “V1-*lei*” on the usage of the Japanese compound verb “V1-*tsukareru*” of Chinese learners of Japanese, using a true-false test of Japanese native speaker’s “V1-*tsukareru*”, Chinese learners of Japanese’s “V1-*tsukareru*” and Chinese native speaker’s “V1-*lei*”. The survey results suggested as follow: (1) When V1 are high transitivity verbs like “*kiru*” or “*moyasu*” or involuntary verbs like “*saku*” or “*hikaru*”, both native Japanese speakers and Chinese learners of Japanese have low acceptability on “V1-*tsukareru*”, (2) When V1 are voluntary verbs which take case particle “*ni*” like “*iku*” or “*kuru*” or verbs with small physical movements like “*kiku*”, “*miru*” or result-oriented intransitive verbs like “*suwaru*” or “*noru*”, Chinese learners of Japanese tend to show high acceptability on “V1-*tsukareru*” than native Japanese speakers. Moreover, the result suggests that there is a possibility of native language interference from Chinese “V1-*lei*” when V1 are verbs with small physical movements like “*kiku*”, “*miru*” or result-oriented intransitive verbs like “*suwaru*” or “*noru*”.

Keywords: compound verbs, “V1-*tsukareru*”; “V1-*lei*, Chinese learners of Japanese, acceptability

学会役員

<顧問>

山泉進（明治大学・名誉教授）

李漢燮（高麗大学・名誉教授）

<会長・理事>

安達義弘（日韓言語文化交流センター・
副代表）

<副会長・理事>

李東哲（韓国新羅大学校・教授）

権寧俊（新潟県立大学・教授）

崔光准（新羅大学・教授）

海村惟一（福岡国際大学・名誉教授）

杉村泰（名古屋大学・教授）

金龍哲（神奈川県立保健福祉大学・教授）

鄭亨奎（日本大学・教授）

<常任理事>

李東軍（蘇州大学・教授）

岩野卓司（明治大学・教授）

崔肅京（富士大学・教授）

李慶国（追手門学院大学・教授）

<事務局長・理事>

金珽実（商丘師範学院・副教授）（事務局
長）

<一般理事>

阿莉塔（浙江大学・副教授）

安勇花（延边大学・副教授）

白曉光（西安外国語大学・副教授）

宮脇弘幸（大連外国語大学・客員教授）

金光林（新潟産業大学・教授）

李光赫（大連理工大学・副教授）

娜荷芽（内蒙古大学・副教授）

任星（厦門大学・副教授）

施暉（蘇州大学・教授）

矢野謙一（熊本学園大学・教授）

王宗傑（浙江越秀外国語大学・教授）

徐瑛（浙江越秀外国語学院・副教授）

植田晃次（大阪大学・教授）

朴銀姫（魯東大学・教授）

加藤三保子（豊橋技術科学大学・特任教
授）

中川良雄（京都外国語大学・教授）

堀江薫（新潟県立大学・教授）

飯嶋美知子（北海道情報大学・准教授）

李昌玟（韓国外国語大学校・教授）

学会動向

◆「韓国日語日文学会 2020 年冬季国際学術大会」の共催

2020 年 12 月 19 日、韓国外国語大学校サイバー大学で開催された「韓国日語日文学会 2020 年冬季学術大会」は本学会との共催で行われ（オンライン）、本学会から安達会長をはじめ 17 名が参加しました。開会式では安達会長が祝辞を述べ、李文哲会員（煙台大学）が「ニューメディア環境におけるメディア・リテラシー」というテーマで招請講演を行いました。また、その他の 15 名の会員は分科会で学術論文を発表しました（共同発表を含む）。

◆「第三回東アジア日本学研究国際シンポジウム」の開催決定

2020 年 10 月 25 日、日本大学で開催予定だった「第三回東アジア日本学研究国際シンポジウム」は、COVID-19 のため開催が中止となりましたが、今年 9 月 17 日から 19 日まで中国・蘇州大学で開催することが理事会の議を経て決まりました。もし、COVID-19 の影響で海外への移動が不可能な場合は、オンライン開催か、オンラインとオフライン兼行開催を予定しております。

◆学会誌第 6 号への投稿

2021 年 9 月発行予定の「東アジア日本学研究」第 6 号への投稿は 4 月から受理します。会員皆様の積極的な投稿を期待します。また、非会員が投稿を希望する場合は、投稿前か投稿時に会員入会申請をし、2021 年度分の所定の会費を納入しなければなりません。

東アジア日本学研究学会副会長

李東哲

会員消息

◆新入会員

胡蘇紅（名古屋大学、院生）

劉志穎（大連理工大学、院生）

崔旭（新潟大学、院生）

朴徳華（大連理工大学、院生）

冀媛媛（名古屋大学、院生）

野田晃生（中国・東南大学）

◆会員所属・職位変更

菅陽子（台湾・国立中正大学）

◆博士学位取得

李東哲（韓国・新羅大学 文学博士 2021年2月）

学位論文テーマ 「中国母語話者の日本語書き言葉の誤用研究」

池孝民（韓国・新羅大学 文学博士 2021年2月）

学位論文テーマ 「『学之光』と朝鮮近代文人に関する研究—玄相允と崔曙海を中心として—」

◆学術賞受賞等

李東哲（第20回徳川宗賢優秀賞、新井保裕、生越直樹、孫蓮花、李東哲共著）

論文テーマ：「中国朝鮮族言語使用・意識の多様性に関する研究—朝鮮族学校でのアンケート調査」、『社会言語化学』第22巻1号、pp. 125-141

※以上は、いずれも2020年10月1日以降、2021年3月30日までの変動事項です。

東アジア日本学研究学会副会長

李東哲

東アジア日本学研究学会会則

<名称>

第1条 本会は、東アジア日本学研究学会(The Society of Japanese Studies in East Asia)と称する。

<目的>

第2条 本会は、東アジア地域における日本学の学際的研究をととして、また、それぞれの研究者が研究成果を発表し交換し合うことをととして、学問の進歩及び当該地域の平和的發展に寄与することを目的とする。

<事業>

第3条 本会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

1. 東アジア地域における日本学を中心とした学際的研究・調査
2. 学会、研究会、講演会及びシンポジウムの開催
(学会における共通言語は、原則として日本語とする)
3. 機関誌及び図書等の刊行
4. 内外の学術団体、研究者との連絡及び学術上の交流
5. その他本会の目的を達成するために必要と認められる事業

<会員>

第4条 本会の会員は、個人会員、賛助会員とする。

1. 個人会員は、東アジア地域の研究に関心を持ち、かつ本会の目的に賛同する個人
2. 賛助会員は、本会の目的に賛同し、本会の事業に協力する法人・団体または個人

第5条 本会には、名誉会員および顧問をおくことができる。名誉会員および顧問は、理事会が推薦し、会員総会の承認を受ける。

<入会・退会>

第6条 本会に入会を希望する者は、理事会に申請し、その承認を得るものとする。

ただし、大学院生は、指導教員の推薦を得ることとする。

第7条 本会を退会しようとする者は、退会を事務局に通告すれば退会することができる。
会費を2年間滞納した者は、理事会において承認のうえ、退会とみなす。

<会費>

第8条 会員の会費は、次のように定める。

一般会員	5,000 円
学 生	3,000 円
賛助会員	50,000（1口） 円

<役員>

第9条 本会に次の役員をおく。

1. 会長 1名
2. 副会長 若干名
3. 理事 30名以内（理事のうち若干名を常任理事とする）
4. 事務局長 1名
5. 会計監事 2名
6. その他理事会が必要と認めた役員

第10条 役員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

<役員の職務>

第11条 本会の役員の職務は次のとおりとする。

1. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
2. 副会長は、会長を補佐し、会長に不都合が生じた時はこれを代理する。
3. 理事は、理事会を組織し、会務を審議執行する。理事会の議事は、出席者の過半数により決定する。
4. 事務局長は、会長の指示に基づいて、事務を執り行う。
5. 会計監事は、会計を監査する。

<役員の選出>

第12条 役員の選出は次のとおりとする。

1. 会長は、会員総会において選出する。
2. 副会長・理事は会長が任命する。
3. 会計監事は、会員総会において選出する。
4. その他の役員は、理事会が委嘱する。

<学会誌編集委員会>

第13条 本会は、理事会のもとに学会誌編集委員会をおく。

1. 学会誌編集委員会は、学会誌の出版計画を立案し、これを理事会に提案する。
2. 委員は、個人会員の中から理事会が推薦し、会長が任命する。
3. 委員の任期は、就任から2年とする。ただし、再任は妨げない。

4. 学会誌編集委員会に委員長を置き、委員の中から互選する。
5. 委員長は、学会誌編集委員会の事務を掌理する。

<会員総会>

第14条 本会は、毎年1回会員総会を開催する。

第15条 会員総会では、次の事項を審議決定する。

1. 事業報告及び決算
2. 事業計画及び予算
3. 会長及び会計監事の選出
4. 会則の変更
5. その他の必要な事項

第16条 臨時会員総会は、理事会が必要と認めたとき、または会員の2分の1以上の要望があるときに開催する。

第17条 会員総会の議決は、出席会員の過半数をもって決する。

<会計>

第18条 本会の運営は、会費及びその他の収入で賄う。

1. 本会の会計年度は、毎年4月1日に始まり、3月31日に終わる。
2. 本会の決算は、会計監事の監査を受けなければならない。

<雑則>

第19条 本会の所在地は、〒818-0125 福岡県太宰府市五条2丁目8-8-205とする。

<付則>

1. 本会の設立は、2018年9月1日とする。
2. 本会則は、2018年9月1日から実施する。
3. 本会の運営に必要な事項は理事会が定める。

『東アジア日本学研究』投稿要領

- 1) 『東アジア日本学研究』は、東アジアにおける日本学研究に関する論文・研究ノート・書評などにより構成される。
- 2) 1年に2号（春季号・秋季号）の刊行を原則とする。
 - ・春季号はシンポジウムの論文集とする。毎号シンポジウム終了後3週間以内を目安にその都度締め切りを設ける。
 - ・秋季号はシンポジウムの発表以外の内容も含む学術論文集とする。投稿期間は毎号3月1日から4月1日までとする。

（例：2020年度分の春季号は翌2021年春、秋季号は翌2021年秋に発行予定）
- 3) 『東アジア日本学研究』に投稿できるのは、東アジア日本学研究学会の会員および編集委員会が依頼した者とする。ただし春季号にはシンポジウムで発表した非会員にも投稿資格を認める。
- 4) 投稿者が会員の場合、投稿する当該年度までの会費を投稿前に全て納入しなければならない。
- 5) 投稿者が大学院に在籍中の場合は、指導教員による承諾書（100～300字程度。様式は任意）を提出しなければならない。ただし、編集委員会が投稿を依頼した者については、これを適用しない。
- 6) 投稿原稿は未発表のものでなければならない。投稿者は投稿原稿の不採用が決定される前に当該原稿を他の場所で公刊してはならない。
- 7) 本誌の春季号と秋季号は両方同時に投稿することができる。ただし、両者の内容は異なるものとする。また、春季号も秋季号も一回の投稿期間に投稿できるのは一篇のみとする。
- 8) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿の著作権は東アジア日本学研究学会に帰属する。
- 9) 原著者が『東アジア日本学研究』に掲載された文章の全部または大部にわたって複製利用しようとする場合には、事前に編集委員長に申請しなければならない。編集委員会は特段の不都合がない限りはこれを受理し、複製利用を許可する。
- 10) 『東アジア日本学研究』に掲載された全ての原稿は、東アジア日本学研究学会のホームページにおいてPDF ファイルにて公開する。（学会ホームページの作成は検討中）
- 11) 投稿者は、東アジア日本学研究学会ホームページに掲載の「執筆要領」の内容を踏まえ、これに準拠した完成原稿と論文要旨（300～600字程度）を提出する。論文要旨は、日本文タイトル・英文タイトル・電話番号・メールアドレスとともに、下記の所定の様式で提出すること。
- 12) 完成原稿と論文要旨は、E-mail の添付ファイルとして送付する。ファイル形式は原則

として MS-Word とする。採用が決定された原稿の提出方法は編集委員会から再度通知する。

- 13) 投稿された原稿は、査読者による審査結果をもとに、編集委員会が採否を決定する。
- 14) 採用された場合、投稿者は英文要旨を提出する。英文要旨は、提出前に必ずネイティブ・チェックを受ける。
- 15) 執筆者は、別刷り（抜刷）の作成を依頼することが出来る。これに必要な費用は執筆者の自己負担とする。
- 16) 原稿の投稿先および問い合わせ先は次のとおりとする。

東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja20172@163.com

(2019年9月20日改定)

投 稿 票		
氏名		
所属・職位		
メールアドレス		
電話番号		
論文タイトル		
英文タイトル		
種類（該当を残す）	春季号 / 秋季号	論文・研究ノート・書評
分野（該当を残す）	1. 語学・言語教育 2. 文学 3. 文化 4. 歴史	
該当番号を記入	5. 哲学・思想 6. 経済 7. 政治 8. その他	
<論文要旨> (300～600字程度)		

『東アジア日本学研究』執筆要領

1) 利用言語

原稿は日本語を使用し、横書きで作成する。

2) 原稿枚数

原稿の枚数は40字×35行を1枚と換算して、春季号論文は5～7枚(注・図表・参考文献を含む)、秋季号論文は10～15枚(注・図表・参考文献を含む)とする。

3) 見出し番号の表記

本文内の各節章の見出しにつける番号はⅠ、Ⅱ、Ⅲ…とし、その下の款項には1.、2.、3. …を用いる。さらにその下の項には(1)、(2)、(3) …を用いる。最初に「はじめに」、最後に「おわりに」を置いてもよい(番号は付けない)。

4) 句読点の表記

句読点は全角の「、」「。」を用いる。

5) 括弧の表記

括弧は原則として全角とする(欧語表記および注記を示す記号に用いる片括弧を除く)。

6) 数字の表記

数字は、熟語など特別な場合を除き半角のアラビア数字を用いる。4桁表記以上となる場合は、コンマ(,)を用いる。また、「兆、億、万」などの漢数字を用いてもよい。

7) 年号の表記

年号は原則として西暦を用いる。必要に応じて、西暦の後に元号などを丸括弧に入れて併用してもよい。

8) 度量衡の単位は、原則として記号(m kg など)を用いる。

9) 図や表には番号とタイトルを記入する。

10) 注は以下のように該当部分の右肩に入れ、論文末にまとめて並べる。

～と考える¹⁾。

11) 参考文献の表記

本文と注記で用いた全ての文献を「参考文献」として本文の最後に一括して表示する。

参考文献の表記は以下のとおりとする。

(日中韓語の書籍) 編著者名(発行年)、『書名—副題』出版社。

(日中韓語の雑誌論文) 著者名(発行年)、「論文名—副題」『雑誌名』巻数(号数)、〇—〇頁。

(日中韓語の書籍中の論文) 著者名(発行年)、「論文名—副題」(編者名『書名—副題』出版社)、〇—〇頁。

(日中韓訳書) 編著者名(発行年)、『書名——副題』(訳者名、原著は〇年発行)出版社。

(欧文の書籍) 編著者名(発行年)、書名：副題、発行地：出版社。

(欧文の雑誌論文) 著者名(発行年)、「論文名：副題」雑誌名、巻数(号数)、pp. 〇—〇。

(欧文の書籍中の論文) 著者名(発行年)、「論文名：副題」編者名 ed.、書名：副題、発行地：出版社、pp.

〇—〇。

『東アジア日本学研究』査読要領

【査読スケジュール】

・投稿締切日

(春季号) シンポジウム終了後3週間以内とする。

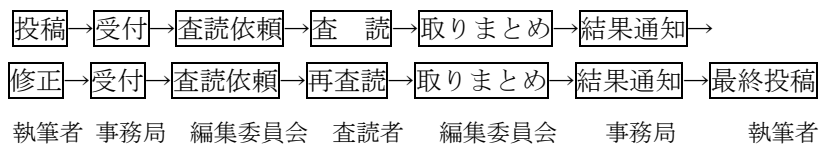
(秋季号) 毎号4月1日(北京時間24:00)とする。

・投稿先: 東アジア日本学研究学会事務局 E-mail: eaja2017@163.com

・査読の流れ

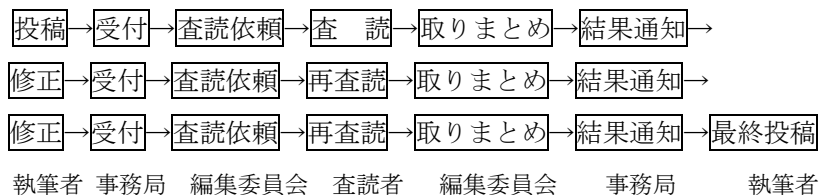
(春季号) 査読は2回までとする。

(2回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。)



(秋季号) 査読は3回までとする。

(3回目の総合評価が「再査読」の場合は結果的に「不採用」となる。)



【査読者の構成】

- 1) 論文1編について2名の査読者が査読する。
- 2) 査読者は編集委員会によって原則として会員の中から選任する。会員の中に適任者がいない場合は外部審査員を依頼することができる。審査料は全て無料とする。
- 3) 春季号の場合は、自己の投稿論文でなければ査読可能とする。秋季号の場合は、投稿者は当該号の査読は行わないこととする。

【査読】

- 4) 査読は投稿者・査読者間、査読者間ともに匿名で行うこととする。
- 5) 判定は、「採用」「条件採用」「再投稿」「不採用」の4段階とする。
 - ・「採用」は誤植程度の修正しか必要でない場合とする。
 - ・「条件採用」は査読者から指摘された問題が1週間程度で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。
 - ・「再投稿」は査読者から指摘された問題が1ヶ月で修正でき、当該号での採用が見込める場合とする。

- ・「不採用」は当該号での採用のレベルに達していない場合とする。
- 6) 査読者は所定の「査読票」に査読結果とコメントを記入する。
- 7) 論文の中に投稿者が特定される情報が書かれていることが査読の過程で明らかになった場合でも、原則として査読を継続する。但し、投稿者と査読者が指導教員と指導生の関係、同じ機関に属する等の場合には、査読者の交代を行う。
- 8) 査読にあたり二重投稿等の疑義等が生じた場合、投稿者宛てコメントには記載せず、編集委員会宛てコメントに記載する。

【査読結果のとりまとめ】

- 9) 査読者は「査読票」を編集委員長に送付する。
- 10) 編集委員会では、以下の総合判定ガイドラインに基づいて採否を決める。基本的にこれを順守するが、このガイドラインに従わない方がよいと判断される場合には、編集委員会で審議する。

<総合判定ガイドライン>

(◎採用、○条件採用、△再投稿、×不採用)

採用 : ◎◎ (6点)

条件採用 : ◎○ (5点)、○○、◎△ (4点)

再投稿 : ◎×、○△ (3点)、○×、△△ (2点)、△× (1点)

不採用 : ×× (0点)

- 11) 総合判定の確定後、編集委員長は結果を事務局に送付する。
- 12) 事務局は、総合判定結果と査読者のコメントを投稿稿者に送付する。

【再投稿・最終投稿】

- 13) 「採用」の場合は、微修正の確認を編集委員会で行う。
- 14) 「条件採用」と「再投稿」の場合は、初回の2名の査読者で再度査読する。
- 15) 春季号の査読は2回まで、秋季号の査読は3回までとし、査読結果に基づいて編集委員会で最終判定を行う。
- 16) 編集委員会は最終判定結果を事務局に送付し、それを事務局から投稿者に送付する。

【その他】

- 17) 「不採用」に関する投稿者からの反論には原則として応じない。
- 18) 校正は字句等の修正のみ認める。問題が生じた場合には編集委員長が確認する。

編集後記

編集委員長 杉村泰（名古屋大学教授）

本号には13本の投稿がありました。各論文とも2名の査読者による審査が行われ、採用11本、不採用2本という結果となりました。コロナのせいか例年より投稿数が若干少なかったものの、じっくりと書き込んだものが多かったと思います。

編集委員 加藤三保子（豊橋技術科学大学特任教授）

この場を借りて、投稿者に改めてお伝え致します。導入（「はじめに」等）と結論（「おわりに」等）の内容は極めて重要です。明確に、的確に要点を記述して下さい。また、独創性も大切です。今後も沢山の投稿をお待ちしています。

編集委員 吉川佳英子（愛知工業大学教授）

今回も多彩なテーマの論文を読ませていただきました。この学会に関わる裾野の広さが実感できました。自身の「問い」に真摯に向き合う姿勢は、不安な今日の社会に、希望をもたらすものと思いました。今後も力作を期待します。

編集委員 金光林（新潟産業教授）

本号の投稿論文の中から2本について私が査読しました。1本は一回の査読で合格し、もう1本は再度の修正を経て合格しました。査読することによって、論文の質を上げることができる実感しました。

学会誌担当副会長 海村惟一（福岡国際大学名誉教授）

コロナ禍の最中に学会誌（第五号）が世に問うことができ、実にめでたい出来事と思います。投稿した論文の質も徐々に上がってきました。学会誌は学会の顔であり、学会の学術水準の表れでもあり、会員の皆様の更なる精進を期待します。

【本号の査読者】（50音順・査読時点）

安達義弘（日韓言語文化交流センター副代表）、海村惟一（福岡国際大学名誉教授）、加藤三保子（豊橋技術科学大学特任教授）、関承（大連外国語大学講師）、金光林（新潟産業大学教授）、中川良雄（京都外国語大学教授）、白曉光（西安外国語大学副教授）、橋本恵子（福岡工業大学短期大学部准教授）、吉川佳英子（愛知工業大学教授）、李光赫（大連理工大学副教授）、李東軍（蘇州大学教授）、李東哲（新羅大学教育専担）

東アジア日本学研究 第5号
Japanese Studies in East Asia No.5

2021年3月20日発行

東アジア日本学研究学会

The Society of Japanese Studies in East Asia

学会事務局 E-mail: ejja2017@163.com（一般）

ejja20172@163.com（学会誌専用）

住所：〒818-0125 福岡県太宰府市五条2-8-8-205

日韓言語文化交流センター

ホームページ <https://www.east-asia.info/>

ISSN 2434-513X
